第三はば丶アに一歩やりぬらん
卷狩がなくば手ごはいかたき也
何の辨天とあたまをふみつぶし
横に寐て見りや大概のしまひ也
たいこくの美人尾州に跡をたれ
二十二日にしつけとるい丶着もの
とびのり〳〵こぎ出す月のくれ
やらうのけいせい追手が五六人
女房もち惚たと言つてつ丶こまれ
新造は後家になる氣で請出され
公家衆に似た人ひたひやらかされ
十三日五百のあたまはりまはし
みそづけで亭主湯づけをお相伴
御湯立の跡ばア樣のお江戸入り
角の石やう〳〵いきて吸付ける
うれひ三重で母おやいとまごひ
私やたべえせんと遣手置やあがれ
つれて謠つてくれをれと新むけん
薄田はあそんだ丶けが德に成り
時政はかすりへばかり廻つてる

小寄講にて見合ふのは二度め也
もろこしで永の御尋ねじよ服也
目あき千人ぢやもつらはうれ殘り
三つ蒲團下手なまり程足を上げ
舌を出し〳〵ゆげ村へ勅使行き
かこはれの狆野郎をばほえる也
かた〳〵へ二本ふんごむ十五日
門に馬たえぬが村のはやり醫者
出すまじき所で淺黄武士を出し
熊坂が手下寐て居るやうに死に
わきの僧いぢかつて居て何がい丶
手を鬼のやうにしてよめ隱し藝
七けんで七文がうるなづなうり
三圍りで日ぐらしの啼くい丶時分
我はらがへると子守はかへる也
新茶屋でわうじに移る耻かしさ
おもてはわうじうら門は弓矢也
洗ひ鯉くつて茅花の直をねぎり
大わらひ富場で杓子おつことし
ぶち負けて四つ手四しんが一四也

堀井町うちはと見せてさつま芋
百貫のかたへ麥わら笠ひとつ
十三日十三ばんのありがたさ
一歩やらずばはぎさうなば丶ア也
十九と二十五といもうりがはなし
切ぬいた判をけんぎやう聟引出
簞笥をからと見ふめねへ座敷也
元日にだいこ一切くつたま丶
田樂を飛越て出てこりやどこへ
廻り部屋引手の穴をふさいでる
呼出しは恥かしくなくうれ殘り
ぐるをやめにして米かみ狙ふ也
猫に十本多いのがよめのげい
おやどまで召せと諷へもどり駕
折らずにおくと名所にはならぬ也
すみだ川一つ着て出て大あたり
奥さまもよろこびありや鈴の音
素人になつて女郎のあなをいひ
色白なつはもの二人出てふせぎ
檢校の女房からだにいもはなし

おいらんは六町と出ぬ言葉なり
惜い木をやね屋はずッか〳〵きり
十七屋とてんはいかに渡るまじ
三つめ迄あがりましたと子を卸し
十三のまんなか頃で四つ手きれ
節分の札をうばそくうばひとり
物さしに打つ手針にはつく手也
高輪へ來るとうしろで帶をしめ
格子からその手を取て筋を見る
御出入のとうふ屋が羨ましがり
くすりとり甘草くつて叱られる
牛かたのあたまの出來る十五日
むごらしい所もあづまの名所也
琴の師へ筒ぽう袖ぢや厭といひ
しつッこい景圖を引て厭がられ
その國で酢を一しきり買ひきらし
うんのい丶高尾は車どめになり
初午は角ッこばかりさわがしい
はな紙をぱつたりと置く夜の音
番付のこし張を見て下女はすみ

水茶屋と見せない性は是々さ

寅三月別會櫻題萬句合書拔

ありがたい御代鎧にも錢をなげ　雅情
許すのはあちら染るはこちら也　季伯
繪に書いた時鳥さへ一羽ぎり　五樂
大きななぶりやう花の山を浮め　雨譚
若後家はごうはらさうに孫をだき　百菊
ぜんでらはい丶方角の紅葉なり　仙路
はたちから十一二年氣らくなり　玄漣
げせぬ句だわへと烟管を廻してる　ぬのし
夜着一つふとんを三つねだる也　五扇
お袋がやかましいとはまだ初心　花口
さすが武士まかねに渡し土手へ行　吉公
御主人と思ふとめかけ不首尾也　亭々
ふじ山をかくす計りが春のきず　吸川
情のこはさうなが這入る松が岡　百千鳥
三とせ見ぬ内にさがみの言葉也　井筒
僧正の一ばん弟子はおそろしい　石斧
朝歸り其いひわけはくらい〳〵　蓼我

ふじ山も有ものにして店おろし　豐好
ま丶子こん性で禿はつめられる　間々
一の人二かいの上でうれのこり　半黃
をかしさは來月ぶんも母しかり　五樂
千兩までの女郎には手づかへず　五扇
あいさう過ぎて一町のやかましさ　且府
しよう文をやいて檢校緣をくみ　四郭
不勘なる奴は都にしやがんでる　五連
神樂すぎうまし乙女へ大一座　且府
うまし〳〵と純友はやせへおり　川里
あんこうは口びる計のこるなり　客來
五十三次へかけると湯もやすみ　季伯
二人づつひつそりとなる大一座　一町
爰らでの質屋五六つき干てみせ　同
吉原がたんぼへ引て猪牙はでき　冬始
ほごすのは親父の代にあんだ菰　如雀
しゝが見えねい〳〵に聟を取り　窓梅
僧正のひつぱりたらぬ恐ろしさ　子樂
髮ゆひも座敷があると一歩かり　南來
耳たぶの小さい奴がつかに成り　狐聲

鼠をよく取るむすめに母こまり　三町
手習のせわがやんだら女郎買ひ　狐聲
百里のよ行き上下を着すなり　一柳
れい年の事にたまげる初がつを　其漣
へどの出る詮議やねぶで笙を吹　巴幸
道春でんを下げて來て誘ひ出し　眠狐
又文かそこらへおけとひかる君　烏鵲
嘘でない紅葉は二度と見に行ず　四郭
あやつりをすく藪入はべたつかず　鯉橋
尾かしらの無いがいせやの初鰹　夕照
葉櫻へ鉦打ちの來るおとなしさ　洗路
切まで見たて仲人のあん氣なり　文仲
くもの歩くのはしらずたまげる　文洞
ぶつてしめたとはむいきな色噺　松國
かどの春跡からも又あとからも　啄梓
年禮のおちおもひ出すにはか雨　澤蝶
隣ではいっそつめられるちふうせず　冬始
念佛を疵にしてよぶうつくしさ　靜風
元船にひかへろといふ御どう勢　蜃虹
團十郎で出ましたとは丶くらう　雀芝

のろつこい四つ手跡から女衒付　卜文
出むかつて噺す袂へなにかいれ　五鳥
突出しとみえて揑ねたやうに座し　眠狐
六十目づつ毎ばんの御そんなり　枡水
石こつぱでも殘すなと御下知也　龜遊
忘れたが因果こくぶを乾かされ　李牛
朝おきとねかねるなかに美しさ　眠狐
夕だちは十七屋から京へ知れ　門柳
青首を取るがじせいの手がら也　眠狐
うら門をのりうちにする目見也　龜船
舞鶴につかまれてゐるうれ殘り　眠狐
燈籠の名ごりたがのとお針みず　燕子
くつ音がすると僧正うなり出し　其樂
二十さつたらずよみ本かたみ也　由之
上下をひきずりもどす中のよさ　狐聲
ちんじちうよふせい人の繩めも也　賢魚
三つ口はぜひなく非人にて狙ひ　下時雨
いわしにたなべはみのぶの時鳥　同
まはり〳〵の小ぼとけは四十七　其岱
ぬけしなりどうして來たとりとう天　弓光

のみで楊子をけづつてる晝休み　林雪
沙彌などのくふものでなし初鰹　旭枝
不如歸さしてもさゝんでもの雨　仙路
たつた三日にてこくりと山椒みそ　同
手の下のざい人（にん）めかけたんと持　百千鳥
貰ひ乳ゆすぶり込むがちそう也　同
いるに任せとは歌も矢つぎばや　杓子
引切れのとべのと琴で振を付け　石斧
匙加減しろうと目には惜しいやう　桃李
高く舞ふ時は小粒を付けたやう　石斧
糸だてをぬいてむかひを叱り付け　同
葭町へつん〳〵としてまがる也　同
もつとよくされる氣で來る三會目　末然
天に口あり一反またへ入れた　水砥
おとなし川へおちる所下戸押へ　同
芭蕉翁ぼちやんといふと立留り　間々
かいどりの禿が二人うれのこり　五樂
ひよつと來たつともゝ度も子供來る　魚交
てへも無い所をあんかう稱美する　五雀
あつけないあそび鼓にいなゝかせ　五鳥

しやこざかしいと鳴神むづとくみ　柳枝
こつちへは來ぬと里から騷ぎ出し　五雲
よねの守りをよぶ少ですくね出し　岩計
やれ遠いぞとと山のが紅葉を出し　女五英
こつぱづかしい聲だよと田舍嫁　五扇
來る人が日和をほめるたび見舞　素鳥
人がさしくづしてしまふ嫁の傘　眠狐
うらゝかさ品川沖へかちはだし　葉十
居ぬ息子雪をわけてのせんぎ也　眠狐
先づ御入あられませうと江戸家老　雀芝
さかなうり待兼山のほとゝぎす　門柳
そのまゝで高尾がのると沈む也　梅斧
百兩はしまい見せろと初がつを　門柳
夜るの雨とごろの人は小言なり　素鳥
母の相槌でなまくらものに成り　五連
錫杖をふるやうに出す下手のけん　葉十
地主をば御妾伯父に書いて出し　五扇
けふも能（よく）ふるはと這入る下手將棊　五鳥
十郎が出るとくわい中箸を置き　眠狐
御客樣だはとけちな上下で言ひ　洗路

横着のしるし黑門出てあばれ　洗路
引けまへの初會ふられて來たの也　花口
目にかゝるものを母親寺へ上げ　冬始
きざな事廊下でちよつと〳〵也　硯壽
うぬ烏めと梅の木へぼうを出し　蜃虹
琴の糸かッ散かして泣きやませ　同
葭町へ行くをめつけてくどく也　花口
持參きん松川うぢのむすめなり　東里
目を覺しやしたおいとん申やす　鐵房
不二山がおッぱだぬぐと九十川　蜃虹
つめが出るさうで明るい内にすみ　花口
泥足で工藤が夜着をはねのける　同
初雪をめぐり日といふむごい事　夕照
もうゑんじゆほうを赤くゑどる也　鳳頭
張拔のえの木を四つ手見て曲り　中葉
手を貸てくんなと五文ぐりをとき　三町
堂よりも茶見世は二軒ひろい也　一口
無いものが道だと欲を深くあげ　庵子
扨御疎遠をしましたとさやをこき　山水
おぼろけの十が息子をよび出し　魚交

半ざらし爰を專途とかいくらひ　其樂
所詮たりないと大山さして行き　山路
花のやま石に出家が二三人　枝鶯
ごふくやも二ㄆ人のつてる寶船　百菊
戲談にうばだき付ていやがらせ　毛穴
葉櫻や毛だらけなものぶら下り　吉公
半げんぶくでちつ首の憎らしさ　文仲
藝能にたつせざるのがさるだ彦　龜深
手いらずの婆ア外輪にこしを懸け　其岱
行く時はもみぢであたま隱す也　同
春の日の餘りくわんこう寺も探し　下時雨
いつそのくされくし卷で芝居也　巴幸
今晩も新造どくしんでふせり　同
すしや程ゑさ箱のある下手のつり　ぬのし
吉原へ行くはと亭主やつてのけ　同
心細さうなたちかと伊せの留守　花口
もみぢは沈みとうふやは浮む也　蔦故
芋賣へつるかけを出し呵られる　同
庄屋がかゝり湯するとほらをふき　萬象
違ひ棚あけて淺黄はしかられる　花牛

つみが無いさうで柳にみえる也　賢貝
木の丸殿にお公家だの小僧だの　萬象
さんまの干物くいさして烏おひ　至方
えりへ手をあてゝ説法とき仕廻ひ　仙路
つめのまく前に目高をすくふやう　同
愛さうに嫁はつるだのお船だの　城山
美しさ一日さやへをさまらず　仙路
角兵衛じし洒落におかめを交て來る　四敬
しよく人を五百叱つて五百ほめ　谷幡
かけ取のかはつてたゝく烏の骨　百千鳥
傘に及ずとみのからかけて來る　同
はやをけよりも縮ませる切落し　米子
御留守居の袴で秋葉くだりしやれ　名古屋
三年に一ト月寺はうけに來る　遊子
花の宵紙をまろめていのるなり　箭車
初がつを女房あたまもくふ氣也　米子
ほそ布もそめ木も母の胸あはず　百千鳥
はひふきをひどく叩くが旦那也　同
御妾のぶきび旅しやうぞくで着る　鳳頭
外々と御見くらべ代三歩　桃李

となり棧敷に見て居るの耻かしさ　雨譚
駕へは無點かなづきは内でよみ　石斧
牛ごみのがつそう肝のふといやつ　雨譚
うれ殘りたれとは愚かあばたなり　同
いつ何時でも女房うんといひ　石斧
ゆうてんをむさい疊へ通すなり　鳳頭
かんじやうで御座へ出ぬ奴を持　礎
所作の内とりて四五人てれて居る　石波
のゝ樣を二度受合ててうし也　玉簾
斷金のまじはり二てうかけさせる　石斧
十六本すると人までくひあきる　李牛
海山をこえて行くのにさしてゐる　同
はなねじり計がねだるかひの國　石斧
前髪が來て酒もりをぶつこはし　柳舍
會津屋でさがしたといふ紋所　同
しげひらは大きな佛火にくべる　五扇
お袋のしようのはけちな宿下り　接州
ゐつの傘ひしこもつひにそッて來る　魚交
必ずくりへ出やるなと和尚いひ　錦江
仕切場へ只右衛門手紙持つて來る　半黄

酒屋の見世に雨かけの四つ手駕　五園
具足代持つてかしかんばんで逃げ　五樂
回向院ぶつしやうゆんべとんだ事　五雀
そいでとりますとげくわ殿平氣也　五樂
道行きをぬいて義太夫本をよみ　五鶴
睾丸をけられだきねをよしにする　同
丸ごしへ湯やいろ〳〵と申わけ　錦江
あつい茶をめつけて歩く一人者　且府
氣の毒さもちやの店へ醫者を呼び　五言
にぎやかさ色々な貌入りかはり　柳燕
ねたばをあはす其側にすウやすや　青口
かたき討しにんの山の近所なり　水砥
あつけなくみぎはの茶屋を二人出る　四郭
ぶッつけるやうに駕賃女房出し　五連
うらゝかさ頻りに錢がほしく成り　且府
まあうんといゝなんしよとつめり上　女五英
逃てッてよそのくひつみ拵らへる　五連
ふう〳〵をやめて野駈へ火を挾み　水砥
化物に成つてとあばたまつご也　川里
踊子に踊れと留守居むりをいひ　四郭

えの木一本に三度迄はらを立て　五園
鼻唄で來るのはけちな女郎かひ　斗石
犬は目があるのにつゐでうちたがり　接州
はづかしさみそ一重の土産なり　斗石
佛にめしをたかせたはさくま也　素鯽
三會目そこいつめたき帶をとき　横好
下げにするさうで相ても髪をゆひ　同
風まけもせず十五夜を仕廻ふ也　和笛
夫ゆゑには金と成つたるをんな　同
舅はぢきに死ぬやうに仲人いひ　冬始
ちよろッこい事をして居る常ざらひ　鐵棒
てのよいどくがい妾やたらしひ　敵吐
やぼな事どこへ御出と土手でいひ　同
手次手に鏡の前へごせをする　淺裏
よその子の體にもてなすやうじ店　清江
山王と神田でもみた金びやうぶ　花口
あじきなくしきみの中に燕子花　淺裏
間男を炬燵やぐらでぶちのめし　川角
わたくしをにらめましたと妾泣き　南溪
開げるとひつくりかへる傘をかし　硯壽

雪のみの庭へふるつて叱られる　梅成
家名からしてなまくちな茂左衞門　其林
しよざいがなさに彼此をしくじらせ　蜃虹
二人とも動くなと石かッちかち　梅守
さむらひのあそび大小なげ出し　同
やせこけて亭主赤子を抱て居る　久鳥
紋付にかけちや手の大きいかこひ　杉壽
どりや己も飲まうとうばへ便る也　同
澁團扇つるすはけちなにうり店　車道
五十程付くがうすめのみこと也　杉壽
車座にならび高尾がきげんとり　かすみ
よわむしと翌る日女房頭痛もみ　杉壽
船のげい向う三げん出來るなり　鯉登
しまる〳〵に又はかしのふはかし　季伯
よく己に犬をけしかけたとしゃべり　洗路
爰はかの文字太が内とびくを下げ　玉章
當分は出惡いひどくりやうられた　百菊
しづウかにしやれと大屋はる氣也　百菊
とこ代ははすはな女はらふなり　魚交
ついそばのつめを尋る不自由さ　十口

長追をせぬがよしさだおちど也　玉簾
糸をこき〳〵座頭の坊はなしなり　素鳥
えゝかんに食てしまやとぶうをかけ　玉簾
そりやのいたりよと火箸で鍋を持　長笑
せんだいで冷飯共があてゝ來る　雀芝
まだも氣特は乳呑子を連れて逃げ　門柳
くま坂はのびを追つたが落度也　龜遊
色出入にはかゝはらぬしなの物　美香
しだれ櫻へ飛びつくと納所おひ　菅江
なき〳〵もよい方をとる紀念わけ　東里
中そりへ竹をうゑとくごふく店　梅枝
なけなしでろを買て下女叱られる　彌柳
四月八日は行水のはじめなり　龜遊
やは〳〵と墨の袂を四つ手引き　素鳥
見られたがつて火を取に息子行き　魚交
千金の嫁一ッこくをぬかすなり　眠狐
恐い事刺身をくへといせやいひ　魚交
ならものも五丁町では切れる也　十葉
衣をぬぐとくわいけんを和尚出し　同
ごふはらさ錢を拂ふと天氣なり　十口

花火をもらひ日がくれろ〳〵　五鳥
一つ着てもうよからうと角田川　魚交
つかへ手をかけるで酒の興がさめ　甲鼠
大三十日ひつひいひいが十二文　三朝
かこはれがほう界吝氣うるさがり　門柳
鑓のしち只一すぢはなさけなし　雨譚
見ともなさ亭主かきのけ罷出る　曾木
あつい事小袖を八つぶつとほし　文祇
大木を持てせなァは江戸へ出る　竹露
袖の梅あれども女房くらはせず　玉簾
とうなんに大あなむちの命あひ　泉河
しゝ口の上から親父いけて置き　眠狐
遠目がね近い二階のうへを見る　東里
はなッぱり頗る小言などをいひ　雀芝
髪をつくねて鼻のさき母洗ひ　五扇
瓜ばたけわるいはなをの切れ所　東里
金持を見くびつて行く初がつを　門柳
女郎やの掟をひよぐりながらよみ　菅江

催主　櫻木綿

天明二のとらの彌生

第十八編

東都前句萬句合判者連名　蝶々子　南花坊　苔翁（當時三代カ）　竹丈　雲鼓　白翁　菊丈　收月（當時三四代カ）　如露　嶺松　黛山　一翁　千鶴　圭女　東月　白龜　露丸　机鳥　錦江　川柳

寐てよんだ文眞中でおきあがり
まつをたてない正月を庄屋ふれ
逞しいふくらッぱぎを下女は出し
元服をいたしましたと病あがり
十四日ぬき身を負つて夜道する
由井が濱びくり〳〵とさせた所
つけ屆せぬと門番こりやどこへ
引け四つとやらが鳴よと母洒落る
親分はこつがらのえゝ松をたて
稻田九郎兵衞が領地も一首いれ
つまへ手をかけると女郎形出來
でんがくのなぐれめらさと遣手言
みやこ人わづかな水ですゞんでる
よめはもうくろ吉に成る恥かしさ
浪へ手を合せてかへるざんねんさ
切れ文を母がついてゝかゝせたり
にはか雨藪醫の門がにぎやかさ
名代にむめわかほどのやつを出し

若後家で七日々々のにぎやかさ
御門をば錠よりひどい石でしめ
しつかりと喰て歩めと下戸はいひ
暑氣見廻ひ嫁の手厚い事をしり
ぶちまけて仕廻と四つ手無言也
先を拂つて金もんのたばこぼん
關もりに見知られて居る中納言
金ぎんは瓦のごとくいゝくらし
す一歩はとつかいべいがこはい也
化物の部に入て居る御さしりやう
門のかぎこゝへよこせと國家老
後の月嫁氣にかけて爪を出し
わづうかな紐をとくのに二兩出し
紫で金澤へ來るついでなり
ちひさ刀でも大きなことが出來
中宿で男ふうじに書きなほし
けつこうな春は世間がひろい也
面白くでん地を五町おつぷさぎ

母も宜しくと踊り子座になほり
祭には御貸なさいと暑氣見廻ひ
御妾と中のいゝのは御もつとも
裏門をたび〳〵いると悟られる
十二日から色をとこねらはれる
かわくといへば梅屋敷もちつとだ
きつい事男にせずとつれて出る
拍子木のまくらに近き面しろさ
はかまはおりで返さぬと衣來る
さたの限はくわどうにてせんげ也
見て居れば座頭は明たがる目つき
たれるうちごぜ大道にあけらこん
こしらへるを見てすつぽん思ひ切
ふりうりの田地に一羽鷺がおり
うら店へ二俵かさねて憎がられ
段梯どう切にしてしよつて來る
まけこけて女房に眉毛付させる
轉寐のつらへ義大夫かぶつてる
品川は山にかけ直のあるところ
諸のちしやたちさたすいゝかげま

はだかッ子嫁しんまくにし兼てる
四方からふでをつゝこむ天の川
紅葉とは古句と女房點にせず
そち色はかぶろの目にも青く見え
ちよくめんの跡に女と千鳥なく
かんだうも一人他人でてッきはぎ
せき將棊手を切つたりとげびる也
觀音さんへ御連なんしとせびり
太郎兵衞はもう〳〵金がたんと
神明を拜んでゐるにもッしもし
今川はだんせつしたとまり手合
牛飼にからかつて居る小間物や
本所へ隱居をせぬとむづかしい
月見もせずに西山をさがすなり
かますこだてにかの大黑をねらひ
地紙うりしまひ左の者ともになり
豆のあるこは飯小町くつて居る
念佛いつさんまいと嫁をいびり
大太刀をきめて鼻糞うりつける
御ふによいは社稷の臣がまきを割

どう〳〵におんぶして行く奥家老
腕けつかつてえび二とは是だかへ
三つ山で御承知ならとしよかつ亮
ありんす國の月を見るいたい事
盗人でさい禮に出るきついやつ
ぎやうぶさま御入りと草津大騒
なく石を鐘と太鼓でだますなり
高尾しすとも吠面はかゝぬなり
半纏で御幸のるすにひよろり來る
しんちうをなめおいづりをぬいてゐる
いせやの年始扇とはそらごとよ
小便所めんぼくもない人にあひ
すりはり太郎巾着を切りはじめ
のろまを出して加賀者を困らせる
へをひつて雇かぶろは二日來ず
五二べたを日本橋からほうり出し
いよ玉やなぞとへっぴりわるふざけ
入道を東魚はたこの見たてなり
つるの來る事を悟つて開くなり
朝ぎりで櫓(やぐら)の見えぬじぶん行き

黄金へ尾かしらつけてやねへ上げ
者どもつゞけと上下(ゼ)ひらりのり
とめる侍はするがに立つて居る
さゝはたき後妻暇まくれといふ
ちう三をぶちのめす氣で女房出る
まんぢうへ馬上から手を三本出し
にげた跡禿は醉てたわいなし
入婿は下女と一所におん出され
生れたとはしの上から呼るなり
子をわしがさらつた話六部する
ぬけるのを弓矢を持てねめて居る
眞言ひンみつでも鼎ぬけばこそ
くま坂は外の博奕はきらひなり
むごいやつ宵にちらりと來た計
冬の内しなのゝ介をめしつかひ
品川はとこの海ともいつゝべし
亭主の着物着て質をうけに來る
車にはりこまれ道鬼は仕廻なり
お門を切組んで根津から女房呼び
公家衆の生醉しやくをふり廻し

大名をねまきの外へねせまうし
大門に屋かた一さうたつて居る
御拜領くま手でかゝぬばかり也
口上にしたがいまするほれたやつ
たつた一歩でくるわ中ほれあるき
おふくろのぬる内ちゑのない娘
久しいふみをよむ所へ暑氣見廻
傾城のからはらへ來るやかた者
どらに成る前あのむすめ此の娘
仲條の門にたつてるのがあひ手
醉たやつ二朱づつ雛をつけ上る
呼つても來ぬはず禿蚊のゑじき
何も縁づくはたぎつた顔でなし
永の日をえりから上で妾つぶし
元おれが地だと大家はくだを卷き
僧正は座頭をひつし〳〵うめ
よの山は裾つゞきにもたらぬ也
大紋をぬくとふだんの萬右衞門
妾が兄何十人もゆびをさし
いふ事のさつそくに出ぬあふむ石

立酒は一くちのんであとをつぎ
中宿からは手を長くしてかよひ
氏神のこわいろつかひおぶつさり
より政が毎夜通ふとかぶろつげ
一人は左衞門でない四天王
奥家老跡から馬につけて行き
夕立に蛇の目を廻はすかやば町
土みかどさまを姉へも飾るなり
あの亭主になる奴はといらぬ世話
首すぢ元へひや〳〵で五兩出し
縄がなくなつてぎよろうで吸付る
小姓あがりは尻つくせ惡く死に
はやり醫者お月番ほどためる也
なまかべは男帶ほどさきへ干る
百三十二文だしてひんをかひ
手の平へ書いてのゝ字は口でいひ
さいはしよじんと島田でおつばじめ
米かみいらいひやうばんの俵也
大三十日本田あたまは廻りかね
かなしさは三日から先かすむ也

さあまく〳〵をきくやいな遣手出る
心なくよめばかきつばたではなし
己がなもかつてとつばな賣はなき
あてもない松に預けてくれをぬけ
三度笠犬にあづけてをがんでる
おく道者明き手の方へ澁うちは
そりや木曾が來るとでんぐりかへす也
拍子木をしろうとの打賑やかさ
三人でだちんを拂ふぬけまゐり
上げしほで御仕合だとやなぎ橋
呉服屋へ腰をかけて丶直ぎる也
九代目は宮をらうひつ迄へいれ
雛の椀小ばかにならぬ高いもの
頬杖をついてた丶みや日を暮し
せッきに弓師へ通ふ小ざむらひ
親椀をちよくしうしろへ隱す也
慇懃にされたでくどきこじれてる
だが敎へたか今のか丶さん女郎
高尾がみくじはじめよし後惡し
しうたんで女房のあてる大三十日

男の貌をかねではるあばた來る
なむあみだぶつ是からは根元記
ぬす人にいはへ〳〵と市もどり
きたアねへ顏で關取かしこまり
びはの弟子一人ふえると二人へり
魂のひたひにあるを四つ手のせ
きぐすりやさく病ぐらゐ直す也
からしりをおりてとこねのやうにゆき
ねだりに來たように座頭大一座
内中ににくまれて居る首まがり
かねは忽ちゆにになつて臭いなり
勝ち負はともあれ女房本目はり
ぼた餅のと丶まじりする神無月
十月ごまたちばなのなかでたき
たけ田のからくり三年ひしがくし
おもしろき夏と冬との衣裳なり
風まけのする荷を牛は二日引き
江のしまへ黑かもばかり二三人
人參を錢でかふのはいぢらしい
市にたはらをふんまへた物目がけ

わつちかへ平六兵衞と申します
じつとして居て傾城は抱きつかれ
あたら櫻をふ如意にて見損なひ
えもの〳〵を提げて市がへり
指で髮をかき〳〵ひどい身あがり
するが町耳をこき〳〵す丶めてる
うろおぼえ十五年跡來たおてら
相模まで聞える程にこりをとり
一夕花で七兵衞なれそめる
お内儀は師匠の留守に出て叱り
よくてうしなんすと煙管振上げる
だいやを二つくらつたに川があき
へッついの前へ跼んで下女がかね
人の名歌を九十九首えらみのせ
はら帶をしめるとあとの五十兩
御所でだといつて石かけはやる也
奥へ行くほど年の寄るごふく店
四斗樽へ傘をつけとく長いしけ
どうてつにとんだれいほふ計り有
振袖を着あきて四火の沙汰に成り

島がくれ行々したがくづれなり
うきふしと花嫁やつと謠ひ出し
きみのよさ蓋をさ丶げた備なり
もろこしの弓矢でぬえは射殺され
羽織着ながらあんどんですひ付る
身をなげた上を館で三ンさがり
いらざる僧のうでだては土弓也
だてに目は二ついらぬと小十郎
三味線の稽古がへりは口でひき
百兩へ三歩がきずのつけはじめ
夏しぶく冬あまくなるほりえ町
何かないしゆに半ばかま〳〵
きたはしを上ると時平ねめ廻し
女房に付きについてるたはけ者
醫者となつてじやう不斷起される
やうきひはいふ程の目の出た女
うばたべるうち御新造踊つてる
妹が子に屋敷一箇所のけて置き
寒い事みじめな後生ねがひ來る
三味線はあいつけたりと撥でぶち

かけとりの小聲でいふは下り也
二日のゆめに七人にはたられる
かな棒の跡から太鼓ついて來る
ひつゝりがふえたを持參惡く聞き
機嫌よくしな正月のかひものだ
氣毒さあくる日土手でつぼにあひ
すつぽんのかふら被つて鑓稽古
湯くみばへ首をつゝ込む馬喰町
きでん身どもで酒代をつき散し
あり助にはくじやうさせる御新造
草木きばみ大たまが落つるなり
吹殼をけしてくんなと撥でつき
とゝヲは山へかゝアは内で言譯
ぎよらんさま御使からの姿なり
禮を持ぬとおひはぎに遭たやう
汁椀をてんでにすゝぐばくろ町
ぶく〳〵をしてくれをれと淺ぎ裏
たつた一度で簪をもうねだり
腹を切るのもあさつてと悟てる
ぶる〳〵とするで三疋しゝが出る

ひげ切をとぎすましてるびん盥
あかい頭巾で太神樂よめねだり
すねた子を壁からやつとひつぺがし
死にかねるはず店うけの寶なり
ふいごのけぶから高尾は現れる
そりや坊さんが居なさると水鏡
さいけんのすみから一歩取に出る
きりおとし中を禿があをむかせ
あま呼りされたせんぴやう松が岡
三河から古風な洒落をいひに來る
らうがいの仔細必ずとなり有り
萬ン木に勝て筆をうつちやらせ
せんつくしびつくし跡が奥家老
懷けんをけどつて遣手上げぬ也
もてぬ奴つれなく見えし別れ也
けいせいがだくと赤子も皿にもゝ
素見物見とれて居ると上げられる
杵をひつかつぎ鮑をくひにより
氣づまりを根こそげはたく野駈道
根揃ひを摑んで殿をおつかける

さし引殘りしほさいへのんでさし
やぼのこつてう踊子をつめるなり
丸わたを始めた人のはつめいさ
大きなほとけ金性と木しやう也
もうひけとおはぐろやからかつちかち
ゑびす講傘をかへしにくる奴さ
黑助のわきで男にばけて居る
迷ふまいものか持參とはだか也
煮立つと嗅アとんやとかぢや呼び
ばゝアは川へ洗濯はせがきなり
閏月よめきい〳〵がわるいなり
大三十日才藏つゞみしらべてる
がん〳〵と始皇の耳の際でなき
縫泊屋氣のむく方へはりが出る
くろ石のごげを引合ひ久しぶり
隅つこに居ても遣手は八釜しい
黑吉になつたとさわぐ長つぼね
最明寺いんぐわな所へ宿をかり
何かないかして前帶が五六にん
下駄とみそほどの違ひは和泉町

そこでおやぢが腹を立後の月
かんざしを二三度かりて試みる
せつな糞たれに張良おいて出る
たゝぬ約束で生醉ちよきにのせ
にはか雨こもをかぶるも心がら
日濟貸ひとりはろじに立て居る
自身には云憎くかろと下女が宿
大三十日火鉢と共にしかんでる
十七屋もめん合羽へうまを入れ
やつかいのあるは義盛がてん也
やろうの唐人に二日やとはれる
もつといねへなと来ざし取上げる
塗物つぎものむさい箱をしよひ
茶ぶくろの立ぬひ下女が申たて
松永がかまをのぶ長こゝろがけ
役所とは身がうはさかと淺ぎ裏
馬喰町てんすゐ桶へたれられる
御白洲でばれをいひ出す馬鹿亭主
田舍馬でも來た樣なせんべい屋
五十年立つとはたごや膳を出し

にくまれば〻ア一軒に一人づつ
生醉はよめをつめつて三日來ず
かりた子に嫁うつくしい貌崩し
白い頭をなでてやるくしついで
むしが出たさうで新造笑はねい
狐の嫁いりちう王のとこへ來る
雨乞ひのなかに川ごし二三人
貸があるさうで御慶をざつにうけ
をしげなく床をはなれる一人者
四つ手にせなか撫られる耻しさ
江の島へあはゝの追人まはる也
もういりやせんと丸綿嫁くづし
是から日本の地だとちよきを出る
衝立のそとから白いあしは見え
度々かりた小袖を直に形見わけ
つめられるたんびに娘そだつ也
暮の文せひなくあいそづかし也
ぞく方とじつ見えますと四つ手言
強右衞門を捕へたかいもなく負る
松井屋はやつこ一人をなぶりきり

能い天氣こん屋金物見世を出し
藪醫者は一ト人活かすと二人しに
若い内だと土手を行くすけん物
御とりあげ無い願書湯屋ははり
女にはさてたのもしいをとこ也
息をひつ切ると田舍は米をつき
あの瘠で御飯は四せん五せんくひ
見えて居てゆかれぬ所は遠江
是は御名作とばんたう百なげ
眠つたら御免と淺黄ばかにされ
おもてからみれば水茶屋一ト通
いじろきもないに下見に琴聞せ
姑婆死にさうにしてよしにする
餘り苦さにつらせて使者あるき
わきの僧たづねてあるく百檀那
得がたき金去りがたき嫁をとり
お江戸でもそとが濱から御登城
三會目所存があるではやく來る
のりものに醉たを妾ひしがくし
夜具をほめながら女郎の母無心

はいほうを大くいへとはやり醫者
三つ蒲團柔らかにしてはにた〻ず
落文しふねん深いいしゆがへし
狆がほえるぞと目あきを起す也
わるい丁簡子をつめるものをよび
人間のくわん女がみんな嫉む也
い〻きもの着ると内でも畏まり
財布でももたしやつたかと女衒聞
ばかな事かん病もせず里へ行き
春の一時をたこにて子はをしみ
中野で鼻をたれて古郷を思ふ
百五十日のこしおきふきたふし
あみだの光はおしつめたこん禮
しがみつきやれこい〳〵と五郎丸
下手な奴川中でかやた〻むやう
かうさんのやうに大小渡すなり
棒組やおよらぬ内にねがやれな
ごふ晒し後家に二度迄つ〻こまれ
おつ〻けてしまふとごわり〳〵來る
大神樂あれは下手だとだます也

わたしもり毎日ひとつ所をこぎ
狼をころしたやつががいをなし
石垣の向うにとしまならんでる
こ〻ちれいならぬは男ほしい也
肩衣をかけ百せんをくひに行き
とつぴやひやろに見物が五六人
をそはつた通りに雛をねだる也
留守を預かるから嬶ア左衞門也
へんじやうなんしでお内儀市に立
焙籠(あぶりこ)をかへと手桶がものをいふ
もうかく事が無いさうでかしくやア
をどり子のあげ場は石の鳥居也
讀かけを醫者は疊んで籠を出る
ひら澤にも〻ひきがけで二三人
鈴と一所にあんどんへ焚付ける
長追ひ無用と六郷からかへり
うへものにしよくるい息子一歩出
楊貴妃はろくな一家は持たぬ也
ぶつまねをして直をつけるはなねぢり
さし上て打ひやうし木の面白さ

かっちかち打っと風呂敷ひっかぶせ
明き御所にの太い面で殘つてる
湯屋の臺ひねつた錢でうめる也
ほねを殘すから知れると禪坊主
首とゑづふん散かしておつかける
書置のいかさまに母ひよくらのり
かた〳〵を殘して嫁を笑つてる
あれ計り女かと伯父いきどほり
白い物はきなんしたと子を歸し
つれのあひかたへ初會は便る也
きつい罪座頭の内へ入りびたり
堀へ曲るとちよこ〳〵とろを遣ひ
江戸の同役をにらめて座に直り
箱根をおつたて丶も一里も足ず
柏餅くばつて來ては一つくひ
呉服店うかと覗くとらんがしさ
そくたいの中へはかまで紛込み
僧正へ大きな御手を三度下げ
夫もたぬ身もましかやと尼公言ひ
笹ばたきめでたくするは十二月

日本のたら〳〵下りへ門をたて
かなでした人別帳をむすこもち
内證もぼろ〳〵になる口をしさ
とまる時分に道中をしはじめる
傾城にあすを案じてしかられる
鶴は下げ龜は山ほど金をしよひ
どきやうを見定めて夜具を賴む也
つれないにやおとりとしなの供につれ
まけたもの計り殘つてはなしてる
五ッをの車はえ丶が大ぐらひ
大通ふ上人御文をかいて置き
だてがせき其頃ならば御供也
あした出來ぬ番所だと土手でかし
軒の燈籠二度の月に金がいり
持參金花はあれども筋がなし
太平にして元の座へ御なほり
僧正は始めて公家を二度騙し
定まつた家のあるのに山で書
恥しさ途中で人の手にわたり
四々人にかなきり聲を四つ手させ

立舞ふべくも有ぬのに二十四五
若後家は仕度金にていつたやつ
第三はて留めの所へ一歩なり
ざしきらうあ丶月われを亡せり
情のなさ座しきへ秤持ッて出る
そのなりでいきなと女房聞さかなり
生醉の手や足四つ手からこぼれ
遠くから口說をみればばかな者
ぶち殺しても金になる猫をくれ
か丶つて丶でつち十三文めつけ
ちひさな納豆百兵衞どのへ遣り
しめ出しの樣に朝湯を待って居る
をかしな聲になると母油斷せず
しな介やお鉢の底を鳴らしやるな
鳥さしのとんびをねらふ心あて
大一座中にしろうと五六人
梯子賣まけるとやねへ懸てみせ
病人のそこらをさがすけちな事
抱た子を落さうとするうばがちわ
き息子は連に目き丶をして貴ひ

いつなりと屆いた時がけふし也
ほれられぬ氣でかたる也大さつま
今日の御きたうからッさじき也
きたアねへ貌で關取かしこまり
二人ぶちちまきへ添てやり始め
すぐにじゆくだんい丶男い丶女
眞黑なもちをたかには見せて置き
おぎやア〳〵と連節の恥かしさ
あたまをまるめて賴政いらぬ事
梅にうぐひすさくらに生醉なり
さい日に髮ゆひひくてあまた也
知りもせぬ醫者を呼込む卒中ぶ
大黑の外を目がけるわるいやつ
後家のしち男ものから置き始め
惜げなくぢまけぬしへあけんせう
葭町へ行くには和尙たちのま丶
清水をいのれどあざはぬけぬ也
あつけない夜を傾城に拗られる
ぶりがれん知らぬに家中氣がっかず
びいどろは心づかひのみやげ也

湯もどりの小ぞうを亭主左まへ
生酔をひよつと押へて放されず
是に居りますと傘屋は罷り出る
お齒黑壺へぶちまけて元結あげ
門口でしよひなげをする猿廻し
あいちつとおとつさまへとおつゝける
虛煙草すひ〳〵見たり見られたり
御飾はわしにくれさい薺うり
あれにかう是にかうとてまけた奴
二度おぼこ嫁は二子をうんだ樣
つば元をくつろげて居て藥うり
ごまめうりえだるに一つ貰はれる
わたし舟ゆるりと馬の貌をみる
柳さへたれたまゝゐるあつい事
先づ一寸うんでこべいと臼を上げ
ひとりものしんだ所が寺はなし
風雅な異見しんで花が咲くものか
ひどい夕だちこしやにも二三人
とんともうでけぬといふにまりなさろ
花火にしんだい幽王入れ上げる

本ぶくのくすり隣のみせで呑み
わが物ださうでお針はついで居る
おれも乳のまうはいやな子煩惱
西瓜の土產あけずとも見える也
うひ奉公內儀の腹に氣が付かず
三會目くれそめて金ひゞくなり
金の龍坂東一の目拔也
金びやうぶ物見の松で見て通り
女房をよしのへすてゝ堀へゆき
うれのこり連のあるのが力なり
舟いくさすむと淋しい師匠さま
のぼり棹五六本さすいゝすゞみ
齒磨はやうじですぐに壁へさし
かす時は至極しづかな座頭の坊
いゞくらも子を藥研にておろす也
仰ぎ願はくは水をと暑氣見廻ひ
首がないぞよとひそ〳〵里の母
子をたべた閻魔樣さと嫁はなし
二日の夜みな正直なかうべなり
あくた川こしても先に當はなし

かつをの生酔はち卷しめてねる
五百から一たいぬけて人にすれ
船頭も兩しんぼだい二まいつき
八十がみそをはやくと丁稚せき
形見別貰ふ氣で下女やたら泣き
とつてくんなとはご板を胸へあて
葭町の月はおかまのだんごなり
追炊の下へさんまをつゝくべる
ほつごんをしたやつ寺を先へたつ
忌中札さし賣が來てゆすつてる
御妾のひとりあにさまはぎき也
泪を棚へ上げて置くかたみわけ
來るも〳〵坊樣だとあやめいひ
とんだこと遣手巾着切りにあひ
涙片手にすりこ木でこづくなり
銀のひるまき若殿をうむともち
くやしくは尋ね來てみよ松が岡
やすなりは性根のしつぽ見現し
せなが代になると泥田を棒でうち
紋付にひいきをはぶき欲がしれ

辻番と思へばうなぎやいて居る
見ともなさ猪牙で二三度ぶち歸り
御はりさんおいらんのうとむごい事
もりつけた上で六夜を仕廻せる
にた聲がするとみす紙かざす也
なほらねえ病ひは無いとぎばは言
松のくひのとせめだうぐ賣つて來
短ッかく牛戸をよんでせなァ來る
乳飲子をすてさうにしてむにする
月のばをふさげて花の江戸になり
越後屋の稻荷を其角はぢしめる
落附て居りやれうものか數通來る
花嫁を見てこようかとはかま着る
こぶずるめくひきうにしてよむにする
淨るりを始めてつくるとほり者
初雪にいゝしめりとはたはけ者
天狗は是をたべますと鍋いかけ
といたゞいてははんとりイ〳〵
どうするか見ろと小判を子に持せ
中條へたのみませうは只の用

よく〳〵のばか葭町に三日居る
上下で手鍋をさげるとしをとこ
猫も杓子も吉原のじやまをする
錢車やうじさしなどおッことし
市でない事は息子のなりでしれ
些まアだかせなんしと筆を置き
い丶法事二十餘年にふしをつけ
拙者このたびと萬歳帳を出し
間違ひイんしたとあばたは又座り
子の灸はあくたい笑ひ〳〵する
熨斗を付ても只吳れぬいせの御師
政むねは六月見てもさむいなり
ぼうし針おつたて尻でさして居る
何のおこはだか使ひにそつとき丶
座頭の貌をねめつけて金かへし
一年とおほきな魚をだいにのせ
ごま鹽は當にするなと師匠いひ
鶯とれん木が出るとおでん也
たゞの名の女新ざうこはいなり
あした眞間夕べに道を聞て居る

附會のみかどを船へのせてにげ
ちよき舟にたいこと見えて畏まり
三會目金のへる木を持つて出る
われ鍋をとなりへも遣る女同士
煙草盆きらひなやつも前へ置き
日本のせうゞ〳〵あかねにもならず
樽酒の駈出すやうなにはかあめ
此頃に來るよ擂粉木まあよこしや
羅生門おに迄かたはものになり
草履をぬぐと名代はどつかゆき
ゑなにすかされた程嫁わらふ也
かもつがひ寒氣當りの目が窪み
女郎かひ仲間はとんだ仲間なり
鉦太鼓せげんまじ〳〵聞て居る
下に〳〵で田舍ものかしこまり
鳥追ひにつらを見だして申入れ
孝行なつらで燈籠を母にみせ
半殺にしては逃げるはやり醫者
豐年のむらへ目切りとうす直し
傘といふ字を推量して無筆よみ

ふだらくの地に善女人二十人
蜻蛉はとびさうにしてよしにする
ぬす人猫を豆がらでくらはせる
はつきりと否ともいはぬ大和茶屋
傍輩のお松はめしをいつそすて
禿をだましなにかをき丶たがり
金がはくなると中宿いけんする
ゆんづゑでこれ賴光よ賴光よ
諸人是をみれば美麗な神子まひ
高なはへまつりの殘る五六日
朝歸りおまへもまあがはじめ也
三つ蒲團うてうてんへは程近し
四人で三十六里のそんをする
とうろ見にぐちな女がぞウろぞろ
てう山は見世でのてうじ頭なり
よしひろに燒刄を渡すすばらしさ
賴光はおきると弓を引いて見る
こち〳〵としたみそあきは道で食
傾城の簞笥なんぞかありはあり
行かぬのみならず道々異見する

見物のむなぐら取つてほうりこみ
門涼みおらが二階の戸がた丶ぬ
おめかけは三をくんなの娘なり
座敷の眞中へすわりしかられる
氣のふとい女はくわよう夫人也
しかるに娘弓矢をとつてはやり
ぬきみにてをどるさい中門破り
油をついで行くのだに謠ひやめ
へんな事始皇ちんぷんかん嫌ひ
出來た氣でさじき一けん棒にふり
御うた丶ね盗むが如く烟管とり
袖はふれども三十のうへわらは
坊主にもされる思ひで嫁ぬらし
かつもつて急ぐ氣のない渡し守
にんさうのい丶ぬす人は陽虎也
外科へいさぎよく行く向うきず
月の座へ息子はひらき直るなり
世間のきこえ三味線おとなはせ
皺よせるものを落すのをしい事
ほれたをすけん思ひ切り思ひ切り

げんぴん僧都なけなしを引剝れ
まりをつく娘はひざであるく也
しな戸の風にさそはれて御用ぬけ
お内儀も手しや火吹竹にてうけ
梅花を折てこいたごへさして來る
土佐ごまぐるみ虜つたむさし坊
宇治川の水をたはらで堰とめる
めえめッと泣なとかいる料つてる
あまくさも小鍋だてしたきつい事
つき合ひで四つ九文はる堅い奴
どぶへたれたで馬方は安くみえ
人がみるよしねえと半吉はいひ
しはい奴何んぞといふと時節柄
直實はいゝあきらめの返事みる
賭將棊負さうにしてよしにする
岡持へお釋迦を入れて持ち歩き
あからが好きさと山姥綱へいひ
二十日過まはりに鎌をかりられる
音のせぬ樣におしやうはどらをうち
靜まつて柱のけんをやつとぬき

范蠡が居ぬとめいどがつく所
夕べにはいしや晨には僧と成り
手傳を恩にうけずに井戸をかへ
しまのせんざいがよりうは轉ぶ也
人並にくへばしなのは安いもの
木ばちのそばでつへの方〳〵
咄しでもしなんしと名代ぬかし
百人でおもて八句へ四季を入れ
京をくらつてなりひらは歌まくら
料理人つるして置てふわけする
判取へおもたく渡すはづかしさ
二百十けんお長屋のはそんなり
琴箱をさきへよこしてぎ王ぎ女
藪いりは能い人間に成つて來る
水茶屋で女郎見せてはゝをはめ
花のあす下戸にしたゝか異見され
急なかけおちゆひなふとすり違ひ
朝歸り出來ごころではすまぬ也
直次第で危ない事を神子はする
今日庚申だとしうといらぬ世話

藥種屋の近所へ留守居入れ上げる
部屋住を四五人つれて茶屋へ出る
金事も女郎のいふはいたいなり
仕方なくたて看板の醫者へ行き
暴食をしにぞろ〳〵と江戸へ出る
いわし迄女房さかさに直をつける
みそ漬でおやす湯漬をたべて居る

卯正月吉例角力句合

催主　星運堂
薩　秀堂

御座敷の松と疊はおないどし　櫻木連　芦露
たッた一ト色どつとせぬ京の水　近江連　漣
にくい事めかけ王位に望みなし　蓬萊連　五扇
よしの山十八文字でとゞめたり　近江連　東水
一生けんめい日本とかいてみせ　櫻木連　玉章
來年のえはうで大工仕舞ひなり　若菜連　清江
居つゞけは白たへさまの御客也　蓬萊連　東之
八朔に四郎兵衞至極いゝ名なり　柳水連　扇車
三位の官を引ばいでかしへ下げ　蓬萊連　五樂

そう泉寺迄かへと猪牙太儀さう　山水連　木綿
うじやくの飛ばぬさき番頭は歸り　柳水連　玉簾
三歩がものあり一歩がものなし　八重垣連　中葉
高もりは木曾このかたがはじめ也　伊呂波連　玉章
ひなの時遠い所のものを見る　杜若連　亢樺
松過の禮者はひどいくめんなり　柳水連　梅谷
いそがしいつとめ肩衣竿へかけ　櫻木連　兎明
春ぶくろにはうんざりな財布也　近江連　山覺
子どもと同じ事赤いが目につき　八重垣連　狐聲
梅の花公家衆が持て出てなァに　名木連　三町
萬歳で物もうまくしかけていひ　櫻木連　花口
ちとたらぬ男にふみをたのむ也　蓬萊連　素鳥
脊が高いよと若後家出來かゝり　柳水連　雨譚
着うりとんびを切つて人だかり　若菜連　敵吐
きつとした御中宿はにまんごく　櫻木連　興練
おびひぼをといて付合ふ三會目　同　如雀
姑ばゝみぢッかいめで嫁をみる　名木連　美德
天とうや屋ねが吉野を十重廿重　櫻木連　玉章
もちつとで狐王子をはらむとこ　柳水連　歌橋
繼ぎをあてながら男はいゝ物さ　蓬萊連　雀芝

暑い事あたまのかけた鳥が出る　若葉連
來觀音へ四つ手で參るやうにみえ　櫻木連
萬玉章藤澤のけび一ト盛り直を上げる　近江連
東水陰の無いしうと一人と仲人いひ　櫻木連
雀芝一つ目で五十二るゐの外をかひ　若葉連
角市俄あめほねのくさつた人が來る　杜若連
亢樺大的を撰ぐつて居る小ざむらひ　水仙連
葵印萬灯は宵一灯は夜ふけなり　柳水連
糸遊九月しまらう普請さと大工いひ　蓬萊連
水砥えり元につかぬ手本を高尾出し　若葉連
清江言はれざる帆を手傳つて叱られる　杜若連
西喜舟ちんは小遣ひ帳の初てに付け　櫻木連
玉章金札をたてさうなとこたつた百　草花連

重いかへなどと善光おぶッさり　若葉連
金旭材木のかげで千住もみんなうれ　櫻木連
玉章老人に赤染右衞門あげられる　若葉連
淺裏たつた一字のことでやすい神樂　櫻木連
里蝶大門をはいると地もの影はなし　朝日連
破琴下げ錢で梅や榊のしたを行き　櫻木連
左滿す見物おんなじやうに紅葉賣り　あさひ連
破琴

飯がはり婆ァたいこの音もせず　櫻木連
兎明いうぐんといふは薄田隼人なり　柳水連
雨譚迷ひ子のお松ほつても知れぬ也　蓬萊連
五盛晝飯をあらなはで卷く牛つかひ　杜若連
里丁上下でどや〳〵はいるろじ塞げ　柳水連
糸好にげ水の頃居ましたと太田いひ　櫻木連
都宮松坂の切りたてへぎを抱へてる　近江連
漣守にこそあげましたれと宿はいひ　伊呂波連
琴印湊川ほんにないたと左兵衞いひ　櫻木連
都宮氣が荒くなくてはお杉痛がらず　杜若連
西宮ふり通すひがん堂守あがつたり　山水連
木綿猫の出し入れさへせぬと九月いひ　柳水連
石斧

第十九編

川柳評長春角力會三會入
淺下境　吳陵軒著

手へべゝをかけてかゝ樣追廻し
忍べとは娘づぶとくなりはなり
やぼな奴一歩がくらうして歸り
その中で高は女郎のかひがかり
どろ足の干る頃あやめ賣しまひ
木綿賣まかりませぬとのしかゝり
出來ぬ奴大きな聲でいてえはな
ひぢりめん指へ引かけ三を下げ
屋ねぶしん亭主向うに噺してる
にく屏風のけて法眼さじを取り
吉野丸小べりでさすと寒くなり
女房をおそろしがつてたゞ歸り
やさ男待てと四郎兵衞ひつ捕へ
をばが來て黑吉にする耻かしさ
雪の供此奴がなんのしやれだらう
國家老ひつゝまんではぺへをする
やまと言葉はおくびにも貴妃出さず
交り見世こはゞ〳〵いゝをあげる也

どつと笑はれ渡し場で婿わかれ
京町へ江戸をくらつた客が來る
きついこと十五夜および十三夜
どのまつりでも深川の親父出る
四つ手籠らう宅へ來るいぢらしさ
水の無い川どめ江戸の出口なり
雨落へすてろはけちな月見なり
傘はちりあくたよりかるく出し
へらさぎと鶴とで松の穴をほり
藪いりが來て二三日さいが出來
せんがくじ他宗もみんな引受る
ばつた〳〵亭主のかはる美しさ
人中を見ろといもが子やとひ也
かうしなれてはと講親二貫出し
禁酒ことわりて御用を追かける
ちう一にしやれと母は一歩かし
數の子で無性に下戸はのめといふ
たいくつの中水はゞが一里なり

参つた沙汰をきかぬ古川やくし
けいろくをゃッぺし下女はほじってる
あくる朝六部はだかで村へ來る
えの木へ指さしてあの笊はいくら
痛い事ばゝァをもつていはしむる
藏ににたものを持つてる村ぶげん
そんなものだと關取とながし合
かん定のわるさ五人で二歩殘り
ばか亭主湯で聞きかじり大おこり
ぼんならぬ女とさくま思つてる
口すぎになるとは見えぬ出合茶屋
盆ござを押の跡にしよつて行き
あれと出るなと兩方の親がいひ
ふんばってこようと婆ァ江戸へ出る
四つ目がありかひにくい藥なり
おつりきをやるとあるきに揉せてる
にく饅頭をくつたのがおちど也
ぶち殺された命日にむすこ行き
なめかたで織田程勝つた者はなし
御來迎三文ですまぬうみのはた

芝居とは虚言女中かげまなり
他國からおすみおよしが來て植える
あくるあさもうぬえの繪圖〳〵
よし原がいつち下直と初會ぎり
平家物がたり大めしくひが書き
摑むのをみると隣へふいて行き
まつち山今では猪牙の目あて也
女房のいつぱいをするいつた朝
御用には佛さまのを下げてやり
尻をまくつて親分は座になほり
さう申しや御合點だよと貴妃は言
百介はふしみ町からすつとぬけ
女房をとりやげて置て療治する
いさゝかなじみ禿にかくれ事
くつ音をきくと名代うつぱしり
若後家はあばたへすわる呉服店
中宿へ出家這入ると醫者が出る
大門へさかきの這入る賑やかさ
むづかしい判取の來る茶うす山
鶴の一こゑ折かけてかぶろたち

中なほりすると女のこゑになり
泪にも少し間のある百箇日
犬にきうすゑると猫にばける也
ふるしきに文何かしら借にくる
指ッ切してけいせいの中のよさ
文など書いて居るのをあぐべからず
承知するさうであたりを娘見る
むす子はつゆめに七人一座なり
ぜにのある貌をして居る松の内
古きずのさいほつしはす十四日
あすはとうからおひんなり乳母困り
それ善兵衛どさがりんす〳〵
はやり醫者額のはえた供をつれ
仙人さまアとぬれ手でだき起し
妙惠上人根をおしてきめられる
月はなはおやぢ小言の定座なり
あの馬はのれますまいと最妙寺
死人の山でもねだれと般のちう
碁で無い時には黑石かくがいゝ
初がつを女房日なしへいつゝける

雨宿いゝおしめりといふ奴さ
酔たぞ〳〵と來るはこはくなし
三ぶ六のかよひだと雛ほして居る
櫻ならさくらで歸るごくいん氣
中の町さいたが通る見ともなさ
谷七郷を豐島屋でおつぷさぎ
間男をせぬは手前のつまばかり
へをひつた子供をさがす師匠樣
立聞きは今來たやうに内へ入り
眞白な酒もゝぞのゝゐんへあげ
はなれ馬二階に居ても戸を立てる
遙拜はどこでも出來るふじの山
いけねへ唐人帶だのころもだの
人に恨みつこいもなく不二はみせ
こゝをよう聞やと娘をやりたがり
屋根舟で笙をふいてるべら棒さ
しなのから來て名月を一つみる
九十川たのみはあたまばかり也
狆がほえると女房を先づさぐり
いびり出し憎い物をば嫁はもち

ふじ川がとまり工藤はさいご也
雨乞ひの中に川ごしふてへやつ
い丶人ににたが手癖がわるい也
生酔がのつてわたしの人がへり
しゆんせい卿の片腕を打ち落し
はかま着の頃から手癖わるい也
男のふり袖もよせぬ御大びやう
てんがいでよごれた貌を隠す也
覗きに計り行くのだにかごい籠
げくわの戸をほと〳〵叩く後ろ疵
よくつらを蹈なんしたとぷつり切
こりや膝が折れるはゃいと留守居言
すゐぶつて名代をとりいざをいひ
いつそ面白く喰ひこむあら世帶
ちつと宛母手傳つてどらにする
馬ぐらゐやつたがい丶とあやめ言
いろは茶屋笠森ぢかく氣に懸り
目を廻はしさうな所へおくり膳
杉戸へは二品三品出して置き
此子こ丶にとつぐでよく流行也

ひしこうり伏見町からかしへぬけ
いりむこは花の外には内ばかり
目ざすてきろせもの組がめっけ出し
手のそろふまでと内儀の細元手
内かぶと質屋へ見せる口をしさ
花嫁を冷とかん酒のあひへ出し
氣強くもこな〳〵にする天蓋屋
花の雨のちは後生のさたになり
麥飯の後あやまつてあらたまり
女郎かひたがるも息子虫のせい
も丶んぢい出るともう母はおどかす
御紋からしてかどひしな小笠原
けいはくのいひ損西がはれる也
判じてる内にえだるのぬしが來る
恥かしさ丸一へつわはつにはき
色をする事はあくたの如くなり
味に義理たて丶繼母ひいきよさせ
わきざしを仕廻と弓にか丶る也
小兒醫者扇いたゞきながら立ち
疊を叩き立てどこの目ぐろだよ

一所懸命の地をむす子はかち地
や丶あつて地響のするい丶普請
藪入へこ丶ぞと息子三みをひき
お中をよんでくれと米さしをぬき
馬の鞍人のしよつてくばかななり
魚つりがきたせ〳〵と赤がしら
供の醫者もり殺したに相違なし
やくざめに秩父の路銀皆にされ
子母錢を財布で日々に取りに來る
なせ醉はせなつたと撥で叩いてる
才藏は大樹寺などの百だんな
ばからしさゆやへどてらを返す也
そらつこと二三本書きふみのやあ
手ぬるさは承知する迄くどく也
釜をかさないで松永しめられる
めう代へ欝憤いへばしりんせん
さんげ〳〵藤澤であそびました
何もいはいたしませぬと四つ手敷
百人のなかに目あかし一人居る
六つ七つからしこまれて琴指南

繼母と睨んでせげんやすくつけ
場ふさげな佛はむかしいまの京
歌がるた女の中へまけに出る
暇な晩見世で三味線手をつくし
駒のかしらも見えぬ程松をつけ
とちぎりとうたつて井筒叱られる
大三十日たび立程のいとまごひ
兩替屋足ばやに來てさとられる
やね舟のちやうちん顏の中へさげ
雨のもる家とも知らず左馬の頭
政宗があるでとむらひ二日のび
天がいは雪折竹のもやうなり
江の島へかくれてまゐる新五郎
まつぴるま雨戸をひくは爲になり
やかましさ片々の子が花を持ち
いたい事女郎を一人もちにする
灰ふきを持つてみて居る雪の朝
囁くと直きにつけ込む夜籠かき
中條へよめのかつ込むはなれ馬
大やしろ近所でおくにうれた物

足留のまじなひ帶をかくすなり
遠州のあくびするがへうつる也
下りとりおふくろと見て附上り
すゞの音人足しげし中の町
ま丶母のはていとやはり〳〵
世間かまはず鳥追ひのけいこ也
行がけのだちんはいらぬ樽拾ひ
けちなからくりのぼり迄吳れる也
針をのむうちにころせば殺す所
いやならばい丶に若後家巽見する
酸漿をふいて居るのと見立られ
しやうりゃうと女房を留守に急な旅
葭町の客女人とてへだてなし
組んでおちるとは圍ひのみらい也
うしろ疵湯ばん大屋へつげッ口
お釋迦樣のにやく僧は阿難尊者
こがらしに高野の蛇まで鱗おち
兩耳の無いので內儀かねをつけ
品さだめとは錢いくら米いくら
高縄へ來るまで帶を前へしめ

しうとめの本ぶく嫁は十九なり
引剝れもしようかとこはゞ〳〵年始
座頭の坊せッつき乍ら年をとり
淨るりのぐわんそはつうな女也
さすがは女眉とるをごぜをしみ
坊主衆と坊主を四つ手よく見知り
つうづき合をやめやれと母異見
岡場所のきざは子をとろ子とろ也
もてたやつ帶ひろどけで拜んでる
鏡とぎ千代も存じてをりまする
こ丶にけつかると見て行く松が岡
鯛をなめさせてさかなや寄つかず
繪の所が出てよみ本を子にとられ
足よわをまめな男がつれてにげ
度々後家に成つたは馬の內侍也
唐詩選よむとくじやくの尾が欲い
四郎兵衞から請取柱へく丶し
鉋くづなんになさると橋大工
お障子が明くとをし鳥岸へ寄り
御退屈いくらか金をきしへすて

ゑぼし狩衣をぬぎ捨て外科にみせ
むらさきは男えらみをして染り
ほし入はかへつてたかい五丁町
耳たぶのわるい唐人つかにつき
面白がつて子のくゞる土用ぼし
一つかつぐと樽かひと見える也
今以て三日にあげず京でほめ
大せいのへんじに若衆一人來る
狐つり猫がか丶つてもちにつき
はなれ馬よりさわがしい繫ぎ馬
今のか丶さんは吉原からといひ
おやゆびをそらし禿をおどす也
御めかけの手柄木刀だらけなり
ねきものが二度めの四つに二三人
旅むかひ五十里先のあくびする
中條の跡明店でや丶しばし
困つたものといふ內に大三十日
若いもの諸さむらひには困る也
茶をのんであひもなく來る柳樽
一客がこがねの月りんをいだし

御用の書置いろはでおいせさま
たゞ今和尙大通とかはります
鎌倉へ行くはずふだんあまよばり
御持佛へ殺して立てるかきつばた
ぬり樽を下戸ふ承知な坊主持ち
孫が出來たらくひさうなおば丶樣
辻番はうつをおひ目にはつて居る
ともかくも先裏門を出て見やれ
杉戸迄殘らずうれるい丶おくり
切落しごふくや穴をあけて出る
口上があがつたおめしたべて行や
五六軒一度にわらふやうじみせ
茶わんうり身代切にけつまづき
拙僧までもほんまうと首をみる
たかみでの見物茶人おちどなり
しうれんのしんをみのにて出せといふ
今に日が當るとあわぼうを直切り
子をほうるまねをして行く橋の上
紙帳の內へ重箱のさかづきの
村芝居せなアふところ手で這入り

作大將ぐるみ三文でかひ
衣被えんぎの御代にくひはじめ
まん中が出てもやつぱり立かへり
百二十疋へびをいれせめるなり
三會目同士が來たのでむづかしい
ばくちでも無い屋根舟が氣に懸り
山とうのゆふ僧月を二つしよひ
下女心變りでしちをたてこづき
國忠を伯父さんとろくさんはいひ
庚申でしに繪をかへた事がしれ
だがじやもを告たか座頭大おこり
轉びとは中ぶらりんのばいた也
死石が玄關へ來てはどなるなり
鯨身を銜へて尻をひつぱしより
目あかしをつれて檢校あるく也
客殿につるくつてあるけちな籠
高をくゝつてかこはれの出來心
いひ草にしをると論語取上げる
夜具のぐわんをば三圍へ懸ける也
尾張町木の丸どのがにぎやかさ

むみやうゑん聞きに歸つて叱れる
かばむくを着た人眞綿買に行き
車座の女中のなかへ高尾出る
じやう談の樣にたんすや鋲を打ち
はしごから上は私があづかりさ
よんでやらずはとすけんの母は言
時平の子孫らいしははら田なり
品物にはまりえんがはからおちる
未來記で見れば高ときさかな也
ねむたがる子を出遣ひにつかふ也
ぞうに續いてあついのは法師武者
ざら錢の中へしに繪はむぐりこみ
やすい土場百度參りを一人つけ
子に叱られた吹聽をしてあるき
四五日は引き人の多い高どうろ
非人め出ませいの樣な船でうり
しんだ金いかして遣ふ品のきやく
えんのない寺へもにげる一家中
とつかいべいの親だまは十五城
おのてるの棧敷に一度かつたやつ

帶をして跡金の來るけちなよめ
まくら元で文高尾が書きはじめ
よつぼどのきげん母親ばちをとり
目の二つあるむこが來て無心なり
おもしろくなくしてかへる國家老
ひろい事まつが岡へのつれが出來
かねくやう六だん目にはぐわんと言
弓矢八まんとだまして訴人する
せんぎして見れば玉もは無宿なり
買物にちつとかしなとだいて行き
かしはもち甘くこしらへ内で喰ふ
田舍のはらッぷくれ三粒のをかひ
目黑から廻るはまだもりちぎ者
ふられるたちだのと四つ手跡で云
にげさうなのを先へたて土手を行
いよかぶついだと初てはほめ
げきりんばつて兄弟でひなをわけ
高さ三尺いうよあるふとんなり
ちゝぶからかへるのを嫁頭痛也
澁柿は大地へどうとぶつゝける

踏だり蹴たりの目に今川出合ひ
直のいゝ四つ手はから手が二三人
つゑをとり上げほうりこみ〳〵
聖人の身にもかなはぬあがり鯉
いたちをつひにふらせるはわきに無
うたひをば大事にしなと遣手いひ
遠慮過ぎるとくづをとる大一座
ていのいゝ馬どろぼうと源三位
すけんは神ならぬ身のかごいかご
むさばんの三つ組江戸で名が高し
けちな晩女郎の二ばんばえをかひ
きんり樣から又來たと小僧いひ
とらの門通りを行くはさり荷也
だきつくに傾城身動かしもせず
五文がむきみすりばちを内儀出し
にはか雨こじき僧をはたすなり
きつねさへしらうとでない所なり
もちやそびに四五疋のこす鮪汁
越後屋のうへで一聲ほとゝぎす
ねるは扨をしいとけちな月見也

いり豆に花がきんりへちそう也
おそろしい初湯はのまのうづみ也
手込にはさせぬと母は雛を分け
關口りうでむねぐらを女房とり
おらがよし原はかうだと文左衞門
大さうに笑つてしはす叱られる
いままでのことを中條水にする
實の無い客衆とうぬがあるたちか
かへ玉を車にのせておつちらし
あゝもにるものかと綱は悔しがり
名月院殿さまへおくさませう香
江戸橋へへどだらけなる船がつき
白鳥はさびしい池をにぎはせる
勇士の名くゞると糀町へ出る
しら齒の殿御さとあやめ羨まれ
笑つたをねめ〳〵通る御りつしん
何本でおまんまたくとお家さま
黄金もござるはずだと大野いひ
なめしやの前で尺八仕廻ふなり
七月は拜み八九はもてあそび

門兵衞と思ひ荒波明けをらう
らうがいはにげも隱もせぬがもと
妻をさり鯛を半ぶんつり上げる
名の下できせるを廻すひまな事
おそいうち言譯をこしらへて行
ひなとかや預り分はきふなこと
神風にぶたやひつじのへどを吐き
千日かうがんせざれば緣はきれ
なんと羨ましいかと客かたびら
かけ取へもちの酒のといかぬ事
貌のいゝ手代模樣をたんとうり
丹波のねずみ京へ出て馬をくひ
より政へ時節の物をくだされる
くどき出す前に暫くだまつてる
ちう三はかうの座に居てうれ殘り
歳暮には酒で用ひるのをくれる
いそがしさ升をもたない芋屋來る
雪見の供はもつともな小言なり
百の女郎もすぎますと伊勢屋いひ
どかおちのした盃で下戸はのみ

おめかけをだがよ〳〵と江戸家老
三の糸ちり〳〵〳〵とどつか行き
雛仕度ほうろくうりも仕度する
秋のまん中に大きな後家が出來
嫁何をかけたかおりはすてゝにげ
めしつぎをかゝへ船どう船をおり
意見する側からあいと先づいひな
つくぼうをこえるととてん〳〵也
衣裝改め里でするむづかしさ
うるしかきかすつて燕通るなり
御しやうしと暦とひじき計り置き
身代の爲にはしごくおとく女郎
直が出來て錢ぶんまける火鉢うり
首と首よせてよんでく土手の文
是れでかうつかみましたと綱噺し
ばゝアは川へ洗濯にせがきなり
めしごりを出して髪ゆふ馬喰町
女郎より女房は四兩一歩高
あじろから百旦那へは手をくれる
藪醫者のともは遠方より來たる

三わりならばふせようと女房いひ
たれるのでぼうふり取は側へより
はなれ馬麾を握つておつかける
かゞさん出なんしよと傾城はふり
甘い事女郎をよこにだいてねる
つゆ切りとひんをよくいふ涎ふき
佐吉御茶上げいと和尚手を叩き
ちくぶしまだけが一合ふそく也
にんげんの禿をかりに雇つてる
出家でまうけたを醫者で遣ひすて
もう外につうはなしかと中の町
すねぼうは壁の貝売ほじつてる
久しぶりさとながし合さて出ます
あの内の一ばん子さと四つ手いひ
犬坊へへしにかぢはらけしかける
がうがめつせぬと辻番いゝかくご
かたづけといふと座頭は立て居る
三會目やうやく女郎かつたやう
うき世をひに見ず島田は賴む也
人竝にいゝ春といふつらいこと

そとは引仕廻つて水で手を洗ひ
雪隱でぶどう一ふさ御用喰ひ
ねたふりをして居りやしつをかき始め
傾城は傘をさす手はもたぬなり
此へんたうに行きくれる暮のふみ
麥さくではらひなさろと輕井澤
三會めきうの跡などいじらせる
四つ手から國府を掴み出してやり
奉公人の出がはりをうりに來る
拾兩といはれて母はつゝぱなし
どうでもしいすから下に居なんしよ
ひや飯をふるまひに出る國家老
天狗まで歌にうたつた能いお寺
によぜがもんやめると孟子叱られる
とむらひに行方しれずが二三人
やみ上り三ばいづつにきめられる
何んぞねだりなとはうそう見舞言
いつく島今ざうゑいもあきの守
西行と五重の塔をほしかため
切先をそろへてわたる田むら川

かぢの葉椎の木程にしやれはなし
石尊でかめのこ程にみえるなり
康成が居ぬとそろ〳〵笑ふとこ
御ふ如意だうでびらしやら二三人
もとめ塚にて麥めしの禮をいひ
いとけない主上が娘氣にいらず
そのじぶん八條までは人どほり
御ふくろは和の引ことで意見也
佛師屋をしても弘法くへるなり
五番目は一か六かへまはすなり
駒下駄の音にうよひよろじへ出る
十三日目出たく意趣をかへす也
うすがきやそら色で來て初會ぎり
品川のひかたがむす子運のつき
骨と皮計りかぶとへそへて遣り
さむらひのきぬ〳〵鑓がふらう共
からかはの錢をぶつ〳〵内儀出し
絽の羽織着て出る所へ日なしかし
するが町りきまぬなんでごんす也
三ぞろをさゞなみといふ人のよさ

芝から品川へとほる所化の僧
空をかけるつばさ地をはしる鰹
まき鯣ゐなかのをぢは口へいれ
聲あつてかたちなし市の馬〳〵
いゝくらしへびを四五人遣ふ也
ふきげんの大黑をかふにはか雨
ふぐは嫌ひだとねつこり持たやつ
廻り〳〵の小ぼとけは四十七
御守殿はかげまをえらい目に合せ
はだかつ子腹をたゝいてにげる也
大きにやはらいで茶をやたらに飲
覗いては愛想のつきる御さいかご
燒飯をほうばりながらゑさをさし
女房にゆはせてめゝずほりに出る
とこ花にならびをつけて婆ァとり
いたい月品々御目にかけるとこ
しゆろ帚安くつけたら切られさう
后の外はわらひてがひとりなし
傘の名代しやうるり世界なり

辰春花角力會

催主　星運堂
薩秀堂

笑ひたい時萬歳はわらはせる　近江連　龜若
駿河町とは晴天に名づけたり　櫻木連　大柳
生鯛はつられたなりで臺へ乘り　水仙連
くどかれて塵をひねるは古風也　櫻木連　かたる
千兩出さずに着るのは殊勝なり　八重垣連　中葉
千兩のかけ手見きんで座頭さし　櫻木連　大柳
うめのじゆず持つて僧正御參内　水仙連
不二に別れてから旅に骨が折れ　櫻木連　かたる
松二本小たてに取ていひのべる　玉垣連　和笛
踏みこんだのは賣切れた見世の前　櫻木連　かたる
一人乘つたがけいせいのたから船　同　大柳
やみあがり女に坂をかりるなり　近江連　漣
梅のはな出した公家衆手前遠慮　櫻木連　木綿
毛氈につけて花蓙うりつける　八重垣連　金龍
三みせんで鈴蟲の音をとめる也　櫻木連　芹丈
をかしさは牽頭内ではにが笑ひ　梅連　運丁

萬歳の來る日も嫁にいひ送り　櫻木連子樂
名高い女をぼかんとむごいこと　八重垣連狸聲
名の下へかみ〳〵すわるい〻得意　伊呂波連素廣
の〻宮の鳥居をむいて叱られる　櫻木連かたる
桔梗をば三日程にて染めて遣り　柳水連雨譚
江戸者にぜひ〳〵座頭成るつもり　櫻木連かたる
白く成るものとは見えぬ洗ひ髪　同素鳥
正月と雨と用意に市へ立ち　若葉連清江
持參金わつちや片わとむづかしさ　柳水連玉簾
けんぎやうは此糸さまのお客也　櫻木連狸聲
辨天へむらさきの水引をあげ　柳水連玉簾
植ものでいけず釋敎うつて行き　櫻木連木綿
しはい奴一家が寄て醫者にかけ　飛鳥川連十口
追はれたさうと六郷の門でいひ　櫻木連木綿
三年は新造買も孝の道　同狐聲
よひなきをさせて孟嘗君とほり　近江連龜泉
うざッこい親類の來る美しさ　水仙連
此頃はいつさんまいと珠數をみせ　櫻木連其林
ざん切にされたも女房いきどほり　梅連青峨
洗湯のはさみ材木く〻りつけ　櫻木連蔦故

江戸者はもて〻奥州ものふられ　八重垣連中葉
女房にこび付て居るおほあばた　櫻木連麹車
かつしても呑まれぬ水の有る所　蓬萊連藤子
政宗をかいこみ藪醫かけまはり　櫻木連木綿
十萬八千べんまいにち回向　柳水連石波
さごさいは長屋でいつち稼ぐ奴　櫻木連萬三
いろは茶屋もちろん客はすみの折　柳水連石波
雛のくどきにや番頭も困つてる　櫻木連木綿
山駕は鴈のつるさりさうな屋根　同大柳
大あたり佛在世ほどつめて居る　八重垣連狐聲
年寄をわらづとにして市がへり　若葉連清江
大こくのそなへをうでる不成日　櫻木連玉二
六しやくの衆中啓をさして居る　水仙連
むこじつは日本の地利も知て居る　櫻木連五扇
弓矢の家に生れむすめそつけつ　櫻木連蔦故
着かへずに芝居歸の夜をふかし
目つらをつかむ最中あばた嫁入　八重垣連中葉
立つて居て座頭のぬれる俄雨
そと縫の事だとあるき足を出し　同同
にはか雨相手にがしたやうな形　水仙連

春三月三所でねらふかたきなり　伊呂波連蔦故
三會目私しや冷たうありんすよ　櫻木連春松
ひり〳〵からいが伊世屋の鰹也　飛鳥川連萬疎
蠟燭でしばらくをする金つかへ　櫻木連かたる
紙びなへ棒を通してぼろを下げ　蓬萊連五扇
のみやうがわるいと女房理屈也　櫻木連かたる
三人で一本糸立にはおとり　伊呂波連素廣
天がいをぶる〳〵として吹き始め

角力會二會目

うそ六百でかためたる國家老　玉垣連左滿
くつかむりだと唐木屋は安く附　八重垣連木綿
植ものでで公家衆の不足紛らかし　櫻木連子樂
仕合さ年を四五年置いて行き　柳水連石斧
是が本の一休だと棧敷だぞ　櫻木連かたる
殿に見しよとて紅かねを付る也　水仙連流芳
三味線と顔をのけるとすたり者　蓬萊連藤子
にこ〳〵しても飛ぶ鳥が落る也　飛鳥川連雀芝
八月と師走よし原こはいとこ　同素川
猪牙舟へこりゃどこへと枝が出る　櫻木連かたる

廣い事はうそう神がふだん居る　櫻木連子樂
萬歳を氣の毒がるは古風なり　飛鳥川連諷旦
我は禿もせぬやうにしつ叱り　同素川
嫁手がら唐のおとゞを軒へ立て　櫻木連五扇
御縁日もので物干咲みだれ　同かたる
三度目の客がかへると質を請け　飛鳥川連十口
いかねけりや今迄遣つたがむだ　八重垣連木綿
ひからびてすつぽりぬける櫻艸　櫻木連かたる
紅葉見のふり合にした手紙來る　蓬萊連五盛
楊枝見世是す通りはなりやせん　飛鳥川連諷旦
句をほめるやうに蛙はなき出し　蓬萊連五樂
もう忘れたらうはけちな女郎買　梅連梅舍
宿わりがすむとしづかな大一座　飛鳥川連五鳥
絞殺されますと流行醫者はいひ　櫻木連かたる
どこへもつてくか千日ぶしをかひ　同同
能い潰れ樣さとごぜはほめられる
繼母と見えて泣子にいつも勝ち　柳水連石斧
番町をさかなのさがる程尋ね　櫻木連かたる
市いらい息子うり切申候　玉垣連和笛
蕗のとう一つで喰ひあきたといひ　八重垣連狐聲

奥さまと唱へませいと馬鹿家老　蓬莱連　五樂
三會目さん用づめのかねばかり　水仙連　城山
こび付て居るを鐘つきひつ放し　櫻木連　里丁
近所の地赤ばん頭は奥へほし　同　子樂
青いのはとろつ拍子に駕いかご　八重垣連　丸印
てんたく寺でかつはちねへ隣也　櫻木連　花口
川端で意見についておぶつさり　梅連　梅舍
ふして惟みれば後家あゝほしやな　水仙連　旭子
拍子木のたびに大きくなるをとこ　若菜連　清江
まん中の子供をほめるわたし守　伊呂波連　素廣
貰ひ泣四つ手せげんに叱られる　柳水連　石斧
いかぬ事たつた一歩でもてたがり　櫻木連　里丁
役徳で門番二百受納する　梅連　素江
遣手出る前なまぐさい風が吹き　蓬莱連　龜遊
ほんの御つき合ひにてせげんの涙　梅連　兎町
しやうぞくを取ると不斷の彦兵衛　櫻木連　美徳
平つたくいひ出せかしと後家思ひ　飛鳥川連　諷旦
錢ッ切くんなはけちなたばこ也　櫻木連　かたる
みかん同前よし原でかねをまき　飛鳥川連　雀芝
六郷をこえるとみえる江戸と京　水仙連　里鳥

辻番にはらんばへして御用居る　櫻木連　子樂
和尚色衣でわか後家に尊まれ　八重垣連　金龍
細見は歩いて見るがおもしろし　櫻木連　芹丈
なんぞ家名もあらうのに見倒し屋　同　同
味は聞えたがしやゝりがげせぬ也　柳水連　玉簾
昔々あつたとさといせしるし　同　玉川
武者一騎まごつくを見る暑氣見廻　蓬莱連　青峨
代金をとるうち女郎はづすなり　櫻木連　美徳
いらぬ事あるき手を出し一本負　柳水連　石斧
山門へくん酒をゆるすたつ田姫　八重垣連　素重
兄さんとしやれてせなかに逢ひに出る　櫻木連　かたる
紙帳で書たのを下女はいきどほり

角力會三會目

ぐわんほどきまだ巳の時の衣也　飛鳥川連　五扇
まだ年やァ若いになどと御退出　柳水連　玉川
上下で菜をもみに行く有がたさ　櫻木連　間々
來たばんに笑つた女御手がつき　飛鳥川連　五鳥
御てかけの弟政宗さして居る　櫻木連　春松
しつた方へは上げられぬ娘なり　飛鳥川連　間々

すだれがおりてと若たう駕へいひ　櫻木連　木綿
一町はかんなつくづを下げて置　同　久鳥
嫁逃げた晩はもちろん星月夜　飛鳥川連　諷旦
男たるものゝもとどり切る所　櫻木連　木綿
三歩だけ格別いたいつめりやう　梅連　梅舍
關守のそとばたをれた儘で置き　飛鳥川連　素鳥
たち花は世間を知つたふところ子　櫻木連　芹丈
聞えぬは名代がおんなじ直だん　柳水連　雨譚
すり鉢で一ぱいのんで花を見る　櫻木連　蔦故
ぬかるみを四つ手大きく言立てる　同　其林
小船でおつとり廻す花の山　柳水連　石斧
地女のたゝりと見世で八卦いひ　櫻木連　木綿
能いしかけ汐干が土手とかはる也　飛鳥川連　五扇
きつい事おなじ枕に十三夜　同　諷旦
ねて花をやるといふこじ三會目　櫻木連　五扇
不二の裾びんばふ神の宮も有り　同　洗路
をはり町春はやさしく夏武ばり　柳水連　高簾
いでもの見せんといふ儘に能因　同　雨譚
くわつ〳〵と巨燵へおこし女房待　櫻木連　花口
一人の化ものありみやげ百兩　飛鳥川連　五盛

てんかふん團扇へのせてなすり付　伊呂波連　素鳥
砂をもる日はお定のもめんもの　飛鳥川連　五鳥
御むほんも夏仕込みだけ持たぬ也　櫻木連　木綿
爪音のするは古風な花見なり　飛鳥川連　諷旦
身代きり着めい〳〵札出して　櫻木連　木綿
金がなくなつて女郎に意見され　同　和笛
夢に見てさへよいとこへごふく店　飛鳥川連　五鳥
なぐさみにせぬ摘草は密柑かご　櫻木連　車道
初鰹かつかちめいて江戸へだし　飛鳥川連　素鳥
大名をおつゝくねとく川づかへ　同　間々
とんだこと座頭ならびに魚鳥留　櫻木連　三巴
いくらで直をしたか四つ手牛の樣　同　里丁
御の字に成つたと花見仕度する
ふとどきさ家ばかり拾匁でかり　柳水連　石斧
からすより惡まれ口を尾長きゝ　伊呂波連　素鳥
高尾はとんだばかものと妾いひ　八重垣連　狐聲
待つ人は來ずわかいもの〳〵　飛鳥川連　五扇
しほ〳〵と請出されたは高尾也　柳水連　高簾
今日は是切炭の中でしに　櫻木連　五扇
澁張りのふたを明けると天照す　梅連　鬼丁

おきたとおきの琴平へさそひ合　櫻木連　芹丈
その外のとうふやはへもひらぬ也　飛鳥川連　萬疎
中程にあつてすみ町とはどうぢや　櫻木連　美德
大一座木辻は能のかへりなり　同　清江
やれ〳〵嬉しやと夜着をくけ仕廻　飛鳥川連　春松
蚊の來るを蛇が待て居る出合茶屋　柳水連　石斧
緣遠さ庄屋もめんのそでふらせ　櫻木連　木綿
三會目とけ〴〵としてかへす也　柳水連　雨譚
てつぽう町あたり昔のつぼねみせ　櫻木連　中葉
下女一歩持つてる沙汰で文を付け　飛鳥川連　五扇
政宗をくつたと質屋そつといひ　杉壽
むさい盆つばなのせとく王子道　同
ふんどしが赤いでうれひめかぬ也　柳水連　石斧
おきやがれ宿下り宿をきたながり　梅連　梅司
天竺のがく人ちやうちんでかくれ　櫻木連　木綿
せんとうのかくには座頭いかぬ也　柳水連　雨譚
ゑぼし親祖父の敵もうてといふ
地藏堂涓のたねが上げて有り　同　芹丈
養母に耻をかゝせたで喧ましい　同　石斧
まあうんといへと無盡の指ををり

すゐりやうでむかふ棧敷の貰ひ泣

角力會三會結
天明四年辰仲秋　吳陵著

餘加

おつぱつて縫ふが花籠わきにつき
ことやうの姿無沙汰の前をかけ
うけつこをやつて煙管を通させる
もう〳〵邪魔なこつたと四つ手かけ
こりや寒い百だとはなっぱりぬかし
ほれぐすり傳にいはくは何事ぞ
面當は寐しなに仕事おつぱじめ
かけとりの跡へ廻すは丈夫なり

第二十編

昔々三十年も昔より開き、毎に上名護屋をはづさず、おのづから名にしおひたる翁あり。連中怒つてこごとをいへば、ごりやうけん〳〵とわびて笑ふ。そが年年組たてたる柳樽はや二十といふに及ぶ。此道のさかえ、人のめづる事知るべし。そのはじめにことそへよとこはるれど、今の上野つたなき口にいはんやうもなく、松が岡あまたゝびいなめど、本庄のしひてせためられて、つらの皮三寸舌長なやつと、江戸中のおしかりをうけんは合點なれど、十三日どうでなければならぬ物と思ひきつて、勅使三度やみくもにしるす。

天明乙巳冬　雨譚

同せきの末座むらさきあたらしい
年禮でなけりやいひぶん有る扇
先祖代々うれ殘る石どうろ
どろぼうはならぬと探す火打箱
足音がするとはこねでかねをうち
しんざうを起して廻るすけん物

後家のしち男ものから置きはじめ
讃岐から虎の門まではなを出し
はやり醫者乘物ぞしやう二三人
達つたらひいてみせなに母困り
糸立はしやうことなしにうれる也
權幕でくわゑん玉屋へ女房來る

折よくも土左衞門が來てせがき也
料理人頼んでいせや氣をへらし
空ッ手でかんきんをする子煩惱
座敷らう酒を飲せて母ふしゆび
品川であればかりかとたはけ者
はやるやつ夜中出店を歩いてる
袋ごとやると泣き止むげびたがき
すけん目を離ず見たをあげられる
正燈寺にはかに風のかはるとこ
名代へどうめえつたかうめえつた
一兩のとこ花手どりやつと二歩
百八を醫者おつことしぶつこはし
まいら戸に乳母寄かゝり呑せてる
紫ぼうしこま下駄を御てんかい
突出すがさいご無性に水をこぢ
神ばつで女房御はらひ箱を負ひ
氣つけ針たてられる迄くどく也
旦那寺のばせを葉はもらはない
たびせつたにてうらば入ばかりする
三日正月を丹波の庄屋ふれ

唐本はかごにのるとき計りいれ
まさ門は愛相過ぎて見かぎられ
文と手にえんやが妻も感じ入り
あいもなくつき出し力落しなり
金になるさうで留守居の紋をつけ
つれてにげなよと二條の后いひ
五斗俵を高尾自由にとりまはし
恐入りましたと琴をかたづける
萬木にすぐれえびすやかめの邪魔
やきながら女房のたべる甘露梅
三會目そのごをぬかずばゝア出る
女房は三ンの下にてがなるなり
さりぬべき傾城は皆下戸が取り
ほめられて此世にたつた十九年
三圍りでふきまり故に行がばれ
ぢうなうをうまく遣ふが三丁目
ふざけなんすなと煙管でやらかされ
世間では取用ひざる四つをうち
徒然はへつぴり坊主までをいれ
此ひしほすてゝしまへと宣はく

觀音へ女郎の出來がぞウろぞろ
きおい三重でかけてく月のかご
忰にはかなひませぬとせゝん卿
ゆひなふと追手と道で行き違ひ
芝居の前は行くまいとねぢけ人
かみにくつたくは快氣に程近し
こはい貌するあくる日は正月さ
ひよんな事嫁なた豆がきつい毒
こうたうのぶんやに當りしうん立
をしい事むすめ盛りを角に置き
いひまくられてだアまつて朝歸り
おれにあたるといッつけるぞと妾
どこに目があるか大門しれぬとこ
子ばつかり出來てみとめな素讀の師
すゐさんをねらつて歩く妾が兄
をかしさは月を目切も共に待ち
のや〳〵だらけで母親いけん也
乘もんぢやないと馬場からびつこ出る
宵の内先づ寶引とまうし立て
萬ざいがたつとざうりの喧嘩也

朝顔はしほれてゆやへ文を出し
酒だるにこまの頭も見えばこそ
何の日かおふくろ井戸へ手を合せ
あそぶ事はうあり線香をたてる
まき高直につき二三日よごれ
半平と名をかへさかな賣て來る
女郎の三つがひもした息子なり
堀のじやま吉野一艘のりはなし
ばたりといふと東海とよみはじめ
大きな狐つきをやすなりおとし
えりッくづはや子のこくに及ぶ也
いゝのさと後家親類と不和に成り
いゝ女ぢきにじゆくだんいゝ男
頼光の武具あらましはもらひ物
つれ〴〵の外に參らせ候も書き
勘當の跡甚七がものになり
かねがおちたにむかし〳〵の咄
まつ黑にさくらの口をしめる也
とまりやの帳に口まめ罷りでる
くろがねの箸を鳴して鯛をきる

いもみざる間に花娘はぬり立てる
けいせいのれき〳〵禿二人つれ
程過ぎて氣附の錢を聞いてやり
かみなりごろで僧正と御はなし
歌はうちまき發句では米をさげ
かご代はならぬと女房無法なり
物干でけん馬のらうをふゆつくし
いつくらもあるに着物を嫁ねだり
吉次が通る道すがら金びやうぶ
五六文のかしはなにさ〳〵なり
性わるはあぼしんわうの五男なり
母の留守けんどんなどで人集め
さいづちはちうをたゝいて直なつける
馬程なむすめはわるい年むまれ
商賣をあてゝみやれと淺ぎうら
拾つたとこへ置て來やとまう母
もちばなを叮嚀につけ叱られる
源三位ありがた山のほとゝぎす
くひたい物にふしをつけ子は謠ひ
紅葉よりめしにしようと海晏寺

高倉へ隱居が來るとかぶろつげ
神子がひんぬくと笛ふきのし懸り
勘當がゆりて八さんけいこする
あつちからは玉藻こつちからは貴妃
身についた物を何ぞとてる日いひ
ごふく店八合目あたりでのどら
三會目しやくの居所をいぢらせる
緣結びきれいな貌はまれにくる
常が常からふるしきと返事來る
上下がたつと懸取しやべり出し
ばゝア茶をにて友達をおこす也
謠本けだしむす子のうそにして
女房のるす扨うらはいつかごろ
まだ跡にこりやと四五兩淺ぎ見せ
どふれいを大せいでいふ手習子
どう〳〵といつて仲國笛を出し
今川で論語をおやぢしかつてる
庚申の夜はたげ長におよぶなり
金のきうじをよびつける賑かさ
大きな内でぞんざへる信濃もの

七ツ目もあてにはならぬ本能寺
さがみ入道のはい名東魚なり
手を出さつせへと物さし舅出し
井戸端でたてつけてのむ暑氣見舞
すをくんな御用穴いちして居るよ
しつかりと賴むでもなしなむ閻魔
せんぴやうは念佛をきく屋敷替へ
共に憂ふるでこし屋がいゝ直也
おれともに上は五人と妾いひ
日本の地へ來ると下乘あいはなし
あつたら後家を只置くと知らぬ奴
氣の毒さ醫者へつかひが二人來る
第三にやらぬとばゝアらんにとめ
冗談にのませて嫁はくッつかれ
きついふりおもてをいなぶらが歩き
居續をつかみ出す氣でおやぢ出る
やくさうで前の女房を隱すなり
さり狀はおつてと何か仔細あり
僧正がかぶりをふれば燃上がり
へどの出る詮議遣手も色が有り

はねつるべ目の無い白を絡付け
あれ今湯へうしやアがらと藥取
島田めは錢にならぬと遣手いひ
三河から來てつがもない嘘をつき
井戸の中から面白いどろぼ出る
下總のだいり紋からしてがげび
ごうせいな腕で下の句取りはぐり
音羽のこぢよく風車取つてにげ
とふにやおちずにせきそんで語る也
二本折らせて半四郎をたのむ
一國せいばいあんまが一人なし
めうがの程も恐ろしく讀誦する
御手を引き申せと石田世話をやき
二三人けころして來た女房なり
えびす講あつかましくも傘をもち
美くしい髮三日目にほどかれる
そくたいの袖へおやわん隱す也
一ト宿はをちこち人の泊るとこ
女房の相を見い〳〵さそふなり
きみが一日のなさけにもうねだり

うんのよさ此八朔はもやうもの
夕だちで一斗七升河岸がたれ
文左衞門手まへ一人が面白い
富士道者下向よしはらどまり也
によぼんにくしき僧正のかひは無
唐樣に筆屋はいじりころされる
でへ〳〵といひながらのる俄武士
ほと丶ぎす土用時分はふるせなり
そりや笠をぬいだりけちな紅葉狩
孝行のしくじり舟ではしをかけ
津の守のやしきはよせと袴だれ
牡丹一本をふたありの子になかれ
折檻をしかけ笑ひにば丶ア出る
門番にさへ通り名をつけるなり
中宿はかしわきざしももつて居る
抽ん出て隣のじゐきしよつて來る
にようはちを肋へあて丶うなり出し
正燈寺何めんぼくにかへるべき
ふじとよし原は江戸でも近所也
勘當はおふじやうずくめ許す也

し丶が谷大一座だとかぶろつげ
ふく神を買てせつたを腰にさし
せひに八分でと手おひの願ひ也
面白だぬきよこに來ておこす也
醫者に似た者が一人であるく也
留桶をつかひ長やでにくまれる
たばこ入くふかと思ふさむい事
つひには神明の市がはれ不首尾
狼煙のあかりで落ちた物をひろふ
聲がよくなるとも一つ年をとる
神樂堂しんるゐ書がならんでる
むごい譬へは疳の出た養子つ子
わらぢくひ迄は能因氣がつかず
いせのはけあきはと藥師撫る也
後の月きぬとさやとはすてる也
さん見舞長口上は御たいくつ
せげん樣たのみまするとは送り
もりつけた上をおしなはねぢる也
たびねがひ傾城いつこ出來ぬ也
女房はもみぢを買つて悔しがり

日本に死にそこないが二人なり
龍田姫是よりむす子うかれそめ
けちな舟ゆさん吉野を探してる
爰に一人のえいゆふ有り敷ぞめ
仲人のきうあくの出る嫁じよやみ
をしい事嫁も小いちが惡くなり
聟きえも入り度き親子げんくわ也
ぶくついた小袖で淺黃土手を行き
音樂をもんがくどなりつぶす也
見物らんぼうかず〳〵切おとし
傘で不沙汰のこもをおつかける
菜めしやへなでつけ心安く來る
女客ていしゆにこづき叱られる
手桶賣直が出來首をやつとぬき
耻かしい喧嘩をひだち際にする
羽左衞門てらさとびくを下げて寄
ぐるで入れぬと大門で女房いひ
らく中は光秀信士とぼすなり
一國は岩井をねだる根をたやし
女郎見てわが家々へたちかへり

不機嫌をよこつてうから來て騙し
半殺しにしてよじんへと藪醫者
とんだ事十夜を南もん日なり
もう一歩くんなようと母へいひ
ふられたと亭主せつない申わけ
百も小言で納豆でたづねてる
よんでやる文あひだには畜生め
やむことを得ず生醉を縛るなり
伯父の目にも涙座敷らうのわび
評判のたはらをはしへ出て賴み
折釘を打つて松右衞門一本きめ
さがやうで障子へ一首書いて行き
正月のえんま芝居におされたり
手拭もむすめがもつと品になり
けんのこゐ隣屋敷でべらぼうめ
ひつぎを送りふとゞきな大一座
入院の外の物入りはかたづける
松の木をうゑ〳〵先へ罷りたち
こ丶いらに門が欲いと田をめぐり
かべ訴訟したら末世に本はなし

夕立のたんびに仁者かしなくし
雨やどり迄は武骨なをとこなり
蛛のはふやうに大臣こじつける
いともの哀に木綿のいとをとり
魚鳥留せぬのは甲斐のはかりごと
ずつと來て踊子袖をぶつちがへ
やれ〳〵もいとで踊子引出し
はづかしさそだらうといふ病也
なんぼう怖ろしき物語りは夜具
ざつくりとつかんだ所を母押へ
佛より若いのをもつまづい後家
さいた〳〵見さいな妾のおとゝ
清水を祈れどあざはぬけぬなり
爪をとりかけて和尚の禮をうけ
間男の子もあてやすとだつきいひ
梅の木が大きな森に二三本
左樣計りに氣のつかぬやぼな奴
釣つた鯛直ぐな針ゆゑ魚がおち
ばちびんをみんなが笑ふ祭り過ぎ
くたびれたやつ口元へ腰をかけ

水くみは小べり計りの船にのり
百人一首金比羅樣に氣がつかず
尾張町通りぬけるとしづかなり
むねくそのわるい話しを地紙する
五人のあごを御妾はねだるなり
これもんでよんどころなく嫁落し
はしの有る丈書いて出す暮の文
とてもうせるなら吉原へうせをれ
片目だが器量はよいと仲人いひ
角田川二度とはうれぬ名所なり
江戸中を越後屋にして虹がふき
面白さやるぞ白かみかねとよみ
あきだなへわかとのゝ行く十五日
三會目ひがわるいとは本のことか
かみ〳〵の大たばを出す十三日
ふんごみと頭巾四郎兵衞から屆け
此みそはいくら目するとなめて見る
三十八年よけいにてふだを出し
すぢ骨を拔かれたなどとまけた奴
愛宕山かん彌がやねを探してる

はき物を持てころびの母むかひ
うんを兩だんに見芹をさきへかひ
詩をつくるのがいつちい〳〵上戸也
ばゝァ正直金とるとわらふなり
がきやみの跡はいやだと湯場で言
ほらをふく迄いひ立に庄屋の下女
信濃迄かはりごつこにおぶッさり
後家のいろ先年五兩出したやつ
よし町へ行には和尚たちのまゝ
あさつて迄に染らぬと番所だぞ
袖の梅おあんなんしのくすり也
仲人はしうとを呪ふやうにいひ
琴爪をちんぼうへはめ叱られる
下女の戀文もへッたくれもいらず
酢てんがいなど拵へてかこひまち
女房子も見つけ次第と長田いひ
ばいためが來てをるげなと伯父ふつう
笑はない子を愛される氣の毒さ
はまぐりにひらめ女房は不得心
きいてばかな物赤子へ物をいひ

まくるだと女をおどす關所まへ
三ヶ日だけとをよそにいびる也
冬のうち月三斗づつくひこまれ
下りうりやなりをさせてといて居る
はなれ馬貫ひにこぬで困つてる
孫も六人もといはふむこひきで
蒟蒻をなげ出して追ふはなれ馬
四つ手駕昔あいゝをいつたやつ
笑はせて見なと新造しやちこばり
ふんこつさいしんの玉蟲母もち
牛のくそあはびッ貝は見て通り
ひるがひにゆかまいかゞと淺黃同士
まさ羽織ほぐして醫者は駕を出る
目移りがする筈ずらりつとならび
あれとかとあきれる奴と後家は出來
若殿のぬけ殼おくでばゝをする
向ふのが松だと石にけつまづき
もてるもてないは水もの代三歩
二度行かぬ氣なら吉原いつちとく
くわんぬきは桀王の代に始めたり

油あげ二度目の使おとななり
晝の顔ばんとう色師とは見えず
子がじぎをせぬで父する暇乞ひ
四本さしたのが四つ手の直をきめる
太神宮を引つれて御しゆつ立つ
ひやうし木に嫁居直つて口をふき
殘りなく皆出ませうと遣手ふれ
豐島屋であはぬは飯のさいにされ
仲條は這入りがつてを三とこあけ
挨拶が無いとやつぴし杖を立て
年明けの安目にみんなひつ掛り
やね船のうたせんごりにつぶされる
だきついてみなこいやいと五郎丸
病人にまやものゝ有る大三十日
呑口をゆばん氣強く引つこぬき
ひどい事質屋を出るとむこし也
たべる外しなのわる氣の無い男
生鯛は糸を喰ひ切るやうに見え
四文宛ついては女房おして見る
富の場へ財布を落しわらはれる

鍋之介事五右衞門とあらためる
強いどろぼうも無いもの石灯籠
足音に仕事をやめて鈴をふり
御めかけのげい元蠻國のかつき
草履とりろへ取ついて叱られる
たうとい寺の門内で四つ手きれ
一日に千兩まではつかはれる
京計り大きなりで木ざうなり
いせものがたりに太神宮なし
さがやうの返事仲國もつて居る
置いて逃げやれと切文頼むなり
通ひの高の登るはず夜具を入れ
撥はふくろへ納るとしづかなり
口をすくさせて花嫁こしをかけ
つくしうり小判を出せばにげる也
下手のまりけられる丈はうぬがける
寢まいとはまうしやせんと書て居る
亭主が泥棒するでどこへも出ず
後家ぢみに造つて結句好ましい
師匠樣いろはのうちはこはくなし

あつけない夜を傾城に拗られる
手拭のはしにけん布を少し付け
すゝはき竹や竹と只七は賣り
人のいゝ車力ねこだを敷いてくる
そんならばおめしと下戸にわりが付
傾城の御きげんをとるしはい奴
かかう有りといへども初會はくにす
めづらしき龍宮米を藤太くひ
氣にしてはつまんでは見る貝の疣
けちな雛一けん店で買つて來る
いも見ざる間に御祈禱に皆とられ
うまの金圍ひに小袖ひとつ着せ
はぐれるなよと檑木にとかまらせ
海ぞくの用心に戸をさすつく田
玉川は江戸へ出がけに米をつき
嫁のからしをうばひとり舅かき
いんしんぞうたうせぬ奴へ名代
座頭のつめた跡たどん干場なり
人もさすなら我もさす有がたさ
うらゝかさ榮花の夢を賣りに來る

發句にもならぬ鰹を伊勢屋かひ
ふにやひのかみしも申入と來る
肩車店子などへは下りぬなり
冬は書春はむじにてくばるなり
けふはいゝ寢日だと雪をむごくする
上下ではだかの中へわけていり
春中へも手の及ぶだけ嫁はぬり
質店のがきがと小じよく泣いてくる
鍋いかけ切目たゞしい砂をもち
兩の耳ふさいでもりは嬲られる
三蒲團負つては出たがすてゝにげ
雪降のもちやそび跡で手に餘り
どつちでもおとりなさいと鮪賣り
本郷の町酢いものでくつて居る
重をとる手を前垂でふいて居る
おしつめていゝ相談を長田する
せなァ小聲でかますからかもを出
しはいやつ七十五日はやくしに
皆落葉して丸いろは目立つなり
をかしいときは小便に師匠たち

うつちやると思ひ禮者の面をむき
新宅の歸りにどこぞわるくいひ
羨むを四つ手の中で聞いて居る
つかふむす子に福の神追ひつかず
となりあるきを馬でする鶴が岡
いわゐなと簪で毛をかきわける
日本に構ひなさるなと貴妃はいひ
先のていしゆに御無用と運のつき
あをむくと髮結のどをのぞく也
どろだらけみやげは捨ずして歸り
高い水一升九十五もんなり
くれおそき關はのびたり縮んたり
貌へ穴あけてやうじを十本かひ
珠數を下げてもどこやらが色師
百さじき口さびしいとたばこなり
うら口をしめて來やれと門すゞみ
べろ〳〵をして唐辛子こりはてる
さんげ〳〵大こくをぬすみました
わるくは無いが高いのでうれ殘り
とゝさんと寢習へと言ふ腹になり

鯉のくひにげやるまいぞ〳〵
かこはれへつぼが廻るとさがる也
くるま坂下を二度目の高尾行き
丸顏のおもながに成るはづかしさ
以上なら百つけませうと檢校
亭主が有つての勞疲さじをなげ
息子の不得手ぢをんなと孔子なり
ふせがねをくさりで繫ぐ六あみだ
新古のしやべつなくあげる大一座
けちなかたり天秤棒下げて來る
惜氣なくぶちまけ主へ上げんせう
持參のつくを一目見ていやといふ
あゝらおもしろからずの雪の供
あぢなばん古ぞう計り賣のこり
子寶も身のさし合とせげんいひ
秋葉からかへりに太郎坊へ寄り
堀の死跡へかたづくうんのなさ
安玄關障子をたてゝ鍵をかけ
相傘はだまつて通すものでなし
はきもの御用心を三浦屋で張り

にはか雨はるかむかうで蟬の聲
よびだしは用を抱へた人がかひ
茶屋なしにゆきやれとくだと安くされ
文など書いて居るのを上げべからず
きゞすなど少しうなつて床へ入れ
人が傘さすならわれもいとだて
たが扇だかつかつてるわたし守
まき紙はひよつと落すと逃る也
瓜ひとつ盗めばはたけ中うごき
不仕合せ牽頭を見ると横へ切れ
春のなま醉ざうりとりはさみ箱
誘ひてに笑窪があるで悟られる
まんざらの傘を越前屋となほし
浮足だなとついて來る四つ手駕
出したり入れたり高砂金太郎
吳服屋一けんでくらす六郎兵衞
坪皿を持て碁ばんをわきへのけ
質屋から切れぶみの來るつらい事
生煮なうちになくなる小鍋だて
あつちからのお馴染と内儀さばけ

三月の炬燵もすてたものでなし
美しさ二つのあざがきずばかり
文をなくしたでおッかない煤はき
けいせいの人別帳をうりに來る

巳春吉例角力會

催主　山下　櫻木組

八百の上下を着るありがたさ　玉垣連　和笛
朝寐ぼう六日に松を取はじめ　伊呂波連　子好
兩方の木戸をしめると髮をとき　櫻木連　豐好
あすありと思ふはけちな女郎買　鹿子連　美德
怖くない虎の尾をふむのどやかさ　玉垣連　和笛
鈴の音を留めて法眼匕をとり　鹿子連　鹿蝶
たこの糸ぶん取に大ぼやも出る　櫻木連　素文
馬鹿もあるものよし町へ大一座　柳水連　素文
二三年白毛をぬいてやめにする　玉垣連　山口
江の島を賣て女郎に買ひあきる　柳水連　素文
取たてのかぼちや屋根屋は振廻れ　飛梅連　素鳥
あいそうに牽頭は二つさくら艸　櫻木連　かたる
家根の雪前垂かぶりせゝつてる　鹿子連　美德

みの市は其角このかた出來る也 櫻木連 東々
をしいこと信長妻戸ぐるみやき 柳水連 玉簾
三つぶとん天水桶に程ちかし 櫻木連 かたる
女房はさくらであなを見付出し 井增連 白子
一家中四つ手はいらぬ近所也 飛梅連 聞之
春やしき秋は寺にて不首尾也 櫻木連 運町
二三人人じちを出すはやるやつ 水池連 里井
あづまから憎まれものを染て遣り 八重垣連 寸魚
柳うりどこだと聞けば角田川 櫻木連 春松
初雪やせめて禿の一ㇳつかみ 柳水連 猪牙
將門をしめたを龍王へはなし 櫻木連 洗路
素見物きたなくたかる隙な見世 柳水連 玉簾
軒並び梅澤あごをつるしてる 櫻木連 木綿
生醉にこゝろ遣ひの金屏風 飛梅連 鳳頭
はかなどはありさうも無い寶寺 櫻木連 如雀
餅をやく匂ひで上戸いとま乞ひ 飛梅連 聞之
傾城のうそをいはぬが罪に成り 玉垣連 山口
御預けの義士にもはぢぬ達磨有り 柳水連 雨譚
申入れますと何だかほうり込み 櫻木連 かたる
とんだめにあつたと頬冠で來る 同 同

おめかけの惡い手本をだつき出し 柳水連 聞之
西の内をくんなさいと泣いて來る 鹿子連 美德
評定の内うゐろうを士卒かひ 櫻木連 木綿
よにごくぶきような笛は按摩也 井增連 高柳
らうがいの娘かならずとなり有 八重垣連 寸魚
ゆるい黑木へ竹の子をさして出る 櫻木連 素鳥
ふられたといふに女房聞入れず 飛梅連 春松
庄屋とし寄まかり出て雨の禮 伊呂波連 文車
内もゝでちらり〳〵と罠を懸け 櫻木連 かたる
口まねで小町あだ名が一つふえ 八重垣連 狐聲
ふき殼を飛車でおさへる玄關番 櫻木連 かたる
いや是からも御不沙汰と傘をかし 梅連 兎丁
もそつとに致しましたと牛房下げ 櫻木連 木綿
とむらひの頽れ三歩は賣れ殘り 柳水連 宗文
放し鰻もふといのを撰ッて居る 玉垣連 露日
たてつけて品川通ひ荒りやうじ 櫻木連 木綿
いきを引取ると女房を引はなし 梅連 鼠走
おほくちに十八もんが米をうり 八重垣連 狸聲
初雪は時を定めぬもん日なり 櫻木連 豐好
御新ぞをかみ樣といひ叱られる 井增連 狐聲

あゝほしいな百兩に人だかりァ 伊呂波連 文車
ものはさうだん傘とはなとかへ 櫻木連 春松
嘉六はよび人で彌八は賣人なり 八重垣連 狸聲
越の傘小雨にもさすふてえやつ 櫻木連 蔦故
借ものと見たはひが目か金屏風 飛鳥川連 運町
一ㇳ度ゐむと一歩取るばゝァ也 同 借遊
十五日梅わかのかたかきくもり 櫻木連 近糸
娘の不首尾町人に立ちかへり 鹿子連 串柿
あふぎやへ行くので唐詩せん習 櫻木連 乙丸
吳服店鼻緒の切れた下駄をばき 井增連 狐聲
御幣が出ると二十人うせにけり 水仙連 旭子
すけべいなけいせいの出る三會目 柳水連 雨譚
里の母惡こんじやうで暑氣見廻 同 同

巳二月五日ひらき　催主　星運堂
補助　薩秀堂

續角力會

かつを木とゐまとが京の四月也　雨譚
きついこと火鉢の中に百すたり　長笑
六十五しうむらさきをほめるなり　素文
父をとん出しておすへけちをつけ　雨譚
一聲で五町をなぐるほとゝぎす　百千鳥
檢校に成る前所々でにくがられ　石斧
おはぐろをくんなと貌をもう隱し　長笑
三會目から人がらがぐつとおち　狹衣
花の外には松葉やへ行くもあり　伍遊
一年に二度高き家にのぼるなり　芹丈
くりかへし猪牙半分は文に成り　五樂
もつとおほへいにいひなと新世帶　雀芝
狼を聞いて鹿きゝこり果てる　石斧
蒲團三つはむせつぽいねだり事　和笛
大木の花見はものがいらぬなり　石斧
初手のお多福めがと後妻へはむく　五連
渡しで傘を明けて見て叱られる　雨譚
栗の木の下へ毛拔を持つて來る　芹丈
まゝの紅葉は中川の火がくらう　素鳥
若家守くればちやほや嫁はいひ　西喜
今買つた三ッと振袖ふるつてる　木綿
大一座美へさすおしの强いやつ　鳳頭
千兩はころもにしてもうら悲し　和笛

あきらめの惡い若後家四火の跡　長笑
あぐらかく仲人九ッ出來かゝり　素鳥
放れ馬とらまへて來てしやべる也　五連
びんぼうの隱しごつこは中の町　美德
御用の外もかまはぬは十五日　文集
かわかしがつくでかこひの所がへ　木綿
かたびらの下へ紅うら着て歸り　粟穗
しかられる所迄あるく寺の庭　素鳥
はぐれたら榎の下と市兵衞いひ　車道
二十一日梅わかへつかをたて　大鳥
金屏風の前にゑちごや絹がすわり　雨譚
多田の藥師迄はいせや連れに成り　伍遊
雪がふるうちにはおとりあげなし　梅舍
からあさり直段の出來た音がする　間々
四郎兵衞を叱つて追人かける也　如雀
仕合せは宗盛おろく不仕合せ　狐聲
かねやすは不斷祭の通るやう　美德
杉箸を火鉢へつけるざつなうち　素文
百疋分があいそうをばゝァする　五扇
いやな事いやとおかねはいつてのけ　龜遊

茅花賣一歩出されてべそをかき　伍遊
うるさゝは持參やつぺしつめる也　山路
ふんどしをしながら覘く雪の朝　豐好
逃道をあけてきぞうをくどいてる　五樂
あさのみの一ト粒えりが四十七　遮蝶
年をまで一割引いてせわをやき　三丁
一ト寐入寐て高なはは月見なり　石斧
李花を冠にかざつたを二人連れ　五鳥
盃のもめるむかうにいゝ女　五樂
手のひらへ家内いつはる月の客　春松
けんだいへなほつてかはら拵へる　車道
のむ禮者所々にて供をおこす也　猪牙
初午はこよみで見出す祭なり　同
いきせいひッぱり袋もぐさを下さい　美德
男の出がはりおッちよッてつッと出る　百千鳥
ねんごろに語ればといふ神のちわ　芹丈
きしこくのとほりへ櫻植るなり　鼠弓
ごしやうぎで暮すは堅い川づかへ　近糸
せがき船切れた三ッなど落て居る　素文
わるごうがいつて白紙へ判をおし　五扇

夕だちの一句いなりもはだし也　五鳥
ひどい事にげろ〳〵を琴で彈き　玉簾
袖褄をひかれしたびに下女靡き　春松
大松と小松のさかひたゝくなり　霞朝
すいかつらみんなにすると馬糞搔　三丁
梅玉のそろばん二十五けた有り　美德
わつちやァいやよとこわ高に娘言　滄水
暑氣見廻行水をするごくこんい　雨譚
顏見せのむすめは曾我に嫁で來る　霞朝
鈴ぐるみ十九夕の仕立代　門柳
眞黑なくちや〳〵をする耻かしさ　文集
正燈寺聟はもんぜんばらひなり　蔦故
毛せんはどこへ敷いても面白い　同
ひなのめしおらがへも來て戴きな　
甲の座の客はまやきへ手を付る　芹丈
叱られて下女はき溜へ塵を捨て　横好
沙汰は無い事上げ下げを三歩する　芹丈
傘の直が出來ぬける程ふれといひ　五樂
てうしをも見た親方でわけがよし　芹丈
ふところのあくうり物を息子する

なせでもと鳥居の際に下女殘り　三丁
旅馴れたふりでせつちん先へ聞き　近糸
かゝみへ向ひ鼻など下女つまみ　滄水
茶碗はち網の中から出して賣り　豐好
關とりとしなのをよばる飯時分　門柳
命よりだいじにしたは高尾なり　素鳥
播磨やが來たらばとうにあげよう　横好
野に暮すやつらがまくへ二三人　同
屋根の有る岡持へ釋迦いれて來る　春松
川崎の品川と來るむす子旅　美德
雨舍り茶瓶にかりて吸付ける　石斧
川留めにこり棧道を通るなり　同
龍神は歌と發句で二度擇み　門柳
女きやく白うをなども聞て出し　芳蝶
どうがへしまうけ小間物一本賣り　三丁
金屏風子にたゝかせる心なし　狸聲
四丁目もまたちらほらと匂ふ也　同
賣ものゝふしは六鄕そこらなり　龜遊
たんぼゝの草ばかりある小金原　霞朝
耳にたこできいしたにと高尾いひ　狹衣

からかさを三日かりてる長いしけ　蔦故
切遊び吾妻女郎に京男　同
どばで見た男かじきをして通り　芳蝶
けちなひなそばやの膳ですぐに上げ　車道
このはなと心中しろと札を立て　狐聲
合羽籠部屋へは御用行かぬなり　美徳
四火といふ沙汰を聞もしわたしやアね　同
小豆は公卿大角豆勇者なり　同
棒の手を見せて和尚へ馳走する　豐好
おかみまで知らせて女旅へたち　美徳
賬か過ぎてまうからぬ出會茶屋　狸聲
ちやうちんで立聞をするたはけ者　同
月の枕言葉くろうでありいす　同
あはもちもいゝやいや二十九日　同

巳二月廿四日開　春日町鹿子組　催主　美徳
補助　星運堂
薩秀堂

第二十一編

此編の初丁は、十四五とせ以前迄此道に名をとり給ふ若ての上手名吟多かりしに、をしいかな世を身まかり給ふ。予うろ覺えながら彼秀吟をかきあつめ顯はせしは、御なじみのかた二十一編の御回向あれかしと願ふのみ。

お妾のむつごとくれろ〳〵なり　淺草紅梅
高つきの菓子が屏風のあるじ也　小川町車十
持參金出るはれ見世で笑止がり　番町梶葉
かんざしでかき〳〵車言込める　神田嵐巴
江戸家老若衆根性出したがり　下谷冬始
はやり醫者一固まりに睡らせる　市谷萬鼬
氣違ひのそれからたえぬ角田川　麻布龜甲
庚申は横にいつてもけどられる　柳原千雀
車にてしきみ淋しく引いて行く　下谷井印
嫁の髪巳午のあひにやつと出來　青山仙郎
雨宿り子の行けといふ氣の毒さ　麻布きぬた
晝着ない小袖は内で出來ぬなり　本郷鐵砲
大德寺水にはあはぬところの名　青山五盛
子のねびえよく日夫婦喧嘩なり　麻布似竹
二またはわけてはたらく土大根　丸山百菊
あれにはな主がござると神馬引　下谷綠技
踊子の母にくらしいせきばらひ　八丁堀月桂
身の重い中はおはちも下さつた　下谷陀陸
冬の田は山葵おろしの樣に見え　本郷中菊
お妾はばちばッかりで利生なし　本所淺裏
からす瓜垣根の外のいのちかな　吳陵軒㊞
ひのえ午のとし末秋
歳旦はしたが歳暮がむづかしい
軍は無いと見切たでかさぬなり
お念佛いそいで嫁によつかゝり

まめぢやと申計りぢやと持た奴
はじかみの祭禮なぞと論語よみ
やつさずにぬれ事をする新五郎
もみぢではないと繼母訴人する
二度とはつれぬと櫻へ下戸く〳〵し
ほれぐすり傳に曰くは何事ぞ
旅もどり子供が先へふれて來る
風に笠とられぬやうに口をあき
小額の有るやつえらい虎をうち
神だなにかるたのつてる屋形船
からのかゞみとは誰だと亭主き〳〵
湯屋を片腕にきざみやこして來る
土手の雪かねの草鞋の跡ばかり
足元をねずみのあるくあつい事
車引あとのたはらへむぐるやう
簞笥からやりてふんごみ見付出し
うりぶりの惡さ癪だのつかへだの
町内のにくまれ者があつ湯ずき
いびつては息子を一人者にする
今くへばい〳〵とぶきみな刺身也

雨乞の歌もくどきがまじつてる
げぢ〳〵をすてる扇の忙がしさ
御用のみ〳〵やおつ〳〵けて板挾み
てうはんばのた〳〵かひ跡元結こき
有難さ人をころすところされる
座敷持にせたんゆふをかけて置
越後屋のあいそうになる雨がふり
ひらき戸をやたらして置く敵持
町内へ來るとつまぐるにくい事
札紙のついたおあしを御さいもち
あれだきつくよと氣にするもチやそびや
五三の通ひにむす子はえらい事
一つまなこが行燈のばんをする
油むしらかんをさしてはひ上り
書くもんだなとす見物いらぬ世話
すふわりが三歩どたりが一分也
内藏之介(くら)嘘をしても醫者にみせ
だいのもの丑三頃にごゥそごそ
畠の中でそでをひくものなあに
おはこびを山々ねがふ六夜待ち

いんのこ〳〵つんぼうねめられる
嫁のれい男の見るはかほばかり
大あばたかゝアがきげん任せ也
よういろいんな事いひなんすのう
目移りがすると三百けんあるき
もうせんへのつて新造叱られる
股をくゞらうといふには嫁困り
耻かしさうに呉服屋は無いと言
にげ樣と存じましたとばか亭主
使ひに行てかへらぬを一首入れ
丸い風ふくにはこまるかやば町
下から出る御むしんを殿御承知
からつ切座入もせずにまつが岡
あはぬ角力はだてがせき高尾山
とふにはおちず石尊で懺悔する
何としいせうどつちらも三會目
錢の無い奴にはどつこいとげい者
日本では行基ぼさつと女郎なり
道々もいけんでもどるまつが岡
虎のなき聲をきかれて儒者困り

とりしめて一段語りみそをつけ
山といや川と答へて四つ手かけ
緣が切れても大事ない下駄をくれ
をしみ〳〵振袖をひとつのこし
臼の禮たもと〳〵帶をはたくなり
白布を取てばくろうよびにやり
にはかあめ女がい〳〵と傘がふり
文覺はぐわゑんにするとい〳〵男
ゆふだちに馬を半分ぬらすなり
えきもない首持て來て琴をきゝ
いつ迄とないたはぬえの從弟也
龍宮はつりしをとかく婿に取り
寺町で孟母をきけばこしました
むらさきを品玉程にしぶんそめ
いだいけぶ人子供がいつそなし
長吉點でよんだを他人知らぬ也
音さびしくぞかへりける四つ手籠
けつ王にはじまりさうな衆道也
いそ〳〵と靜御ぜんの跡につき
ぼだい所へ體と首が二度に來る

きなこつけ〳〵お齒黑を附る也
申おろしにしたばんにまた擔ぎ
大根だの芋だの榎木だのと書き
いなか婿袴でしばりからげられ
まゝ親は紙で折たる夜るのつる
遣ふ筈おやぢさかつて入れた物
がいぶん舞をまふ年で何あらう
げびた事たいはきりでが無といひ
こゝ通りなさいと袖を膝へ上げ
大黑はいゝがあぶりこ手が惡し
鈴の音で甲乙の座へならぶなり
あのぢい樣の書たのと額を見る
可笑いと御幣で祓ひ神子は舞ひ
文を書いてはとつといてやみ出し
じやまな事伯父の娘が二人まで
僧正の目合を見てはつかむなり
居續に用ひてよしがちイらちら
石町の金でむかしはひけをうち
蚊の中に新ざう息がたえて居る
汁のみをかひに出すので弟子下り

五つ目へいぐらはけちな柳ばし
朝歸りとある木蔭へおろさせる
煙草入かるたうがらしつきやだし
糸を切る剪刀は女郎いらぬなり
釣合のいゝけいせいは直が高し
おれが顏みなよと嫁は常のかほ
いせものがたり勿體ないと親父
ばん僧は松をぬいてる人に聞き
となり屋敷でも月見どこでなし
盃は出たがさああとがながいは
よけが七兩二歩いるとてるひいひ
流れ灌頂のきんじよで二疋釣り
寢所をはしごのとほる大あらし
やッぱり梅といふさうで公家てれる
町内のぎりさへすむとおほ一座
とぶぞと見えしが忽ち土手へ行き
勝た奴そろ〳〵にげて音淋し
切落しおしをおかれぬまでの事
下女の腹こゝろあたりが二三人
他で轉ぶぶんはとけつが廣い也

錐よ金槌よとしろうとのうなぎ
村の嫁今戸のでくでひなまつり
あの柿賣めと大地へぶッつける
よみの見物すひ口でこれからさ
萬歳を嫁はけいしてとほざける
此どてはいくらだと葱さげて居る
死をせんどうにまもらず男にげ
能聞けば和尙の流くわんじよ也
おでいにそみた結構なきやらを遣
引臼のいッくらも寄る安日待
當住大山ほつ〳〵とたゝかせる
菰をかぶるぞよ位はきくものか
金魚を片身上げておくけちな雛
斑猫を羊のなかへりよかういれ
手のひらへしたみ才藏下女へさし
節分にふだらくせんへもみ上る
ちゐのいる程振袖は邪魔に成り
戻りには道草をくふとりやげ婆
こじ附たさうでこは〴〵歩く也
たそがれの渡しつりしが二三人

口をしさ大わざ物の御せんべつ
親にて候ものうたれ拙者うす手
きげんよくいう王身代をつぶし
をどり子は女の中でぶにんさう
すなほにするとおたかさま〳〵
戸いたでかこひほうり出し〳〵
百年目矢來のうちへいれられる
嬉しさはあやめ白はの殿を待ち
とんだ時いとまを願ひ嬲られる
熱いのにお針手おもい物をぬひ
かうさんの事だとなんだ初會也
まことの傾城かひ笠や下駄なり
ぢゝイ婆ア有たとさ嫁はもめ
やめて居りゃいやさと後家に出來掛
ふりさうな名の薄雲はふらぬ也
踊子が來るとしやうぎを止にする
ふもん言二十五ほども候をいれ
法事きやく嫁の素顏を初に見る
松が岡をんなだてらな會所なり
取て置きねへなにいらぬさしを買

可笑さは持參いのこに見合なり
鳥にだもしかざるべきや四谷とび
ちよくしさんなどと巴は安くする
麥飯にさいはいらぬと皆くらひ
ふ機嫌さやりてあはゝの三太郎
ありがたい所で切れる三のいと
一と屋敷おつ取卷いて帆を上げる
焚付けろやいとひしこの首をもぎ
案内がしれて六ねんはやくかち
枕言葉もあらうのに損りやうや
中宿の前をげんぞくわらつてく
岡場所のたいこはどばの片手業
生醉のとももものひろひ〳〵來る
何をして居たとこは飯又つめる
田原町からねらつてくふてェやつ
きやく分を松へ中々がてんせず
木魚程の物をやりてさげて居る
一人子に草をわかつて赤がへる
いさゝかな用吳服屋に腰をかけ
ふみにじり〳〵ばんづけおこし

いろ娘しゆん三夏六ひなを出し
此邊のあめだとおやぢ目が黑し
から荷では植木か炮碌か知れず
客をしかつて出て御用しかつてる
どこ迄轉げるか見てる火ふき竹
たこの切れたを惜むので妾げび
大こくを手長島からかひに來る
二代目はあしぶみもせぬ福の神
茅ぶきの舟からきざな聲を出し
姪で御座候と善兵衞はんをおし
荒繩で着物をしばるかや屋ねや
流行るやつねかし附てはどつか行
是切のらふそくのぞき〳〵ゆき
昔とつたる杵づかでとしわすれ
どらの入物てつきばきぶちつける
夜はなき晝は旅人の邪魔に成り
半ぶ宛さすとからかさ戀になり
げんざいの果はぶきやうに二本指
押賣りにふえんの后せいへ來る
飯がすゝまぬで御用を吟味する

ほん〳〵がなるぞと子守笑込み
芝居へはむかふのめりで娘ゆき
目のからむ時分にろじて母のうへ
あみの目を大方うめて能しまひ
つめ〳〵をほんたうにする遣手婆
とんだ案文をそばから無筆いひ
まだ年やわかいなひなさまに梅
どか〳〵通るはとむらひ崩れ也
うたでつき合へば猪こはくなし
見ともなさちやうを摘んで軒に立
籠賃をわけ〳〵彼奴さればいひ
やさしい聲色しうとめ上手なり
子を一つ睨めて置いて申しわけ
いせの話をきかれつぼねは困り
しる人をひどくしばるは遣手也
是はといふをせいろうで聞て居る
何だちよくしだと國香腹をたち
あのきやく僧こそと高繩迄追ひ
羽織は長さを厭はずせがれ着る
芋賣の仕廻ひは升に入れて行き

あつたら船に坊主だのばゝアだの
中秋はどらにみのいる時分なり
封違ひふきげんな客二人出來
ながしのから夜通しとすねを擦り
三丁目どうかわづらひさうもなし
三會目わッちや肥つていんすによ
舅を元のをぢにするむづかしさ
御仕舞とことわつて子は箸を置き
車引くほどの人數でむす子ゆき
參りそびれたと何やらかりたさう
女房が出るとだァれかよび集め
をけはざま終に勝利を得ざる所
新見世の中は二八にわさびなり
初ものゝ内でかみなりいやな物
しちりんのそばで讀でるみくじ本
ゆへ行くのにも船にのるやしき也
伏して惟みれば又行きたくなり
かけひまの内干大根などをうり
から紙を品々こすと大ぼとけ
三の糸小ゆびでまはし〳〵來る

一人づつ丸腰で居るわるいうち
見物左衞門をあてに土手の茶屋
どてらかいどりで六尺ども歸り
金の番いせやの息子よしにする
かく人もおほかんめれと辭退する
四季折々のたはむれに母こまり
ゆび三本やつとの事で嫁ねじり
白あがりの詩を屏風に張て置き
來ればくるとて二ヶ人迄金糸かひ
めひを入べしに矢鱈にいびる也
くるまどめ道をまはらぬ十五日
むごい事伯父化物をたゞよこし
百しても鯛は奢りのうちへいれ
知れぬ物あやめおいれの惡い人
米屋でもけいせいやでも物日也
じや〳〵馬に友が出來たで事に成
覺られぬ樣にうたひであひづ也
よんだ當座は出ちやもどり〳〵
胸あはぬ襟へは高尾つかぬなり
一町はさせほせ傘にかゝつてる

おこそうで惜いめんめを嫁隱し
上下を着ると内でもかしこまり
御とむらひのありがたさ大一座
論語をば妾そばからひつたくり
ぬれて行く女かぞへる雨やどり
一人の客にあひかたが千も出る
三をひとつによね澤をくんな也
さる時は九十兩ではすまぬなり
母親の目にはあさ湯と見える也
盛遠は元こうしなふことをする
五百から一たいぬけて人にすれ
はうそ神ふんだんだるま貰ふ也
馬はねをひでさとが來てぶつ毀し
亭主にあきのかた三年ふさがり
ほうばると何も言はれぬのは小判
きりやうよい持參をと母をんな也
しら藝者母はうるさくつき纏ひ
花鳥には行くが風月には行かず
三ケ日またずびくには見世を張
白びやうし後生を願ふ風でなし

目がさめて居ると猪おそろしい
張切つて困るを恩にかけてくれ
朝歸り一度か二度はたしなめよ
まゝ母でいたしにくいと娘書き
兄弟でげらうを二ヶ人さし殺し
高慢な後家地をとこは嫌ひなり
御退屈金をばたにへすてるやう
强飯をくふは一座をせないやつ
宿下りすきまかぞへがいりびたり
傾城はきつとすわるとげびる也
貫二てうばくり〳〵と擔いでく
やくかして女房火鉢にあたつてる
さん所から今のばつたりは何だの
さむらひをまねても春はせにに成
すけんの中をす一歩の氣の高さ
石だのはしだのと本所馬をとめ
酒はたべやせんがわつちや上戸口
にはか雨せつちんで籠よばつてる
かいじやくし數萬の蛙鳴てゐる
小侍ひおらがとの樣まけこけた

てこずつたとこへ張良笛を出し
月のおつぱにかんだうを親父つけ
すまぬこと母の湯灌は寺でする
座敷らう文をとゞけて母不首尾
大黑はそれから御ろんじやりませう
六月の晝ねもほねがをれるなり
奉公人を置きあてゝきついいり
大鳥毛高尾りつぱにふりとほし
大一座三歩をまぜて氣がつまり
ひんのいゝ客は六鄕さまをうり
ぼんにつんでもとは金を安くする
火鉢のうへで頭かきしかられる
吳服屋の通ひ山師のうちにかけ
繪そらごとゝはいはれない時鳥
屏風坂邊りおねまの有つたとこ
直が出來て四五町歩く土手の猪牙
むかし〳〵たゞす娘をしいこと
紫やとなりのべにやこして行き
釣竿を出すは屋かたの淋しさう
行燈にとりそへうれのこつて候

息杖でちよつと見せてく金屏風
細見を大もじに書くせんさうじ
割床で仕事して居る木ぐすりや
三ねん目鎌倉がしへえんにつき
三つぶとん天水桶のしたへしき
もみぢがりむこやるまいぞ〳〵
うられる程の根性とやりていひ
三つ四つついてつき屋は一つぬぎ
化物とはなしを儒者は引つ叱り
だい〳〵をこぶ卷にする忙しさ
替玉をくはせばんとうぬける也
かうおやの前へ錢箱もつて來る
しりきつて居るに鶺鴒ばかな奴
邊見廻はしるゑのとこを娘あけ
七難そくめつと女房あきらめる
聾もあるものさじきにいつぱい
三會目箸一ぜんのぬしになり
後家が來て踊子みんなさがへ行き
既にがつしすべき所へおくり膳
なき言をひらき直つて常世いひ

よめん女へあら鞍置て引いて來る
思切つてとびねえなと船のぎう
江戸の客はく人に骨を碎く也
妾のはねだり下女のはゆすり掛
引汐でないとともゝりまだ恨み
ねたほけて煤掃竹でわたり合ひ
ふとい奴すりゑで一歩二百とり
古筆はえらまぬ神へあげるなり
二人してふり袖を着る十五日
御忍びの御供は誰も行きたがり
田舍大盡三つぶのをかうつもり
さかひ屋や住吉屋から來てうゑる
此雪に内に居るかとそやすなり
愚僧けしては醫者になる面白さ
しやうぐわつを二百十一日にふれ
子おろしの札は夜る來て張と見え
かるゑ澤馬ぬす人のしりが來る
ふくろ町口とりやすみ〳〵追ひ
九十九は撰み一首はかんがへる
梶の葉よりはしひのはを人は知り

三味線の外にも忍びごまをうり
年號がさくらの上ににによつと出る
金儲豆腐にむつをちよつと入れ
荒物屋からは哀れなりで出る
以來足ぶみせぬ氣でくどくなり
子供にも草履隱をじゆ者させず
おつ被せられたといはにや釣合ず
本所の寺もふさがるおほあたり
百のくち十兩ぬけたよめをとり
さらに桃もつて置いたは西王母
金びしやく盗れる迄せわがなし
いき替りしに替り出る下手役者
ごつた見世道中記だの脛巾だの
蚊が無いと其角千兩まではつけ
ふとゞきさ近しい中に其氣あり
かまくらも三十迄はをしくなし
相談が出來ない筈よじやみッつら
混雜さひなに夜食がそつて來る
市の不首尾は蛭子やにて買て來る
引取てなくてそとわに腰をかけ

百出して今をもしらぬ棧敷なり
父は子の爲に隱してひるまかひ
本性になると幇間は寄りつかず
いとだてやこもかはせて名を揚る
恐しいかほで島田をやりてねめ
來るときに小道へ寄らぬ三會目
まくよりもすだれの花が面白い
六夜にはしごくのとこと市の正
いなか間につもる相馬の杢の頭
我ものにしてはつひえな女房なり
はまぐりも早々門を追ひだされ
もう後家も止ねばならぬ腹になり
勘當の息子にさふさばしであひ
げんぶくも一どきにする呉服店
又みやう日と小田原の上座たち
手がるい船で日本の地へわたり
こしばりを袴はおりでくばる也
ぞろ引いて流しへ懸り叱られる
つまつたはひふき心わるくはたき
女郎のはなしさい中女房かへり

しんこうにねこの水のむ音がする
適さかに野郎もはいるいろは茶屋
福ろくのあたまを娘つめッてる
よし町へ寺澤りうのふみが來る
師のかげを七尺さるともう遊び
はさみ箱から萬歳やねずみ出る
あら玉に遣ふはくれの御えん日
風呂敷を被つた明日かやを出し
妾の不首尾さしうり數度のこと
御臺所すりばち山のあたりなり
庚申に宵から寢るは世すて人
天德寺おんむくじつてやぶい見る
面白いはず二ケの津が寄て居る
尾張町ぶら〳〵すると釣込まれ
やつたらに升をせつつく鰹うり
下女腹のたつまい事か他言され
勤めと遣手で壹兩はぢやうよと
袖に切先をおしあて二歩ひきやれ
夕立や十二字たすとふつて來る
柿をくひながらばくろは乘て行き

目が覺てまゝの紅葉をほんに見る
ふもんぼん半分頃でよこへきれ
駕舁の口からにげたあながしれ
三日程仕立やさわぐ夜着ふとん
さてつひにこない所とのがけ道
能い妹持てちやらくら武士に也
ばかな事妹がしんで武士をやめ
ろの國の人と息子はつきあはず
いゝ女房きかぬくすりを煎じてる
ふぢの咲く時分は花の山でなし
みやこではは見白川では月見
納まらぬ物がふつたとつれおこし
形見とて見れば小判も哀れなり
ばんづけを又御無心と百さじき
相の山手しやな女の居るところ
むづかしい文を花見の先で見る
納豆のかもにはたゝきまける音
命をぢんかいの如くやぶいもり
うれ殘りげに十目の見るところ
さう言て先づ見たのよと出來ぬ奴

花の雨琴しんまくにおへぬなり
俄か雨冬のそてつのあるくやう
つけ木つき握りこぶしは殘す也
畜生めとはあんまりなさゝめ言
八からがね能々見れば手が二本
白壁を見ろとさり狀ぶッつける
鬼の腕とりに供べ屋からぬける
ごこくじをぬけまいといふ意地張
とぢくつて着ますと姑がの强さ
戀やみと他人の目には早くみえ
檢ぎやうはねかねる藏をたてる也
三百店に新ざうとさしむかひ
間のわるさ中條のまへ二度通り
よつぽどのたはけ座頭と摑合ひ
よし原のはりが江戸往來にもれ
口にしやうめう眼には嫁をねめ
三十八年いきのびてふでをとり
尺八をふいて見ないと後妻いひ
唐天竺はけつの毛をかぞへられ
兄樣御馬鑓もちはへこきなり

ひとりべえならまだしもとせな叱
赤染とすはうのないし從弟どし
顏が汚れたで風呂屋へはいる也
興さめ貌でくりを出るかたい後家
芝居より高いさじきは繩からげ
念佛も四五遍いれるどじやう汁
もゝを盗んだ奴だのにめでたがり
いたい事月の上座へなほされる
さがやうをひょいとほうつて猪牙に乘
白ひげだからとなりには長命寺
あなたもかわたしも三ンと萬年屋
出がはりに勘定高いやつのこり
尾頭をつけてまぐろを三井かひ
ろじをしめますと戸の隙から覗き
勞痎の母は近じよのどらをほめ
百目がけ餘程こうじたばくち也
かさで分らぬでせんきに道を聞
水をねめつけて蚯蚓をつまみ切り
買食はいゝがうりぐひみじめ也
當分はのりもの町を後家とほり

海遠うして淺くさでのりをうり　狐聲
南無きやらたんのういやんなと孟母　一口
髻を切つた當座はほめそやし　芹丈
大一座下戸は女郎をあらすなり　かたる
びやう打と四つ手擦合ふ御緣日　寸魚
金屏風明けてあばたの產婦出る　かたる
からで一番のちゑ者を言負かし　狸聲
うつつい女郎がきたない無心也
娘をむごく大あばたむこにとり
鍋とりはしんとうつしにわらじ也
きふな事片々つれて中の町

午正月吉例角力句合

なり平を追ふのだに水いつ逃　狐聲
現ざいくわを見て三味線稽古させ　一口
けいせいの峨眉ひそめる月の前　芹丈
胸ぐらをとつた程には書けぬ也　かたる
壁土の中からときにあひに出る　寸魚
うす前へおもしをかける三會目　かたる
惜い事よし野で仕舞などをする　狸聲

雪打ちはらひ夏の魚見せるなり　狸聲
眼は九郎兵衞だはえととらまへる　中葉
かゝ様の前角兵衞もたいこやめ　木綿
人におにあつて百から四文取り　かたる
錢車出見世のもちを引いて行き　狸聲
旅だけに邪魔にならない様に折り　狐聲
誘ひ人がいゝで紅葉をたべました　木綿
あいさうのいゝが將門越度なり　如雀
大さかからは女郎屋こして來ず　一口
柳公お出つまは留守つまはるす　雨譚
御てさんは又江戸へかと腰を懸け　木綿
こび付いたほど錢のある薺うり　かたる
ほとぼりを醒して行けと母敎へ　文集
あやふやな主どりをする黑い猫　和笛
一生ゆかん氣だにこう書いて來た　木綿
唐木や始まつて下駄を一度うり　玉章
ごま鹽をふつたは長い夢ばなし　芹丈
勾當の內侍からむらさきしきぶ　雨譚
かはせ金わたして座頭旅へ立ち　文集
はなし龜一日ちうをおよいでる　糸柳

言込めたさうで內儀が擲かれる　木綿
金を木にしたらば錢をぐつと下げ　文集
桶一つかけると細工寄つて來る　文古
伊世平次にしてはつき島は大氣　雨譚
うめやなぎ兩木すでに竝ぶとこ　玉章
今入の女中をびくにたちなぶり　敵吐
姉のひく側でだゝッ子三を下げ　霞朝
轡屋は泥をしるべに追つかける　洗路
年禮の廻りみちするいゝかざり　狸聲
面白さはこでうちんで花見なり　同
春工面よしとぜん寺ふだをはり　玉章
長つぼね穴のいなりの近所なり　狐聲
棧敷番だんじきどもを追立てる　洗路
切つても血の出ぬに番頭百かし　狐聲
兩懸けで伊勢の三郎あるくなり　かたる
氣の毒さ碁笥から采が一つ出る　狸聲
せいらうは卷じたでやる遣ひ物　車道
拵らへ喧嘩ちろりが二つみえず　木綿
飯盛とさらにみえない品かたち　旭鳥
馬鹿な高慢おらがかさはよし原　雨譚

おくまが親父はら帶をせず生れ　木綿
ごうてき喜びますと四つ目いひ　三町
是から助べえと戸塚へ塚を立て　中葉
黑介の一社參にむすこ出る　同

右角力會結　催主　星運堂
　　薩秀堂

丙午三月廿七日開女柳追善句合

吉祥にちにたてたる佛かくなり　五樂
在五中將のはれ着はからころも　雨譚
同じ木にばかり名鳥羽をやすめ　洗路
鳥追も嫁追ひも來るうらゝかさ　五樂
十九年むすめを持つた夢を見る　狐聲
數ふればよッぽど月に遣ひ捨て　鳳頭
うすくもが背中其頃ゆびだらけ　青峨
むろ町の御所は桃咲く頃に出來　寸魚
鹿を追ふ獵師を四つ手乘せてかけ　狐聲
素人にしてもめつたに無い貞女　串柿
吉原一ゑんにりやうしたは紀文　雨譚
佐どのは金をいかして遣ふなり　鳳頭

もぐさ島などを好むがやみ出し　美徳
したく金見合の上でましを付け　雨譚
字餘りの已後は一句もいひてなし　中葉
花が三文ではすまぬ中のちやう　五扇
不斷着ぬ島をぬつてる旅じたく　車井
をはり町扱いゝ魚のつれる所　卯木
きやくの逃水吉原のもなかなり　高砂
文の來るたんびに息子ちゑが付き　五鳥
はぎは名物紅葉はとちに合はず　敵吐
よしがきへ目鼻が出來て琴を止め　五樂
五人の内でげひんながよく喋り　中葉
こゝの宮にも源三位ぬえたいぢ　車井
檢校の子どもほうさう重い筈　高砂
燕子花たらい一さうくつがへり　五樂
さかいやの息子のいたい田植也　間々
よし原の宿引口をよくしやべり　屡紅
相づちがすむと汁なべかける也　素鳥
ぞくぶつの名は店中でこはがられ　蔦故
三人で一歩たらぬを二朱あまし　洗路
梅鉢があたつてへびにせめられる　龜遊

氣の痛む屏風を二日かりて立て　石斧
りやうり茶屋本の娘はあばた也　伍遊
白浪のうはさ式部が來るとやめ　五連
ほめるにも銀閣寺には慾がなし　石斧
三つぶとん九まい重ねる面白さ　魚交
千人もはいて一ト重を身に纏ひ　一口
やぼらしさ切手を出てぞゥろぞろ　高砂
一聲を京江戸できくほとゝぎす　洗路
御殿中あやかりたがるやせつぽち　屡紅
碁打が來たでなまおしの小袖也　石斧
つらやくで儒者も袋を一つ入れ　木綿
やねの無い奴を代に出しやあがり　美德
引きまどをしめ辨當を内で喰ひ　糸柳
男のかはを被つたをつかまへる　五樂
ふらそこを入れたで息子内に居ず　蘆露
なせでもとむす子手拭被つてる　素鳥
あはアれな音でかた餅隱居喰ひ　雨譚
ほかのけいせいをかけると十匁　孤舟
泣子も目を明きいゝのを取る形見　二町
これは〳〵と川中のふねがつき　高砂

はき溜めにつる門部屋に國家老　高砂
うつかりと齒磨を出す附たあす　同
勝角力小太刀纏めて引つかつぎ　玉章
ちゆう兼備して居酒見世を出し　雨譚
長芋をたてかけて置き叱られる　屡紅
湯治場でなんにも知らぬ殘念さ　東水
五六人やかたへ下ぎぬいで出る　和笛
さくら草春のにしきの小切れ也　梅舍
女郎と一つふところ三くだり半　五扇
あすか山しろうとなげても〳〵　孤舟
懷でめしをもつてるむじん茶屋　芹丈
三文が女郎もかはぬ氣になりやれ　三町
あらつぽい下女雛皿がわり納め　霞朝
むづかしい書置をよむころも川　さゞ浪
内心如夜叉梅きぬへみつをぬり　芹丈
圍れへふいに來るのは邪推也　石斧
何んだ石碑かと一つもよめぬなり　芹丈
口よせをあざけり息子叱られる　孤舟
よい〳〵わい〳〵みのかたつけろ也　金旭
旅戻り意趣ざしをする出來ぬ奴　間々

片かははにこついで居る雨宿り　青峨
網の目から手を出すのは茶碗賣　美德
にたやうできねやとつきや大違ひ　狐聲
かけひまの内楊枝やのめしかはり　木綿
三がいに居るを汐干に母あんじ　五鳥
おろすこと尤も至極やげんぼり　五連
おゝさうさ〳〵にいちこかつにの　運町
六ケ敷さ嫁小ぶくろへつゝば入り　洗路
なべやぼり黑い手の出るいゝ日和　東水
十七はみめぐり十八はよしの　如雀
縫箔もこんやもしらぬくらう也　車井
犬のせわもなく紺屋は干して置き　素水
夕べには醫者あしたには僧と成り　麹車
時鳥ふぐこのかたのやからより　魚交
文づかひ遠くで一本ぬいて來る　美德
本望をたつした由をうつたへる　さゞ浪
紅葉をうり仕舞とうのいもをうり　高砂
たび送りはしより川が人がふえ　門柳
女房の迎ひに來るは一もんじ　高砂
しゆろう堂昔とけいのお間の跡　車道

おとなしさ櫃やつゞらを馬に付け　五鳥
人のちる時分に人の出るさくら　狐聲
浪人をこしらへるのが妾じやうず　五扇
乳のむは誰だなと來るふてえ奴　美德
下總でしりのつまらぬ雛まつり　文石
ほれてのおほきい丶男女房なし　高砂
上白は九合しますとしろいはく　如雀
恐ろしいわらは頼光二人しめ　石斧
さくらの元にて扱いかゞし給ふ　雨譚
男めかけの氣で居なと婿にいひ　芹丈
どこの隱居だか四人子房は出し　雨譚
お妾はほうじを祖としねだり事　鳳頭
りやうじゆ山行きますと德兵衞　五閣
三年目二人よこして又むしん　鳳頭
行氣は無いかといせやむだな事　孤聲
うはばみの目ぐらゐをさす村の嫁　狸聲
裏おもてある水茶屋ははやる也　芹丈
すりこ木をさすべき筈を鍋かぶり　雨譚
入定のまへに食しやう一度する　鼠弓
景清がきず岡ばしよになじみ也　雨譚

ゑちごやの喜平次團子うり始め　湖水
體のい丶ばくち繼ほの弓をいり　高砂
哀れむべしひさう小袖切りくづし　同
子の出來た見廻夜食はきつい事　同
堅い奴とう〳〵お手を附けさせず　夢中
可笑さはおうむも五人ぶちねだり　石斧
いッつけられるを怖がる江戸家老　高砂
屠所の歩みでやう〳〵と草津也　門柳
道理之介をとり立てやりねえな　蜃紅
土弓場も美しいのをまとに置き　五秀
鍋いかけ撞木を持つて風を出し　高砂
ふくろ持で無いまた唐人くゞり　同
ころり行く所へ馬がかけつける　卯木
紙ひなのいうれい花の宵に出來　高砂
とむらひの功德大しやが二三人　洗路
小山の如くゆるぎ出て一歩取り　狸聲
しうと嫁を見る事どかいの如し　同
短冊をおてらでもらふけちな事　芹丈
玉緒が切れるとのむに困るとこ　旭鳥
ばんによつたので六夜を仕廻ふ也　夢中

眞間から見れば正とうじ遠い所　串柿
こしを目當にさかやきを撫てかけ　文古
じひな事傾城馬鹿をふらぬなり　五帆
髪をゆふ下女開いたり苔んだり　花笠
淋しさは下の句同じやうに出來　風車
若松を紙でこさへる氣のどくさ　美德
木食のたい病めしをゆるされる　高砂
いぼのぐわん猶出來ぎな所へかけ　玉簾
黑猫をみじかいたまのをでつなぎ　同
な丶くさをた丶く所へくれの人　
船頭をなまゑひにして困りはて　同
長くしてくりやれ縁起に借るのだ　高砂
ねれかげんしんの如しは神樂堂　芹丈
大人に乳を振まつて乳母不首尾　如雀
ばちを袋に御きげんよう御出よ　同
名代にとしまの出るはごふく店　鬼蝶
後に穴なし有りてんま町の下女　石斧
おきやあがれ下女虫干を致しやす　梅舍
蟷螂がをのけいせいを妻そしり　玉簾
うさんといふ匂ひ女房かぎ出し　五帆
五十貫かしてあみ笠にもならず　五帆

天明六午三月　催主　清江
補助　木一口綿

第二十二編

花のあしたより月の最中雪の夕まで、言の葉ぐさのつきせぬたねの功なるえらみを書き寫して、とし〳〵やなぎだると題するも、此道のなかだちともなり、好士考士のむつましきをねがふ事。

吳陵軒述

關札を打ちかへさせるふじの雪
子の口へしたんで内儀客へさし
臥龍梅見てめうけいを巧むなり
仁和寺の茶番は事がもつちやうし
居る所を見たのが竹のふき納め
平家を語らぬとびわはねかし物
どうでしれるにぶちまけなとかね親
何でもと思たら後家ごそらそり
よしはらの狐女房を持つとおち
中の町明るくなるとほと丶ぎす
御喋りが來たと產所へつッぱ入り
けちな嫁きい〳〵歳を一つとり
むだよせをして算盤の直を付る
ばせをもいけず大いそへ藥とり
はた道具つけてあふめの嫁戻り
不二を見なくして力のおちる旅
大門へかりもんの無いおほ一座
三人で二歩だがかえる〳〵
ちんを縛らせかゞみ磨上がる也
母のるす通るものごとそ引こみ
義經の首かまくらでものをいひ
いし山で一わり引けの書物出來
をしからぬ命春までながらへる一
いんふと見えますと鍼醫口走り
から鮭をしごく古風な内儀かひ
おやたちを内百番でだますなり

早くかへりなさいよ御取上なし
今夜は己でしまいなと女房いひ
新造をかたにとつてるけちな晩
張良はんくわいを一字づつ盜み
饂飩屋の見世にびつこや草鞋くひ
三みの弟子七尺去てなめたがり
どうだなと戸へ寄懸るひなし貸
引おひのらう人ふうふ今にのみ
一ト思案ござると藪醫こはい事
毎日耳についたあともちをなげ
てんがいををしいと褒める他人也
梅わかは二月のするに京をたち
四斗樽の中へすつぽり馬は入り
ばかな事居眠つて居てつん逃し
うすずみで昨十九日むすめこと
あかい切れ持つて鎧のわたし舟
松飾りいけよくどしい物ばかり
どこぞでは藁の出相な店に出る
たれとなくおきな〳〵と花の朝
むづかしい鳥で覺束なくとよみ

らく天がまた來ると人玉が出る
佐殿大鳥ゑんじやくをはなさず
人かひのむだばね江戸の名所也
關所まへ女をなぶりなぶり行き
書にいはくけうし御げんと唐机
もう一度着て留めたがる嫁の袖
萩も紅葉もしり切つてござるぞよ
鎌倉がすむとあぶない所へ行き
くわでんは元よりこたつも戒める
思ひなし江戸町はりが強いやう
慘い事高尾つぶしにうつてやり
そめた物とてはふんどし計なり
内でくふ程いわしかふ中の町
すゞりの塵もふかぬがと御述懷
いざり松すけども夫もすてろ也
よび申すもとらうがいへ送り膳
いせやにかつをつんぼうに時鳥
關東べいは大そうなあだ名なり
旅のるす向うの女房だきこまれ
ふりものゝ内へ目腐入れて置き

傘ぶくろ嫁よこをむきはめる也
鰻をつかまへる樣にこんやいひ
吹もんだ抔と楚軍で初てはいひ
糸だてもかはれず上下で四つ手
後家爰をよんでくんなと些と出し
せんせいの下でびしよ〳〵を取
おれ計りうれぬと遣手きげん也
口をしさ女房に世をせばめられ
起ッくらしやせうによと般かさ
らう宅へ四つ手みじめな迎ひ駕
惡堅い後家で檀家へぱつと知れ
この雪に御太儀時にせがれこと
大わらひ嫁關とりとおないどし
死かはと水をさゝれるうり小袖
こも僧はまわたに針を包んでる
輕々と赤子をだいてしかられる
すまんぞう鱗形たやは暮れにすり
百人で一人はひどくおちぶれる
そばの皿かつぎ古法を持つて居る
石山のせいぐわんじのと寺ばいり

も丶引を帶ひろどけで直ぎつてる
あらきだを百匁程出す鍋いかけ
初のおはぐろにけんぶつ二三人
朝がへり今戸のけぶに取まかれ
光秀と長田ならびにしなのもの
ひやうばん〳〵所はかはらばし
けづり懸盆ぢやうちんの籠で賣り
あすは出勤しまするとと五杯くひ
をかづりは足で踏へてすひ附ける
すばらしさ男物着てくどいてる
のういんは川止などの嘘をつき
みす紙で煽ぐ側から取つてくひ
息子おもへらく三歩が物はあり
一合はべんさい天のものになり
時ならぬれいふくを着る五丁町
時もときわびさい中おや孝行々々
小舟にのつた女房をむすこもち
はつに來たちんかぐほどに〳〵
しひの木一本小楯に取つた松浦
女房が留守でかこひに内を見せ

とまやよりまきよりしぎは人が知
ゆげのたつ男判とりほうり出し
母の靨をつッついてちゝをのみ
いも見ざる内に頭をはかりこみ
蓮葉の濁りに後家はしみに來る
一ト引ひかせなと黑い口でいひ
すまぬ事花筵の上で四つを聞き
きゝ怖て二度目の高尾すなほ也
すばらしいのは關取のわらは病
おしまづきに寄り細見抔を見る
豆煎をかんだり貌をしかめたり
鐵砲を賣つたかねにて笈をかひ
正直などろぼ大こく計りぬすみ
はらさんざ見て供に遣る遠目鏡
草臥を嫁はおいどへ出して行き
上下はかさう二百で來てくりやれ
三會目ばゝアも一歩女らうなり
介兵衞といふ人腎虛やみはじめ
つらい事素見に計りほれられる
おういおい糸立さんと四つ手掛け

ぬきあきて毛抜を廻はす玄關番
はづしものとなづけ盜物をうり
おるんとおこう鳥居際に立てる
十三日やれ首をもてあしをもて
一箇國一ト冬江戸でくつて居る
勘當も二ゞてうしめでゆり兼ねる
つくりし城も落ちぬべきくやう也
いもじまで先から出來る美しさ
のしめ麻上下でなま醉さま通り
海と山とでかみをとく耻かしさ
小人に店をおはれるそどくの師
義家はおどしより政じかにゐる
妹とむことかんだうわびるなり
わるい口きいて其角は雨にぬれ
土用ぼし女郎の宗旨にないこと
卷藁へ具足を着せてばかにする
さよ衣やつとはんじてはらを立
なんぢ妻よをつとよと宿ゆすり
可笑くも無いに茶臼を見て笑ひ
北てきよりもなんばんと芝でいひ

女郎買ふ金を親父はためてしに
手合ひぞろへだと盛長ふれ歩き
手の平で琴を押へるほと丶ぎす
親子して四十五人の下知をなし
嘸椎のみがならうとやぼな猪牙
駕にのる迄四郎兵衞が前に立ち
石燈籠買人があればうる氣なり
こ丶いらへ座りませうと暑氣見舞
悴けたり怠けたり二度義理で來る
金主がついて駕ぶとんたばこ盆
二萬石かはづ取卷きないて居る
下戸へ禮いつて女房はそ引こみ
直し釘あたまの時はつよくうち
ひだるさを千住の伯父に助けられ
月を仕廻ひついでに出見世をしま
竹鑓のあし元へ來るかや丶ふき
御びくにん人の欲がる顔があり
五十ましちうをとんでく根津の駕
くらべつこして白瓜を一つかひ
白むくは三月ながれまうし候

はまぐりの殼と息子をすてる也
八丈を着てせいろうへ乘つてゆき
村談議日延えの木へはつて置き
歌骨牌だき繪といつて叱られる
そこ〳〵に見るは氣の有る紅葉也
筒井筒ひやした瓜をのぞいてる
死にんせうよと息子冥利に叶ひ
負惜み隱居としまを上げるなり
一遍は瘡もかきやれとたはけ者
正月はたるから小粒つかみ出し
あみ笠をゑがほでかぶる柳ばし
妾が兄すつぽんつきを持せてく
三丁目にほはぬみせが三四けん
珍しいおこゑがすると傘を出し
涙にはもろくないのはしち屋也
品川でやくをよけるとふとい奴
たなへ上げよその内儀の不義話
十人がよつて見たのでうれ殘り
燈籠がなくなつてから八つ着る
内こうが付いたで圍ひ惡まれる

はッつけよばりで出やしたと女房
字あまりの家名を付ける五丁町
むづかしい口で隱居くはへ烟管
いびりてを澤山よせる談義そう
こそめでたけれと戸棚で留る也
わがどらを先へ話していけん也
御主君はひとり無刀の御せきひ
口とりにそびき出される妾が兄
ねごとにて女房畫行く事を知り
ひのえでも無いのに殺す美しさ
北國訛りどうしいすかうしいす
愛想をつかさぬ氣だとかさぬ奴
てへ〳〵の戴けのとて振を付け
ねこも杓子もと樂天おどかされ
晩あたり行うかどこへ文が來る
桑をつむ女房にほれるばかな事
かり金の穴をか丶ァに掘り出され
靈棚にいんごうの無い耻かしさ
すゐ瓜盗人ねぢ首にして逃げる
百やすで首をく丶つた店へこし

妙義はるなをねだつてる輕ゐ澤
ばからしさ馬に乘つて丶道をき丶
歩かれぬ筈琴箱をたてにしよひ
ばん太が所で一トどら御用うち
すり物で袋戸をはる安いんきよ
にはか雨四つ手に禿ふたりのせ
ほと丶ぎす聞いたは後德大寺也
ひどい事やりてと座頭同居なり
いそぐのに偖々子供よけぬもの
けんたうじ後は茶漬を食ひたがり
斬切のそうを茶屋にてゆひ直し
ちゐが出て日暮から出る片しまひ
慘い死に樣やうきひと高尾なり
病人を祖とし八さくころもがへ
ぞくにかこはれてかたみが廣い樣
踊子の跡へねり馬のせなァ乘り
枕にのこるくすりとは四つ目也
四人と二人とむらひくづれなり
ろせいはたきたて冷飯は最明寺
琴箱を横にしよひつき廻される

もてんとすべからずふられじとすべし
濡ッ手を拭々みごろどれ見せな
遠い寺もうじやを誘り〳〵來る
來たさうで圍ひ格子に貌がなし
狂歌でもよんで見やよと中納言
金は持つたが手紙を書いたざま
丈に餘れる杖をつく小ざッとう
連がふられたから突合でふられ
百人一首かぢをも一人入れて置き
うらみぼい歌ばかりよむ源三位
こんにやくを小便桶で賣に來る
熊谷はふしよう〳〵の手柄なり
魚ふちにをどる十目の人だかり
ゑぼしきて築地の穴を四つん這ひ
たいそうな引料の出たもみぢ也
髪をそる遺言は後家よしにする
おしろいとき乍ら舟をしぞ思ふ
銀烟管にて下知をして堀へつけ
江の島の精進むごいことをする
時鳥さやうならばとないたやう

さいあいの婦人に別れやけに成り
三年はざいかまくらと覺悟する
白むくで兎角さむけがしいす也
傾城をくぼく見て居るそん料や
藏たてる迄はなすびを植ゑて置き
禪寺はしらふの石碑出して置き
けんぎやうざい宿不成就日なり
病人を取寄せてみるはやり醫者
本庄をさきと草鞋をはいて出る
燒物のうらをかへして初會ぎり
まさきのぴい〳〵ふき乍ら野懸也
山ぶきの花だがなせと太田いひ
あはれにも面白いにもよしの丸
百兩はきえ安いが痘痕はきえず
手いらずの芋でながめる後の月
打ちしきに一つ十八かたみなり
かつたやつ唐臼に耳そばだてる
通りもの書はまなこに血を濺ぎ
能書の通りぢや四つ目安いもの
朝は疾からおひんなり嫁をねめ

あるきくたびれ關寺へ辿りつき
米櫃の下へしかうときれだたみ
鞍替へしてけがあるなと妾が兄
うるさゝは初雁がねをすねで知り
初がつを高とき犬にくらはせる
おくり膳美しいかときいて見る
仲間は二百がわらで見えぬなり
もう死んだらうのと酷い尋ね樣
楊枝屋はざん米もうりさしもうり
蛇の道をつか〳〵行くとわうじ樣
すゝき田は冬ばッかりの女郎買
たでくふ虫もなく毎晩賣れ殘り
山ざきをかうべをかゝへ鼠にげ
南風で地中れいらくしたもあり
八まんの氏子月見のいそがしさ
九十九は古歌で一首は新らしい
京の鬼さたを大津で買つて來る
御ン女房といふ奴をつれて來る
珍らしい魚鳥おッつかッつ出る
なりひらのだうらく話本に出來

丸寐して居た帶をとく中直り
大阪のまつりへんしやう男子也
らく中は綾やにしきの中を行き
頭巾でもめしてと茶屋は笑止がり
四十二はから紙許り見てかへり
楊枝やは戸板に豆を出して置き
さがし事女房は宙をとんで來る
始皇帝かべの中には氣がつかず
からやまとに無い絹を藤太着る
歌をよむ度に小町は名がふえる
紅葉見て來なと出しなに輕く燒
くどきそびれて簪をまたかりる
太神樂どんと打てはひよいと取
若衆にほれたを尻めと申すなり
なげ入とちがひ投込みむごい也
庄之助數萬の人をいひふせる
鉢卷へよろこびをいふ產みまひ
うぞうが出るとむぞう來る下女が部屋
かし本の加筆いたつてのそ筆
たけのこを盜んだ樣に明智され

年寄に夫婦げんくわを息子させ
大社くろすけしやれて叱られる
運のよさとう〳〵二人なが尋ね
すばらしい舅爺ィをかま田もち
最屓の沙汰として兄貴召出され
及ものざんまいで神慮を仰ぐ也
公事宿にちうや枕がごろつかァ
初だけはほめてる内に出やむ也
けだものや虫けらの中仁王泣き
買つて行く物は品々有るところ
是では地文だと突き出し叱られる
せわしない猫鰹節でくらはされ
虫の知ることを唐人氣がつかず
ねこだ敷く車力はひとに羨まれ
歸りには極樂を行くいかだのり
さいふから出たにはいかい御高也
業平にとしより朝臣いけんする
先たばこぼんでお妾にはへおり
すみよしのとなりの國は四千石
あいさうのつきた傾城金を持ち

くれなゐさまのお客を遣手ねめ
傾城を勝手へ入れてまつを立て
すてる神計りで平家つぶれたり
上だんに堀の持佛のりんを打ち
顔に有るあざもやッぱり金をくひ
聞たかととへばくつたかと答へる
客を見送つて殘りをぐッい〳〵
てへ〳〵をするとくいつみ直に取
たが來たか草履の見える一月寺
四五兩ですめばお袋請けだす氣
のむ所が有とは素見おきやァがれ
柳とはいふもの實はさくらなり
はんざふで黑染をする耻かしさ
はく人と江戸も一日いひたい日
五つ目ははした佛がきらひなり
御涎をおふきなさいと侍從いひ
今度から行きなさんなと中直り
あを苦衣に似てとうろうまけず
びはをひく窓へも一人二人たち
花嫁はかんがへもなく貌をぬり

よく〳〵のかわき婆ァへ淺黄寄り
こはめしも憂ひな時はす貌なり
衣屋の嫁をしがつてしかられる
宿がよひやめべィならと村の母
しやば中を尋ねましたとあるきいひ
合羽屋の看版火の見のひながた
二三疋龜がなまずをうんだやう
往還をふさげ切見世たれて居る
おきやァがりますまいと出る朝歸
隱家もなしとはけちな御せい也
共稼ぎ女房がまへはふえをふき
いびり樣こそあらうのに助べいめ
べゝは着せよいが小袖は着せ惡い
いろ男たゝかれながら糸をぬき
さつま薯ばたへ瓢簞植ゑた沙汰
棒組やいゝ御かつぷくと前おき
切れた三もたせしなのを買に遣り
かふの座は金屏乙座まくのぬし
御はなし段々雷のこゑに成り
孝行のしたい時分におやはなし

すみゑがいゝで江の島見て歸り
やど引は萬歳ほどのはしらだて
名句の手がらしひの木へ二三人
慘い事さかゆがすむとさつてやり
ふじの外にもしれてゐる三笠山
新ざう迄はふりたらぬあきの雪
突合を能する聟はおん出され
御一所といふやつ平の蓋をのせ
朝がへり愚なものにいけんされ
みんななくなすと異見のしてが無
畏れ入りましたを其角聞き飽る
年よりださうであみ笠迄わらひ
手習子はゝをせめるとまた筆か
豆腐屋はさるやねずみに忙しい
古ぼねに成てみやこを開くなり
よし金ゆゑにふられんな力なし
くつきやうな射手は娘に關らず
川崎へ參るかげまはもういけず
うぬがてに錢は戻りと素見いひ
ぼん前は天狗だふしにされる也

本惚と見ぬいて夜具をねだる也
くら普請大きな茶こしさし出し
いろは程あるのをこすと秋葉也
ふんどしを女房催促してあらひ
やぐら下やくしやと女房居る所
おいらがにや具足が有と御用いひ
其氣をお出なさるなと外科はいひ
くわういん惜むべし彫物が目だち
齒を磨きかけあをむいて物をいひ
紅はぜんたいしはいとこで出來
はぜ釣の事可笑くもたまをもち
ありがたの御とむらひや大一座
耳よりのとこに大佛おはします
くき漬をくひに半日齒をいじり
からくりをへッぴり腰で覗いてる
山下でゑんとんゐんは知りませぬ
かうなされてはと龍女へ藤太いひ
墨差を齒入れちよこ〳〵遣ふ也
ねん始帳作左衞門とともがかき
息子をむごく大あばた嫁にとり

意見する親父のむねに嫁があり
紫を竝べて見るときようがさめ
虎の尾もさくらの時は踏で行き
臆病な客やみの夜に成つて來る
二三通後妻書きおきおッかくし
子安貝をんなだてらな土產なり
いたづらな後家內儀から文が來る
渡しばであすおこすよと夜伽乘り
譯のある勅使を宇治へたてる也
奥樣の三味線ちッと不出來なり
先に目が二つあるから金をつけ
よみ人のしれぬは歌の川ながれ
茶の給仕させうはけちな見合也
他人のはじまり兄よめをねらひ
古池のそばでばせをは吃驚する
居角力の行司あんどん下げ歩き
吸口をみがいてもてと親父いひ
御てかけの眷屬おの〳〵百石
垣間見は尻をつめつて代りあひ
ちう三は殘つて耻にならぬもの

越後屋の稻荷を其角しやくる也
草臥をのせる四つ手はもどり駕
いつちい丶ちゑは夜伽をうつて出
盃のまはりじまひはあばたづら
死人に口なし置き土產とぬかし
二箇國のはしのふそくを渡し守
上りには女房とかうの望みなし
見縊つて二朱の屋臺へ連て行き
いもじが白いので後家出來兼る
四百三十七萬餘たしていひ
今のあづま下りはねつこりと金
いやらしさめかけ此頃茶をはじめ
よし原と知らずにあてる袴ごし
役よけへ行くふり袖はうれ殘り
金屎をひるのは乳母のそさう也
ばかな事かげまやけさを持てかけ
とり繩も手錠も見える三味線屋
悔みにいつて先づといひ出し困り
拍子木で福井の田地た丶き出し
もりやはつ丶きらいごうはがありがり

一ね入りしてもやつぱり錢の音
燒ずにゐれば燒ぬとてかんをつけ
言葉多きしちおきは品すくなし
どろぼうを一俵にするむごい事
主の手で御箸入れと書きなんし
がさ〳〵といふと蜻蛉はつるむ也
らうがいの母はむす子を唆かし
あそぶ事法ありせん香をたてる
もう二せんつけてみやれと御新造
雙六の繪圖で出來たる御庭なり
をかしさは捨子をされて自慢也
ほの〴〵に明石の殿の御立ち也
もぎどうな出替り馬でうッぱしり
簪でよめはちうゑのすをはらひ
母親を生れもつかぬつうにする
ゆふべもてたを女房にらりにされ
氣の毒でありんすにえと來て倒れ
里がへりはなさぬことは母聞かず
案內者よめぬ額へはつれぬなり
どの羽織着てござったと下女に聞き

きじづかひけんもほろゝの御挨拶
月に二度うゑ木を通すわたし舟
惜い武士素麺びつへ入れて置き
日本橋おし分けて見る買つた奴
罷り違ふとこもだよと空を見る
息子の琴はらうがいの下地なり
吳服屋に無いのを拜むたへま寺
世續村よいけんとくのうばが來る
やく不足だらけ素人の芝居じやみ
百棧敷そらおそろしく一人なり
にやはないもの清げんの式部卿
綿入がなせおひえだかげせぬ也
とむらひは五人で一人はさみ箱
昨夜初會のごてれつがらんをいれ
とうのいも坪一式ではやるなり
田植に出すをおみやれと村見合
がうに入つてがうはらなは斬切
品川のいしやはいめうは芝山也
ぞくめいた名はえびす樣計り也
一つめかけはしやうやうを好む事

せうべんを四十七人せずに居る
巡禮の樣にたかのり書いて居る
すねながら引つぱられ梯を上る
いもの無い月を品川ふたつする
いんくつな寺いけづるい國へたて
いんぐわな事を言立てる泣上戸
地獄からことづてをする延喜帝
勝つたなら逃て來なよと女房いひ
ばちあたり正五九月に追出され
濡の幕下女のび上りしかられる
邪魔な石夜は一人でかなしがり
秤ちぎきッかり五十懸けて遣り
洗濯にこそ上げたれと八百いひ
御機嫌を見ては論語に邪魔を入れ
賀の祝ひ心中に出たまではなし
夜伽同士初音の論でねたが知れ
ものをいふ樣な刺身を島で喰ひ
蛤をすんでにますではかるとこ
おく樣をしりから出しに國をたち
づかんそくねつ六月ふじのやま

看病にはり合ひの有る事が出來
柳橋どらやたいこをつんで出し
火を一つくんなはけちな圍ひ也
そこ爰を押へてをんな馬にのり
駕舁は傘屋の見せへまけて來る
結納が來ると伯父とはふわになり
もうどうもしえゝませぬと早太言
雨いとう降つる夜内からひよぐり
魂を入れ替へますとせしゆに立ち
胯ぐらのひつさけさうな下手の鞠
色香たへにして常の下駄にあらず
割下水とほり夜中ににげるおと
三浦屋の有る細見をおやぢもち

申の正月吉例花角力會是より

萬ざいでわらひ命をのべるなり　川長
信濃でも京へ出たのはづない也　嘉樂
きつい事十三里有る馬場を乘り　如雀
太鼓持らうのすげかへ見て逃る　中葉
伯父迄がよると座敷のふえるさた　久鳥

かうえうをすると紅葉はだしがき、　古松
鈴虫は御寐間淋しく夜をふかし　豐好
大もんをごふくや一家丸にする　同
年號もよしのゝ方はさくらさめ　木綿
安い駒下駄雨に八ッそくに付き　嘉樂
ゑちごやのくらぢう姜かぎ廻し　かせき
う三といふから水の方がかうしや　狐聲
夕べには財布あしたははさみ箱　中葉
ごまめでもすむと鰯を安くつけ　久鳥
諸葛亮いゝ手廻しの石を居ゑ　嘉樂
金持へはだか參りのうつくしさ　川長
二三人海をもわたるやくばらひ　狐聲
今川は父百にんしゆはゝをしへ　久鳥
三圍りの御留守にあるへい紛失し　かたる
砂糖菓子がう天井へ入れて賣り　玉章
かうさくの道具迄持つ名魚なり　同
きいな事故武者修行おん出され　仙羽
元祿の頃はつゞいてかたき討ち　同
うたひにも三人むづかしい婆ア　花口
貌二つ池をのぞいてにくがられ　狐聲

所作事も太刀打ちも成る神樂堂　玉章
さいろくといふ人念に念を入れ　かたる
忠孝で有馬のたうぢとめまうし　玉章
槍がふらないで素一分めつけ物　嘉樂
御職丈一つ目の有るとこにすみ　横好
惡い物ふりますとは四五たびめ　和笛
下谷のは仕合せ芝はふしあはせ　鳳頭
返答はどうだとひどいくどき樣　中葉
きりやうの有る人年禮に早く出る　露舟
春のわらひは箱根山こしてから　清江
釣ぞめと見え冷麥をかつぎ込み　同

右　催主　星運堂
　　差添　薩秀堂

午四月開き角力會

大人をやりこめた歌も定家入れ　洗路
衣のそでを三度引くおそろしさ　中葉
めうもんな浪の打つのは和歌の浦　高砂
御とうりう鳩やからすの聲計り　五樂
御歌で見れば住み惡い樣子なり　如雀

錢をたやさぬ工夫するあはの守　雨譚
つり鐘はうそだが雨は本にふり　梅舍
伊勢がのは場所撰みなく出來上り　石斧
かきつばたけ高いざいご者が折り　素文
かまくらをいてん大金持になる　石斧
是がわざさと一家中目をつゝき　五松
そくたいのなかへ女の生醉出る　文集
奇麗なあだ名は待宵とものかは　五樂
下げる膳はし取つて遣る三會目　何がし
初物のそばでからすり鉢をすり　石斧
一年つみ十ねんはごしやうなり　露舟
ほとゝぎす有明たどん殘つてる　五帆
娘のそばへうかとよる年に成り　文集
風のまへ日に燈火はきえるなり　玉章
十三年忌はざしきを持つてとふ　素鳥
ほんまうさむすめ兵法めに入らず　狐聲
狩衣をこまいの折れで度々破り　高砂
盆棚はみんなはたけの月たらず　古松
梅のなげ入れ白むくで生けて置き　五帆
おとゝいの梅若けさの掴みあひ　五扇

天井へつかへて曲るかげぼうし　横好
關東へいたちは道をきらぬなり　五遊
和らかにどれがあやめと源三位　芝烟
品川でどうぜいのますいせの守　五樂
こりはてゝ油と醬油べつに置き　和笛
人麿をね潰して下女まくられる　素鳥
堀迄のつもりに火繩切つて置く　石斧
十年はてふよ九年ははなよなり　芹丈
腭でおふ蠅は六味へたかるなり　高砂
こはさうにさいかちのを摘で居る　五帆
錦木をうすくも直きに取り入れる　五清
笑つて客がかへるとしかられる　五樂
五六杯食つて伯母をすてに行き　高砂
まんざらのむだ安產の使者の供　雨譚
新世帶たゝみのうへでみそを摺り　車道
只で無いやくしと女房見ぬいたり　五帆
もちの丸やくを柳へよめはつけ　五秀
うらゝかさよめ茯苓へ豆を入れ　玉簾
なびいたうす雲をば請出さぬ也　芹丈
水ばかりにげると思や月もにげ

針玉にそでをあげ〳〵二本かひ
借が有るさうで御慶に念が入り
釣合つたちやうちん堂にぶら下り
立つて見ろ座つて見ろと女衒いひ
いま近江ぐらゐを妾やたらひき
川せがき嫁ものがたり舟がつき
吉原に買はぬ女郎はないをとこ
羽二重をべんべら物と親仁いひ
律義な紅葉行き返りにあやまり
かッぱしりたがるぐるりへ屏をかけ
隣から百かりて來てまゝへ行き
きんせい東方どつとゝふつて來る
しんしのみ箱女房出すいゝ日和
他人がうの入つたはあべの仲麿
三千のけしやう流るゝ水戸じり
いゝ日和寄切れの戸を出して置き
取卷いて主の八卦はあたりんす
生醉のわすれて歸るよめのかほ
其跡へ來るとはおしが强いなり
十七八のたんと居るよしのまる

江戸は朝京は夕ぐれじまんなり　串柿
一度宛茶にはされると釋迦はいひ　五連
麥藁のじやすゐを女房廻すなり　横好
看板のさうめん笊のうらへもり　丸水
秋葉から天狗がついて川をこし　素文
盜みついでに御みやもと心がけ　五閣
青ぞらに毛引かりがね四五十羽　蜃紅
難所をこして四會目へ上るなり　花菱
身に付いたくわはうと妾憎い口　何がし
むすこのもみぢやきなほし〳〵　芹丈
目あき千人も目くら一人に成り　美德
かるさんの無心髻を取つていひ　和水
珍客を一人ねかしてどつか行き　五鳥
辻ばんは鑓がとほると本を見る　糸柳
それとなくあれと〳〵が暇なり　高砂
年明けといふのが女郎安目なり　文集
正夢の如くにはなすふてェやつ　狸聲
釣り忍ぶふり〳〵をかけ叱られる　雨譚
ぞくな男だとかね好はぶかれる　梅舍
短冊が子返りをして御らんしよう　門柳

寐た振を覗いてどつか又うせる　文集
反物で春中をぶつてほしからう　鬼蝶
風呂鋪に手紙を包むちからなさ　雨譚
放し龜やつこをふつて日を暮し　素鳥
藥賣りのはをさめると人がちり　美德
上下とふんどし並ぶいゝてんき　狐聲
憎い程いゝ聲だのとつぼねいひ　文集
あま茶では喰へぬ鰹の走りなり　丸水
竹光のけいこ一ト月してねろう　石斧
嫁さへ〳〵とぼた餅を七ッくひ　素鳥
三人で一人魚くふあきのくれ　如雀
ちう三をびんばう神と親仁いひ　狸聲
足袋見世で指をかぢるが上座也　丸水
こゝいらにせうとは早い切落し　素鳥
つう仕立のねこ抱へてすゐて居る　雨譚
摺子木におしをかけたを公家衆持　五秀
風上みへ廻てすてる鳥のはね　古松
おそろしい酒宴久しい木ずゑ也　玉章
酉の町遣手へみやげくまでなり　同
じれッたい文が花見の先へ來る　握機

仕廻ふ時ふたへ入れるはけ鞠也　高砂
顔見せの木戸番首がさかさなり　玉章
八百の身だいわらひつぶすなり　洗路
目もじならでは分らぬと畜生め　文集
松のうち内儀毎ばんのしをつけ　横好
禿を袖にぶらさげてにげるなり　五閣
まああれも入ろはけちな奴と見え　高砂
そりやねいぴいだと姑くわい氣也　美德
淨瑠璃坂は五段につゞいて居る　洗路
脚氣自慢はしよくすぎた病なり　福邊
仲條の引き札で下女くどかれる　福松
觀音を七兵衞は度々うつて行き　狸聲
扨も妙國寺のそてつだとほめる　美德
御名代としてふとんが一つ來る　如雀
俗名にぢざうは一つたらぬなり　美德
木曾をだきしめ緋縅をねだる也　玉章
木綿高直につき下女むふんなり　高砂
ちゞめるとさり狀程な初のふみ　伍遊
初がつを女房の聲で呼びたらず　五鳥
八九人どろ〳〵〳〵と雨やどり　文集

子おろしを下女は八百へ買ひに行　五明
三太郎ほめ〳〵かはら拵らへる　素鳥
い丶筈さ三わりましの女郎なり　五鳥
深川はの丶字がないでうしろおび　福邊
丁がせつしやとく大寺へ初會ぎり　雨譚
茄子び漬で茶を呑むもげびた物　鬼蝶
燈臺もとくらし髪ゆひらんびん　孤舟
わざはひと幸ひの門でかけもち　狐聲
俄雨ほねをさしてくむごい事　福邊
島田よりかなやが先へ請け出し　志木
角田川情がこはいとすてられる　素鳥
持參金せいが半ぶんたかいなり　洗路
かりに女郎と顯はるゝけいど也　玉簾
女房を參らせたがるねりくやう　芹丈
よッ程な水けこま留めひッた〳〵　雨譚
むらさきと男ならびにむだ遣ひ　五樂
ま丶のつれ米のま木のと話してく　狐聲
するが町みほの松原しばに持ち　口喜
兩國はいんろう田町そでをすり　素鳥
明き店に置くのは市のなぐれ者　同

けいせいは三人跡は遊女なり　如雀
うめのはちうゑを賣る御ゑん日　寸魚
やきばへかぶせる樣なを局着る　美德
島田とは同じ木ならぬ下駄をめし　一町
雨の降ぬ前はもちとばかりいひ　高砂
火の中水のそこ迄もやきどうふ　福松
賓頭盧の生きたを湯屋に出して置　梅舍
きついふりたはらが馬を引て行き　素文
ぬけがらのやね舟の有る鳥居下　五松
よし原も四十里先はけちなとこ　卯木
藪醫者の餘人へといふかるい事　高砂
大三十日柳ごりからつゝみ出る　文集
とんだよく這入た夢を小町見る　横好
とんだ賣りもの雪隱のねこぎ也　蔦夫
道の記の口元でなくほとゝぎす　高砂
高野のをすぐにむさしへ引く所　一口
貞女には困りはてたと三浦いひ　車井
朝がへり座しきへ傳馬町が出來　如雀
みんな留守外科にねこそぎ見せる也　青峨
ぼうし針ほつたて尻に成つてさし　同

天明八申年初秋　右角力催主　文集
　　串柿
　　補助　芹丈
辭世　五月二十九日　木綿居士
雲晴れて誠の空や蟬の聲
右追善會柳樽廿三編へ加入仕近刻出板
　　二代　吳陵軒

第二十三編

淺草新堀端川柳叟年々萬句合の泉なるを利き分け、上戸も下戸も慂しむる其うまみを乞ひ請けて、如例柳多留廿三編に汲込み、書林星運堂へ送りはべる。各不二相替一御披被一下ませ。

輕卒被一成ますなと目出たがり　如猩
金屏風あつい時分におもにたて
つきのうそ天に僞り無きものを
ばかりではいやだと櫻連れがなし
たをやかな音桐つぼの方でする
肝心の禮を言はずに逃げて行き
ほころびる命を歌でぬひ置きし
よまうとて花を盗むもあぶなもの
はくちうに門をたゝくは十三日
なぜでもと鳥居の外におゐん待ち
むらさきに成と間もなく五日留主
かんどこがわるいで晝寐し損ひ
しろ水のながれた所へ蓮が咲き
お花見のあしたさしての咄しなし
年玉でなけりや一ばんいふ扇子
子煩惱抱くまでにして泣出され
うしろから鏡の貌へわらひかけ
たての歌横にして見りや燕子花
忙がしさ十七寐るとおしやう月
生けたごへ小判を入れる珍しさ
いろ〳〵な入れ物の寄る後の月
田舍駕あるきながらに肩を替へ
いくぢなき二人で飯や粥を焚き
色事のけもない内にいひ名付け
ろく七人にのぞまれて嫁はじめ
六あみだみんな廻るは鬼ばゝア

六月上旬てつぺんへたびをする
六郷はふねより駕がおもしろし
はやる下女また飛入りが二三人
孕み句は世上へしれて小町なし
八朔にすゞしいといふ仕合せさ
鼻ねぢり計りがねだる嫁を取り
はつ舞臺などと新大屋をいぢめ
はつ午はをとこ禿に世話がやけ
八十年はやく平家はうんがつき
にぎやかさ浴油の下で舟かふね
俄か雨にこり〳〵と來るやつさ
握つてゝたいじやうを乞ふ放し鳥
錦繪とすみ繪と行者もつて居る
女房へせい目で居るおほあばた
ほうせうに包みかねるは袴なり
法眼のじひはのれんを潜るなり
法師武者其夜ぶたれた樣に寐る
へんといふ逃げ道醫者は明けて置
別當がうたれ神ぬしなつて逃げ
といしの外は何もないきついしけ

殿さまはぬえから已後の御朝寐
道樂ものは川上みへいつたさた
通らねばならぬところに禿居る
道明寺欲をはなれてつめるなり
鳥籠の木になつて居る組やしき
ちう三のあがつた跡へいゝ女郎
ちよッ〳〵と逃て鍛冶の火にあたり
ちつとの事でも客の空言は咎め
りはくだと見えて石碑を讀で居る
雨うでの弟子雨も呼び雪もふり
隣家には船ばかりなる御はた元
ぬす人に飛び入りの有る市二日
濡た錢握つてちやア〳〵よしかな
ぬりわんぼうを脱捨て下女も春
女子共いつそうはつく月がしら
御禮まゐりをば二十に成つてから
奥行はあつちら間口二十けん
落すなとぐるり〳〵と縛るなり
おしかつの男はすたりきつた也
押賣りの藝子に祇王祇女おされ

奥は花お部屋は曾我のねだり言
おとうとへ兄の花出し恥をかき
わるい道手が板塀をあるく成り
かげ清に三つおほいが不斷の名
鐘供養番くるはせが一人來る
かいどりを春屋四五十ついてぬぎ
かうじやの内庭土のらうが見え
鎌倉の牢は抱いてははいられず
かうの座に居る拔駈けの手習子
かゝる所へ小林は義士のじやま
鎌倉に居るうち相の手もわすれ
かぢの葉はよん所なく散し書き
擔ぎ殿おらが野郎はいなんだか
かうぢ町冬はとりべに人だかり
かぶきの新參畜しやう道へ落ち
がいぢんの時は奥州ことばなり
がらくたをつんで隣へ音づれる
庚辛はさて不自由なつかはしめ
川立ちは川おめかけは產で死に
よせ本を三の糸にてとぢるなり

夜る見れば目計り歩くからす猫
よ火を据やれとおんべい母がつき
よしひろは冬は打たない刀かぢ
夜伽とはねつこりとした嘘をつき
たゝみを持ちあるき觀音を拜み
立聞きをせぬと一首は廢るとこ
旅がけにしては折りめ正しい歌
駄賃馬かゝし引いてくさむい事
立止り人をねめ〳〵もちをこき
そば切は嫌ひけんどんは五つ六つ
そめ物やこの一品は江戸へやれ
袖頭巾菊石もつみをつくらせる
つき花もその内に有る一ト構へ
月にもて過ぎてかしちのさたと成
ね過ぎたか四つで手明きを二人連
なら茶喰ひ〳〵品川を息子きめ
奈良の鹿座敷へ來ぬがめつけもの
長い繩ぢごくの聲を待つて引き
らうかひそ〳〵間男が二三人
むね近は狐がついて譽められる

胸わるで來ると許さぬ和歌の神
六ヶ敷言ふとといやは明け渡し
むごい事分けちへふとん一つ出し
馬からりつぱに落ちたはかね平
馬をしからせてはまごも一人前
うせ物は不レ存湯からむすめ逃げ
うるさくも晒ふみわけなくところ
甘さうに喰ふを見て居る雨宿り
いつそ野郎に成りねェと若いごけ
家毎にどれも一ト人はにくまれる
色直しろに成つて來る面しろさ
のがけ道折節連れをなくすなり
思ひ出してはシテワキの差出口
くひつみのたいはに及ぶ娵の禮
喰ふものでないのは花と郭公
配りもちから女人(にょにん)とて隔てなし
草苅よりはせんたくが嫁こはし
やなぎと娘こきませる楊枝見世
止みきつて居ざりとびつこ門を出
窓がおりないで姑女(しうとめ)すばらしい

枕がや二はり三はりうばはじめ
傾城のいんぎんなのもげびた者
還俗をする弟子を持つ松がをか
化粧の間ふじに明るともゝんぐワテ
ふの切れた傘やつとかしてくれ
筆をえらまずけし炭で一つ付け
ふさやうじ横にうごかす恥しさ
こまものや内靈實がかねまうけ
國府より手ざはりのいゝ三會目
こぢ付けのさむらひの出る松の内
吳服屋のばんとう家に杖をつき
小姑は丈夫な身かた二ヶ人まで
聲あらゝかに參内をとめたまふ
小付けには成らず鑓持持てのり
是がかこ付けの寺さと内儀どし
ごみのする事をとゞける忙しさ
後家の髪此世で遣ふほどは置き
御きりやうみそで六尺の肩休め
御くう所(しょ)のえんにあを傘五六本
御てん山むなしく歸る所でなし

これがほんの正宗だと棧敷だぞ
こんれいに娘をさがすとんだ事
菖蒲の有るに菓子盆さらひ込み
此人にしてこのやまひ軍師なり
戀の盜みをさせぬから病ひ出し
勾當は大きなもの着ほしが出來
江戸の富士吉原宿へすべりおち
てばなしで川なかへ出すいゝ娘
天と地のつゝかいに成る不二の山
あの客僧こそ大事よと品川
跡の車も一つ所かとむづかしさ
赤子の足をえいやつと尋ね出し
あら世帶茶袋をぬふはりはじめ
秋の月もちろん一句ではすてず
あたゝか饅頭喰れぬは市のかみ
荒海へ千鳥の鳴くはいなたりやう
あいそうの惡い石碑を禪は建て
行燈に取りそへ三分賣れのこり
猿廻しもらふと後ゝ見せて行き
三味線をばつたりやめて通ります

三會目すみから今にまかりいで
細見にまでのけものゝ樣に書き
きついこと隣しらずのごふく店
きんくわ一日のえいとは中の町
金屏風やろうの上にぐらッかァ
氣に入つたのに樟腦をたんと入れ
きん句だに禿雪こん〳〵といひ
きついことい、天氣だに夕立や
ゆ加減をしつたも百の内へ入れ
行く氣かといへばさん候といひ
めの上に藪入を見るにぎやかさ
飯盛にやよすぎ傾城には成らず
めの字からへの字に成るとつけ上
みだされる迄はほつても嫁いはず
見世先でくはへぎせるは屆け文
見苦しさお供の下女がとち狂ひ
箕の市計りは江戸をあてにせず
見ともなさ茶屋の表にぼくかゞみ
しろかねの箸を鳴らしていひを喰
しんざうの座敷枯木に花が咲き

七本の鑓はのこらずしづがさく
車力共撫切りだぞとかううあれ
猪さるは元よりぞうまである町
尻ひつからげ立向ふ下手のまり
精進を二つと蕎麥のいらぬこと
十二銅羽子板にのせしかられる
尻のつまらぬ年明きはやらう也
十三はすわりさみせん轉ぶなり
えびす講十日過したおもしろさ
柄を出して置て湯汲は飯にする
膝の猫ひざへ渡していとまごひ
ひきながら三味線はこぶ十三日
屏風飛びこし逃げみちは三百里
百里程有るを日づけにワキの僧
百兩はなくなり貌はのこつてる
品のいゝ棧敷つもつた雪のやう
晝前は老いにけらしなやうき姥
物怪(もの)がよし町へ行く連れに成り
物がたりぢきに本尊書きたまふ
物着星かたみを貰ふなさけなさ

ものを言ふ前に生醉身もんだへ
せん頭の足音を聞くいゝすゞみ
錢箱の有るがらかんの組がしら
晴雨とも晝夜元氣なほとゝぎす
すがゝきも文も立つてく大一座
直ぐにひらくで釣臺は百ふやし
菅笠へあてがつて居るすいかづら
すみ田川まではよさうと二三人
すきな事釣りにもてんや物が出來
せん宗のもみぢ息子のてんま也
二度目には三年ものゝ女房なり
すばしり口を出ると直き田町也
仕合せは車むごいははかり也
水におそはつて月見をにげる也
同日のろんはするがと近江なり
あなたは御巧者と娘はたちなり
いひ仕廻ひどつちへなりと歩行也
朔日の雪ものさしでつもるなり
付けざしを娘のんだがおちど也
床花の口のこ茶屋へはねる也

からかつて居るは初かね貰ひ也
四郎兵衞が關へも千鳥かよふ也
あきば道木の葉てんぐは團子也
立ちまふ樣に飛び込むは二百也
嫁はもうらりやうの袂切れる也
いつ迄見ても紅葉だとそびく也
名山のふもとはなんで〳〵なり
息杖で行くともらひはあはれ也
からかさをかさず借金はたる也
あどけない商人筆をおつ付ける
夫婦しめやかに月代ぬすんでる
古近江の糸まだいゝにかけ替る
しゝが谷がよひを禿いッつける
店開かッかちめいてほえられる
偶々は吉じやう閣で帆を見せる
てんがいや花に嵐をといて居る
紅葉のうらに摺粉木を下げて來る
座頭の女房吸ふ度におッつける
二十九日から仲人やたら來る
十五夜を十一ふやしころも見る

十二文が酢を下戸に振舞はれる
西行は半ぶんよんで吸ひつける
糸だてを被り四つ手の跡をかけ
てんがいや男のかいた文見つけ
夕だちにこり三百里たてつゞけ
上り段があぶないと治部氣をつけ
車引はなしをするにふしをつけ
惣勢は土手をおしてく吉野落ち
二ヶ人づつ御暇の出るざつな内
三つまたで玉の輿から轉げ落ち
木まひかき煙管をわすれ廻り道
やつといふ團扇(うちは)の下に仁王立ち
下駄をはく時棒組はつゑになり
なけなしの一分遣つて暇になり
氣の毒なあげまり四人ひまに也
かきつばた盗んだ娘よめになり
かうぢ町役にたゝずが足になり
女房にほれると先がちかくなり
谷汲でところのしれぬ人になり
番頭が江戸言葉ではげびるなり

賣喰をせげんの見込むむごい事
千住川よしの丶通るさむいこと
二十四相に下駄をうるとんだ事
いふも更なり番町でむごい事
十五疋早馬の出るふりよな事
八朔に黑助で居るつらいこと
裏の雪戸板だけかくつみな事
金屏風おつかけに又まくの事
傘をさそなら春日のはきつい事
返答はどうだといへば春の事
大一座編笠ゑんりよすべき事
旃檀の二葉をせげんほぢり出し
觀音は千じゆの見世を二日出し
何とぞちんを御次へと猿廻し
俄か雨ふるまひ傘を三井出し
腕押の地取りのやうな疊さし
ばか者も有ると仕立屋居所なし
無欲の全盛まつせへ名を殘し
こはい事落馬六度で仲人なし
癇癪は跡で氣のどくだと噺し

語りての面白がるでき丶てなし
形見わけ田舍は繩と竿を出し
かうぼくへ櫻をうゑて面白し
賴光へ出たはさ丶蟹どこでなし
ふい〳〵と出るのを伯父に母は言
憎い奴亭主の事をきやつといひ
近過ぎて穴がしれると五百いひ
摺粉木と手桶見倒しと四郎兵衞言
夢にだに小判は見ぬと幇間いひ
上られやせんと秋葉で藝子いひ
かけ聲の合ひに小聲で何かいひ
たつた二度いつたに女房どらと言
旅の留主見舞ひ一日むだをいひ
文やどんもうござんなと女房いひ
十貫目付くよと京の仲人いひ
寒がつて質屋の見世でだ丶をいひ
あまい酢で梅若をまた母はくひ
なんの氣も無いによし町喧しい
荒繩をがつしやうづつが根津で買
泣き妾か丶へてはかり事にあひ

立すぐり居すぐりさせて女衒かひ
女房のこのごろ髭をそりならひ
たね柿の助言をいつて一つくひ
前垂をかけてのッぺい子供くひ
干しうどん夜伽親わんにて喰ひ
味な商賣茶をのませとちぐるひ
太郎でも居ぬと爰らはすばらしい
大一座一ばんくびをいどみあひ
亂杭へとらまり太郎いとまごひ
迷ひ子に鉦のくだける頃にあひ
うんざりは男のそばに耳だらひ
髮が結はれて餘の家へ又かよひ
御めかけに出すを繼母恩にきせ
座敷牢珠數をねだつてこはがらせ
柳とむすめこきませる楊枝見世
い丶春にわかい嫁ごを引合せ
御持佛の下から下駄を出して見せ
韓信にいぢの惡いはへをかゞせ
吳の國の代物ゑつの見世で賣り
はかりへも高尾は褄を取つて乘り

するがまで行くは大きな拔參り
奥道者かへりはよほど手が下り
女房にひかせ鼻ッたらしかたり
貌をする側で一ぷく付けて遣り
九つの鐘をあひづに賣れのこり
月のまへかこち顏なが賣れ殘り
せいしうはならとやはたの中に散
御しんぷの見る細見は鑓が有り
人しらずなま醉座頭目がすわり
五百人けんぶつのます大あたり
折べからずが見えぬかと下戸呵り
舞をさめると懸取りは又しやべり
取れぬ懸け猪牙を一艘棒に振り
信濃にてさぬきの事をよく綴り
行平とおんなじやうに嫁かへり
廿五工かゞみ座敷が出來上がり
あく迄喰らひとち狂ひ二ふん取り
縺れ糸おへなく成ると嫁に遣り
龜で足やすめ鶴までまたおくり
撰り人で居風呂桶をかりに遣り

まぢり見世一分恭しくすわり
去り狀を有髮のあまに成つて取り
がた〳〵と戰へ乍らも嬉しがり
明るみへ出されぬ物を呼びたがり
下女籠の鳥だと文へかきやァがり
生醉ひを勝手で嫁はをかしがり
かきつばたどこか思ひの外はまり
芋が子はやとひ禿に出でにけり
こりや〳〵とおうばはつした飛車をかり
川端の小僧あたまをはられけり
見物にしたい白髮を詩に作り
人別をめでたい事でぬけるなり
だいり造營四分板と小わりなり
立て膝で打つがかぢやの亭主也
かはらけや一日こまを廻すなり
いせぢまで晝間は固い息子なり
算盤でもらへば嫁もげびるなり
遣り手の口と土手とが八丁なり
見せ賣りをせぬ傾城は手柄なり
花咲かぬとはおい込んだじせい也

きようとい趣向は女郎のやつこ也
申し子は夢ばかりでも出來ぬ也
三段切れで一ト切れはさしみ也
よしや君などと西行りづめなり
幽靈もたいしんでんはきえぬ也
素見物二階に居るはしらぬなり
せに車若衆が一ト人まじるなり
惜いかなあッたらむすこ律義なり
へんてつもなく爺樣と炬燵なり
梅柳山はざつとしてわたるなり
しんからも出ますと外科の座なり〳〵
上ハざうり客がはいては靜か也
かんとこが三十日できまるなり
猫の戀ぶたれる時がわかれなり
福來たるすなはち死すは高尾也
來ずといゝ人まで雷の見舞なり
首打ちおとし灰吹のさうぢなり
唐人と布袋せなかを合はせてる
持つたのと息子仲間を外される
一ト人客から傾城へうぶ着來る

酒屋でも儉飩やでもぎよつとする
つくねんと花えんの土に三時ざし
業晒し日本の地へも二タ人出る
女房をうかゞつて居て叱られる
舟が着てさうらふとぶら持て來る
六夜待ま一もんじにかけさせる
とりやげ婆目脂だらけな貌で來る
一生に一度我がかほ見ちがへる
そば賣りは門を壞すを見てにげる
同類が有ると母おやこすられる
兩方の木戸がしまるとばゝァ出る
くだ簾一ト摑み持ち立つてゐる
口をすくして勞痎にきらはれる
品川へかぜをくらつた客が來る
腹あしきばゝァ一分で笑はせる
だまされる度に母親ちゑが出る
よし原のつぶれた夢を母は見る
はいつてゝ造作をするのり物や
ゑちせんはいたし惡いと小間物屋
大丸のけつに大きな目ぐすりや

寺にかちましたとかりる祭まへ
駒はとめたが猪牙舟はとまらねェ
日當りのいゝで大きなふきがはえ
船頭の左右ねッからわからねェ
一ト人のる舟は思案の外を行き
地紙うり我慢が過ぎて風を引き
じやり〳〵が濟むと四人連で行き
江戸けんぶつには雀が一羽付き
げせぬ事目出度かしくだしに書き
江州のさんは只取ることが好き
四タ人は皆がつ〳〵と膳に付き
帳付の分をも一ト人上げて置き
嘉平次はこはい奉こう人を置き
富士の山三とまり程はついて行き
一人者死ぬとぬかみそ迄さがし
生醉ひも祭のあとのにぎやかし
す一分は素見に少しひんがよし
剃刀を一ト ざるといで御さい出し
吉原の御つぼね竝みの人でなし
はらからの爲に大小ねだり出し

一ぞくのかずに十三おほいとし

西正月廿五日開き吉例花角力會

差添　星運堂
勸進元　薩秀堂

上之部

氏子等は夜る寒くない家をたて
路よりもぺん〳〵草が御意に入り
屋根葺も井戸掘もしたみかど樣
京と江戸とで朝夕をそめる也
御本坊花の外には御ねり也
本當のかこうは江戸の四月出る
幾つに成つてもとにイこ〳〵潜り
いけたごへ四五本心あてばかり
岡ばしよへ嫁も三年身をしづめ
花ものをいはねど落馬人がしり
河東ぶし内では後生ねがひなり
ぶきようへつッいをぬるはつ櫻
四郎兵衞に捕へられるふぐりなし

洗路　雨夕
川角　雨譚
扇朝　如雀
かたる　窓梅
窓梅　雨譚
芹丈　柳雨
宿禰　窓梅
清江
鳳頭
かたる
櫻木
里山
洗路

じやの引け物を朔日の晩にかひ
生娘のうゝかいんにやかわかり兼
はこねのやうな女郎は縛られる
白塗の戸を月見過ぎたてゝおく
傾城をはいけんに行くいけぬ事
玄關ばん机にさせるけちなうち
一ッ足の腐れと書いて豆腐なり

中之部

お袋の留守に仕上げる座敷らう
近年は二日はだかによけい成り
そうろうの水で豆腐屋洗つてる
不二の夢果して川留めをくらひ
しよぼくない若衆齊をうつて來る
金づくでそるもな江戸にゃ有んせん
明き店といゝ手で書て見ともなさ
やね板をふみ〳〵覺えませぬ風
それならばさうよと亭主卷れてる
三浦屋の有るさいけんに人だかり
ゆは付けたりでお妾もついて行き
女房は外の毒立てばかりさせ

雨夕　屋紅
雨譚　いづみ
如雀　窓梅
窓梅　夢中
雨譚　由香
柳雨　夢中
窓梅　里山
丸水
同
かたる
雨夕
丸水

こッちらを亭主が向ひて喧しい
きいけんのひを打つ程に息子成り
此はりでつれるものかと大喧嘩
大きなだゝッ子引つぱる花の暮
後三年めだつた手がらごん五郎
いしやは醫者だが藥箱持たぬ也
うれ殘り御もつともなが二三人
物日の素見とび〳〵にのぞく也

前之部

高座ではおとし咄しもあり難し
よし町でもうとらまへぬ年と成り
賣物だのにめつかちやあばた也
もんがくと一休あたまにてすゝめ
もろこし二本で五町を廻るなり
蒲けちな花見をあてにやき
餘り御しひくだされなと禮のとも
大ぐしを頭へさしてむめをほめ
かへりには宿なしに成る筏のり
扇子箱折ふし出てはつみなほし
面白や猪牙にてまつらがたを行き

洗路　串柿
里山　窓梅
狸聲　由香
山雨　窓梅
洗路　清江
山雨　窓梅
左滿　風車
山雨　窓梅
雨譚
いづみ　屋紅
雨譚　芹丈
宿禰　窓梅
芹丈　宿禰
玉章　凡通
窓梅
一口
茅窓
窓梅
柳雨
糸
箕山

宿ぼうを十二にわつて御ゐん日
皮財布かつてかうとう憎まれる
かゞみとぎ若い男をつひに見ず
ふてる筈二つうへを伯父よこし
立ちくものにはかに見える向島
梅よほし瓜と中の郷おほさわぎ
源三位あくせく二合ほどひろひ
其にくさ間男が來て子をしかり
こりましたさうとお袋いつてゐる
いろはから京町へ行くしやうたつさ
飯粒を和尚はぜんへちつとのけ
はき物をれんじへ角力置き始め
なりッたけ調子を上げる猿廻し
やつあたり鎌倉さして女房行き
よりかずが女房大きな口をきく
ちやく船の日から町人禮に出る
のう〳〵あれなる御僧駕やらう
なり花にあきむだ花を亭主かひ
打敷の地黑しかたがなさに出來
金をためるのがうんつく上手也

洗路　雨夕
里山　雨譚
狸聲　如雀
山雨　窓梅
洗路　雨譚
山雨　柳雨
左滿　窓梅
山雨
雨譚
宿禰
芹丈
玉章
窓梅
一口
茅窓
窓梅
箕山
鳳頭
若竹
箕山
若竹
凡通
洗路

ふる川とかけ品川とといて行き　箕山
小便にはしごをさがすいゝ天氣　糸柳
百にん竝みの器量だに金をつけ　凡通
あさつては側で見ますとしまや言　竹印
けだものと竝ぶと仁王あはれ也　窓梅
納豆のまずいを亭主いつかくひ　龜石
二ッ聲で目のさめたのが下女自慢　丸龍
いけぬ晩女郎とッけェベィにされ　雨譚
黑綸子肩ひざたてるむづかしさ　窓梅
菩薩にも氣々女郎だの官女だの　墨莚
かんむりをものゝ下にて嫁直し　狐聲
おいらならもうかを着ると初鰹　横好
客でんで龍紋さきへぬぎはじめ　窓梅
素見衆がいゝと田町の酒屋いひ　同
祭に立てるを化けもの持參する　雨譚
しほふきやお多福をして髭をそり　其童
せんぴやうは死人の山の邊へこし　洗路
猿廻し一人で來るはしづかなり　柳雨
手拭をやつかいにする安むすこ　雨夕
にィこ〳〵ごぜ御物見の下を行き　宿禰

對面の幕でさじきでもたいめん　里山
からかさの貸手の多いのは其角　雨夕
外科の箱小僧何だかなめたがり　同
ばん付の錢を御門で乳母かりる　同
大尾折れ込んだ御禮に石の手水鉢　霞朝

西三月廿二日開き本郷天滿宮奉納句合

願主　串柿
文　集
補助　芹丈

御緣日までは氏子らそだつなり　芹丈
撰まねばこそ古る筆をあげる也　文集
天神を拜しほとゝぎすをたづね　川長
目に三日程はすゞしき夏のたび　卯木
しろ酒の無い大内はたまのあせ　宿禰
大どらだ〳〵と雛をかつぎ込み　丸水
正とう寺切りで歸つて灸をする　雨譚
はらからは鑓長刀でおどすなり　宿禰
傾城をうつちやらせるに骨を折り　魚交

梅若は向ひもやなぎばしへよび　姫小
さくやひめ三國一のすそッぱり　夢中
十六で產みつゝがなくはかま着せ　若竹
蓑をばうんとねぢ込み下戸野がけ　雨譚
京都では梅をぬすまれたと思ひ　夢中
らうたけて針わざならふ運のよさ　文集
いゝ花を貰ひうつりにやぶれ傘　若竹
つッつけて見ると茶碗を覗いてる　五連
番頭の手廻しわきで子をこさへ　丸水
海山にいゝ夏ものを江戸仕込み　雨譚
餘寒さりかね雛だなに梅つばき　左滿
うら付けで板の間を來る待遠さ　糸柳
あり〳〵はいゝがおつかけおん廻し　宿禰
三日ほどてら〳〵とする五月雨　同
なま醉ひのある評判記茶人持ち　雨譚
やすひでをめがけるけちな歌骨牌　洗路
玉のきず弘ぼふ大師見付け出し　玉章
前九年具足のいしやうはつとなり　同
垣間見に計り行くのに四つ手つき　雨譚
中かさと錢もつて出る一人もの　夢中

そりやァ草だァなァこんなのが嫁菜　由香
百人の内一人喰ふはつがつを　芹丈
文盲な孔子手くせがわるいなり　如雀
ばァ樣は未まめかとはむごくきゝ　丸水
かぢさまの御誂へと繪馬やいひ　巵言
むごらしいのり賣首が二つなり　串柿
夢ばかりなるかまくらに二三年　柳雨
らかん寺に儲かると言ふ佛なし　豐好
牛の御前でのろついて息子行き　玉章
おそはつた通りにをがむ手習子　横好
かうじもんを出ること仕丁なり　雨譚
雨宿り出やうとしてはよしにする　同
せうとう寺うれ口のよい紅葉也　糸柳
金屏風のそんりやう飲喰ひをする　夢中
のぶといつらで宮樣の跡に居る　柳雨
玉にきず藏宿を出て猪牙に乘り　若竹
文のするへ梅の折り枝一つかき　串柿
こいつ無心だなとぶ人相であひ　雨譚
ちんまりと座るとと女郎げびる也　如雀
こはいやくわりを六本杉でする　同

どれ程喰たかしなの腹がくッちい　國香
まだ夜をこめて馬のなくは品川　洗路
去りにもつたッた半年つゞら也　門柳
澤瀉とちやうせんせめは向合ひ　如雀
初がつをそばで茶わんをかき廻し　國香
つるはふるいと入道はいぬに金　雨譚
京都ではゐもん江戸では式部也　文集
はしごおりきると二階で雛をまけ　若竹
用がありや來やすと敷居やっとこし　丸水
嫁禮のいしやうかた付け雛を出し　左満
八樽くらつていなだをもくふ所　玉章
土みかど樣べい立てるゐなかびな　花口
鍋いかけ古いこまいもちつと持ち　そこう
なぜ一人とかまいないと下女が宿　串柿
きついふり晝寢も起きて畏まり　横好
こよみ見て後生を年に二度願ひ　糸柳
一廻り程猪牙からも見えるなり　柳雨
ふらそこはちびり〳〵と青く成り　一口
にしきでゝのむがそだよと袖を引き　五連
ねり供養には女房を參らせる　芹丈

母嫁へもの日に油斷さッしやるな　若竹
下げ錢でくどいたを下女憤り　門柳

申七月廿八日開き

角力句合吳陵軒木綿追善會

地名には有るが色には出來ぬとこ　和笛
かゞもんもきつとしたのは光る也　間々
二枚目の板も直成る奉行職　同
石山も一ヶ月ほどは紫衣寺也　和笛
長刀は愚か鑓をもねだり出し　交者
御取立て殿のさいくと見えぬ也　口喜
たうにも堂にも緣ある靈寺なり　五樂
奥樣を三味線ひきがざんをする　東里
木下川を猪牙のとほるは十二日　芹丈
地をんなの八朔なみだぐんだ貌　如雀
秋の夜のたらぬは月のほまれ也　交者
おもしろし明き手の方へ松が見え　如雀
女房はきたない夜具へ一人ねる　鳳頭
注連縄で首引きをする二見潟　横好
男どもらひ湯をたく兩大師　東里

ひッそりして御寺内のごみを掃き　雅交
吉原のうら門出るとしめられる　車道
よし原で聞けば赤子も愚痴な聲　來々
ぼた餅へはたの餘りをかけて來る　紀原
玉ににた物を抱いていざり泣き　狐聲
寺這入りしてもほまれな官女也　間々
楊枝で一度かみそりで恥かしき　同
松はかはらぬ色だのに緣が切れ　仙羽
蒲團を三つあたゝかなやつがやり　同
初せつく貫ふたんびに立て直し　糸柳
見合ふのを出合と言つて叱られる　姫小
仙樣は大じのきやくと三浦いひ　豐好
よし原で招く尾花はむづかしい　靜々
からかさの明き籠で丸挑灯をうり　和笛
月のわへ熊が谷坊を連れたまひ　紀原
見くびつておあし車を通り拔け　三丁
木むらあづかり大阪の冬角力　和笛
にぎやかに精進をする本願寺　車井
松が岡三年置けばようにに立ち　豐好
やらうの細見を吳服店へ下げ　龜玉

馬の耳にかせしうそうに春秋　如雀
女房と中や絶えなんしやうとうじ　芹丈
ほかの客をば人しらず高尾ふり　同
けちな二の足さいにも申聞かせ　姫小
北斗の星が嫁入りにさはるなり　如雀
かねにかこ付け庚申を嫁は聞き　同
骨の無いやうな男に下戸こまり　夢中
前九年後家にせぬのがみやげ也　姫小
飛だちゐを付たのはくわやうふ人　如雀
紀の國やいらい傾城賣れのこり　糸柳
物着星妾がぶんやにあらはれる　玉章
大手が二十四からめ手が二十三　中葉
こびりついて紂王に殺させる　可候
百年忌御寺がかへりさみを出し　和笛
舟はまだ駕に醉つたはげびた物　狸聲
白髭へかつ込んだのも八九人　中葉
よし原のひんかく月に影もなし　五扇
夕立にみめぐり牛のせをわける　花口
下駄笠につゞき材木きついこと　玉章
義を忘れたで直介にころされる　扇朝

しれ者也と引上げ見ればせむる　串柿
西村をはんとに出たと鍋いかけ　川口
馬から落ちて腰折れの名の高さ　玉章
石は生きたが死にめにはあはぬ也　雅情
馬の生醉をばくろう賣りつける　洗路
夕立ちのあすくわんおんの御縁日　蔦故
三度が三度親わんでつきや喰ひ　丸龍
三つ峯の犬にも負ぬたいこなり　洗路
五六百わたる〳〵と追ひたてる　蔦夫
喰ひつぶしやらう人別外に置き　姫小
目も鼻もなく横に寢るふてェやつ　玉章
いぶすより焚付けるのがにくい也　丸龍
ぶつかへりさうな門から妾逃げ　仙賀
四郎兵衞が關所破りは高がしれ　夢中
死にかねるふとんの下に二三兩　五扇
秋來にけりと傾城をおどろかし　姫小
ならはぬ經を覺えたで孟母こし　雅情
平家物語四五はい喰つて書き　如雀
ひやうし木で板の間を打つ面白さ　夢中
わうにんの亂山と川いぢり合ひ　芹丈

梅若の四十九日にかしはもち　如雀
煎じ懸つては引きずり茶をほうじ　姫小
長者の陣を張つているこんや町　芹丈
八會目當り白むくしよつて來る　仙賀
退屈さ川を越す夢ばかり見る　夢中
臺所へぬぐのは湯屋とこんい也　花口
ふたァりは精進物で淋しがり　車井
切手を見せて田樂を喰ひに行き　山路
わらひすごして鬼灯を嫁なくし　同
御こうでもないにどや〳〵參る也　一口
二階口またほうづきが鳴て來る　同
極樂のひやうとく和尚付けてくれ　車井
はかき吹きちる古市の三會目　同
嬉しので見合よめりをいそぐ也　玉章
車留かた身をひろく嫁あるき　同
何やつがしわざか娘かぶりふり　文集
おし送り日本と江戸の間へ來る　夢中
御れん名下ほねがらみ二三人　洗路
遊里のとらはれとなり母へ文
ずいきの白あへを女房ねだる也

和泉のつぼの其跡へるりのつぼ　文集
年玉そツくりとようろ〳〵よろかへる　同
候べく候の三味線を見世で彈き　かたる
大磯でやう〳〵馬を取りかへし　久鳥
はつがつを小半丁からげびた事　里山
どう工夫しても時計のわが餘り　同
六あみだ蛇迄出たり這入つたり　久鳥
わる口に耳なれてゐる後家の供　かたる
芥子みそ錢でかはれぬうちの事　同
あく筆のやたら流れる八日過ぎ　雨夕
出まして留主とは御念のいつた事　里山
田虫の咒咀には木をらりにする　雨夕
百さじき茶食の留主にせまくなり　かたる
らんちうと號し蛙ッ子をあづけ　雨夕
二分あると二分すてゝ來る病也　かたる
やがて死にますと姑女しれた事　久鳥
餅米を檢ぎやうむしやり〳〵かみ　同
嫁のかまくら手におへぬ事になり　里山
ぐそくびつ紙ひと包み紛れこみ　同
だアまつて針でつくまねうまい奴　同

右追善會

催主　かたる
補助　櫻木連中
言の葉のしげる手向や一めぐり　語涼軒

故人木綿門葉追善に記す

燒き筆の先づぶつ付けは玉津島　故人櫻木
たんゆふは天窓のうへに蟠まり　同井賀
瑠璃殿の御門にたえずさんど笠　同綠枝
植木屋の歳暮は明けて披露する　同豆龜
天王寺計りは額がごつちやごちや　同芦夕
正直のかうべは神に見立てられ　同たろく
本阿彌は鰯は見れどくぢら見ず　同巴江
右の七吟を思ひ出だせば、其面影にあふ心ちして只回向するのみ。　如せい

寛政元己酉はつの秋

第二十四編

功成名遂佛國へ身退れし新堀の先生、年々撰の萬句合より柳樽今年に至り二十四編に及ぬ。猶又此餘の秀句を後編として部分にて出し、好人の御求を希而已。

川柳追福三評句合入

西八月十一日開き　川柳評

座ぞうよりくどく世界を駈めぐり　狐聲
大阪は座頭にようの無いところ　笑艸
七去の外にもう一つまつがをか　如雀
舟ばたを鼓にうたふもみぢがり　笑艸
鶴龜をうつて女郎にかひあきる　和國
地女の年明きをまつまつが岡　口喜
風上にすわり關取り叱られる　中葉
上戸をつれて氣遣ひな花を見る　狐聲
田町にてえんやらやつとまめ本田　車道
あくびの中の川はゞが壹里なり　狐聲

忠臣は初手くすの木でのちはいし　狐聲
見物はまゝへうり人は正燈寺　祇樂
能星の下へのぼりをたてさせる　同
切れが有てもひんのいゝ屏風なり　芹丈
だまかした大蛇で女房角がはえ　一雅
いゝ男どぶから女房つれて來る　口喜
こも僧の出直して來る大さわぎ　和笛
四つ迄は世帶じみてる二十けん　一口
袴ごしあてたを女房くやしがり　狐聲
女さかしくて紅葉うりそこなひ　串柿
商賣にさゝはる地紙やのあばた　狐聲
大人（たいじん）は六郷むす子正とうじ　一口
葡萄をくひしまひ灰吹をすてる　狐聲

かり物とまんざら見える金屏風　中葉
大門を四みんのいッち下でうち　玉章
三分はな賣切れたよと下戸だまし　洗路
直がでけんじやとまねて行く鰹賣　中葉
中納言九條あたりにしるべなし　洗路
十ヲ計り留守居は年をかひかぶり　一口
海にたゝみを敷つめるいゝ日和　玉章
たけ長の針卷とんだげびたもの　狸聲
も一遍廻るかどうだにえきりやな　梅玉
福原の後わたづみへつれ申し　狐聲
看病に食傷をするまづいやつ　玉章
をとゝひのやうに又いふ染物や　中葉
腹をせにかへて山猫かへるなり　一口
忠義さは鋲打で行くぬけまゐり　洗路
越の傘かり吉原へいつてもて　夢中
鬚頰（ひげつら）であま酒をのむみともなさ　一口
しん川の手柄は水をあびせられ　喜常
百姓もどなるをきいて呆れてる　串柿
ふところは田樂切りと土手でいひ　米久
兄弟が居ぬとだるまも無一物　寸魚

めし人のえんでよしはら通ひ也　文集
ぶん〳〵と煙草は匂ひ錢はなし　中葉

八重垣組連會之終　催主　一口

萬歳ににがやせゝらやあざはなし
ふらすこもちよびり〳〵と青く也
八月の一つまなこに客はにく
かきつばた四字と六字の上に置き
むごいこと後家延紙で鼻をかみ
殿さまへあたゝをする〻る國家老
一子出家すれば鳶しらみぬけ
意地づくで女房鰹をなめもせず
正燈寺手をかざしては西を見る
あの晩にてれたと息子悔しがり
あま逆さまな事なれど緣を切り
そのほかは表だたずに高尾ぶり
にくい後家佛が口に付いて居る
すねた子のそばに母親呆れて居る
三味線がぱつたりやむとうさん也
かぶろが先へたばこ盆初會なり

座頭の坊松をさぐつて一分やり
賣物をかんがへて居る唐づくゑ
ぐつと押出してお針はすひ付ける
ふつていな物を島田は色にもち
花魁が名代きりゝしやんと寢る
重箱をもたせ餅屋でつもらせる
箸紙はこれも小判のはしで出來
大象をぞろ〳〵引いて馬喰町
一ッ角と一片土手で仲間われ
傾城も月のさはりはのがれ得ず
一けん參らうとばちを引つたくり
きらびやかなる長持を空で置き
そんなのも今來ませうと鰹うり
ぬすびとはせがれ同類女房なり
こも僧と乞食にゆだんせぬ男
どぶの坊程は花屋も生けるなり
杜若せつかくやればりんをうち
二つ三つぐらゐは妾塗りかくし
生きて居念佛講を取りたがり
歩行く度一二兩づつ下駄がへり

神々の御かへり濟みで幕が明き
大そうなものは女郎の他出なり
おいらだと離別ぞと歸る四つ手駕
次第に御淋しくもない男見え
くがいとは月雪花も入れるなり
燈籠のあしたまばゆき仲の町
主の手で御はし紙と書きなんし
手拭でつらをぬぐつて無心なり
百人のうちで明け方一人聞き
いつち日二國ばかりこいで居る
いづくのうらでもにくまれる男
どつさりと降ると初雪げびる也
かげ膳をすゑてる所へ武田寄せ
うしろの子前へ廻すがもり上手
けちな窓四角に壁をぬりのこし
きつい邪魔そどくの隣引たてる
木がらしの時分持佛は花ざかり
萬歳の跡で氣のないかまばらひ
嫁が出て發句をみんな歌にする
よの客がきつぱり切れて乳が出る

目をばち〳〵で誘ひ出す憎い事
茶一斤だけまゝ母は馳走する
云ひわけをしたが間男おちどなり
寺の門ばん役徳にしきみ賣り
凧の糸のびをしい〳〵賣つてやり
輕やきを買ひに他宗は通りぬけ
大阪で市のをとこををしいこと
尤なことらうがいをごせは病み
女房に負けるものかとたはけ者
ふとゝきな目黒秋出て冬かへり
す一分を持てそかいやこかァいや
蜜柑籠よりはむざんな四つ手駕
片々が他人でわびに手間がとれ
紅葉狩いまは遊女がたぶらかし
忠臣の家老いたつて身がおもし
止めてから出口の柳蛇のごとし
女にごうをはたかせる神事なり
小刀をもちづめにして栗を喰ひ
唐やうは一字はなすと讀めぬ也
僧は聞俗にはくへと釋迦をしへ

のうれんを醫者は扇ですくひ上げ
其角が無いとおたすけに出る所
お鼻毛をかぞへて居るが勤なり
切文はよひに歸つたあした書き
傾城のあいそづかしを舟でいひ
年の暮明けてくやしき嫁をとり
三會目呑みものんだり喰ひもくひ
東夷南蠻ほくてきへかり込まれ
來た當座下女吹殼を手へはたき
土俵からしろうとを呼ぶ急な事
御短氣引きごとにして又いびり
はなれ馬ふでとめたで功名し
北てきに女房は世をば狹められ
ほとゝぎすきいたは後德大寺也
しろうとの關取ばせを葉へのせる
さもさうずさもあらんのが賣殘り
後の月すんでにろうを破るとこ
口びるで嫁かんきんを濟ますなり
貧乏をかくさぬをとこ源左衞門
あな有りやなしやの身でも戀歌詠

あんちんは因果な所へかくされる
母おやは舞をまはせる雪のあさ
賴政は嫁の五器までひろひこみ
民のかまどを濕ほした御ほうらつ
二度目には月も親仁も凄く成り
三圍で氣のそれたのを付けのぼせ
い丶取組だがふしやうな天氣也
生醉をいつそけいはくして寢かし
をしいもの丶ふを冷素麪にする
賣いでもい丶とちう三ぬかすつら
うぬぼれをやめれば外に惚てなし
親分はざんねんながら杖をつき
不風雅な軍吉野でおつぱじめ
惡口はわつちがかぶと女房いひ
ほれて〳〵ほれぬいたは清玄
役がらで氣ばかりつよい奥家老
あたひ百兩一こくをぬかすなり
彼を呼ぶ氣だなと伯父が星をさし
德向きにかゝり大きな目に出合ひ
交り見世うかといゝのも揚られず

爪音は嫁ばつくんにひいでたり
しろうとの女郎代金五兩なり
三角は目出たい藥ぶくろなり
むしのえゝむりに娘に成つて出る
ふだらくの岸打浪を猪牙はしり
人相のい丶大どしま一分なり
つゞみより才藏口をたゝくなり
素人が餅屋に成るといそがしい
い丶日より作り損じた仁王出る
けちな客二ヶ月餘り寄りつかず
名のしたへ二歳の居るは食時分
身で無い物へ骨ばかりの傘をかし
面白やとうろう化して雪となり
正月もあかるく成ると嫁のれい
ひよく紋目黑邊からはやり出し
朝がへり御用を内へ見せにやり
嫁が出す水はりのけて目を塞ぎ
剪刀ともいはれずとんだめに出合
丁どよい刻限御幣出して居る
をしい哉息子女房にこびりつき

芝中の穴掘りどもをかりあつめ
からッ文計ぢやと見ちやひん捻り
五郎丸ふはりとぬいでしがみつき
いびきをかき〳〵遣手いゝ往生
月のかげ日向に成つて母くらう
切りおとし半疊かぶり雨やどり
たりひづみ金で直した嫁が來る
初會では隣の部屋へいつて喰ひ
重忠はあざむかれない男なり
石尊へ信心で行くかしたやつ
三河からきつゝ馴れにし門へ來る
十德の雪打ちはらひうちはらひ
明日も來たく成るもの木村よみ
三度目は張良からつぱらで行き
人立をはらッて赤子うちへ入れ
人がらをぐつと見下す大三十日
金の有る顏がけいせい上手なり
浦島はかくても書いた樣に成り
嫁に花もたすあばたの待女郎
塗りこめた曰く左官はしらぬ也

運のよさ土手へ來るまで男なり
御ふられ遊ばすげなよと奥でいひ
臨終をほめ〳〵藥禮受けをさめ
ぬえ時分まではわる氣のない男
數へ日に杓子當りがいゝをんな
出は出たが二條の后立ちのまゝ
それ言ぬ事か抱いてゝだアらだら
あまい酢でくはれぬやつは初鰹
吉田小僧が命日にむすこ行き
まだいきが有とたいこは附纏ひ
たうじつの祝儀八月すさまじい
子を捨てる藪へ息子は金をすて
人よせにぬりたつて居る旅の留守
女房に恥をかゝせるやまひなり
柿の木の下へ氣付をもつてかけ
主人相しらずめかけは色をもち
なんとちゑがとわるい智惠を出し
いんだうを忘れた樣に和尚いひ
松過のけんくわは暮の相手なり
三人になるはぢきさとしうと婆

それは氣の毒と道から醫者歸り
めでたくもましと看病あきはてる
梅はよんだが山吹ははぢをかき
新世帶しかしねざめがわるい也
時々貌をちよびと見るほれたやつ
七文字へらして客を追ひかける
二三俵のむとぬけてくはやり風
暗がりをこそり〳〵と下女が色
中秋のころおほどらを愚息うち
よし原も市の仕込みに文をかき
憐れむべしす一分にて雪にあひ
い丶男身の毛もよだつ文が來る
鍵ひねくつてけんぎやうにじり寄
中將棊おぼえて居るが相手なし
算盤を出して三度目止めにする
鬼子母神などを賣るのは安い奴
譽ことばそばにまじ〳〵敵やく
じやくめついらくから賑かな所
櫻へもやらぬと女房でかしだて
目潰しを後家百八をもつて居る

よし廣をさして貞盛おちをとり
奥中のよろこびめかけしつをかき
けちなみえ坊八つ山で駕に乘り
又初手の一分を出した太いやつ
生醉にげい子歸つたぶんにする
小間遣ひ二人揃へて三分なり
しうとめはねこだと仲人出損ひ
やぼな者角兵衞及びくわいらいし
居候いんぐわと子供きらひなり
魚店にかうまんらしい初がつを
たてつめて線香花火を畫とぼし
ごま鹽の毛うけへ溜る口をしさ
花の留守聟つ丶しんで相つとめ
首筋をおさへたやうに煙草きり
すごいことば丶アこよひの主也
我意趣を殿にいはせてしらん顔
皆見なくし拍子木でおんだされ
目に立つ疵はかまくらの權五郎
金屏風まだあそこだといふ道具
漆やは外のの丶字は書かぬなり

むりないけんは魂を入れかへろ
うけ出すといな父で候母で候
百とると首がないから川を留め
ま丶母の亭主はどれも少しぬけ
中の町なまけたやうに腰をかけ
わか死をしあてた人は小松どの
女人成佛四郎兵衞へいとまごひ
小便のならぬを賣るは小間物屋
うすにめす迄は火の中水のそこ
行平のうはさはたつた二人なり
さじの柄で妾をのける御大病
引け四つがなるに傾城ほれ殘り
一分宛おれに渡せとこりたやつ
傘でこも追かけて行くごくこん意
たうなすの天井をする下戸の内
もりあてた醫者は程なく痛入り
錢は通用せぬやうな中のちやう
仁王樣なりに似合はぬおぐしなり
手ばなしで川なかへ出すい丶娘
いも見ざるまに茶代共置いてにげ

關守は二度夜が明けて大さわぎ
土用干みすぼらしいが嫁のよさ
味噌こしてからは岡場の袖の梅
またぐらへ秤をはさみ糸をまき
關東べいをなぶらんと公卿出る
百人一首天神さまに氣はつかず
どつかどう戸棚へしやがむ一大事
吉原でいつち高いはば丶アなり
客をとらまへるときには一文字
殿樣をおなかへ入れてねだるなり
判取へおもたく渡す恥かしさ
有ッたけ着たとは見えぬ仲の町
新らしい出ばを息子はかんがへる
仲人を眞向きに成つて遊ばされ
船に乘る時分正味の高尾なり
朝喧嘩となりの芝居まで邪魔し
酒呑みのきうあくの出る土用干
あの後家は堅い奴ちやと色がふれ
評議まち〳〵さらはれた娘なり
吉野丸どたり〳〵と堀へつき

筆まめな得意にこまるかし本屋
なさけなき一言嫁はふだんきゝ
天蓋のやうなを和尚ねだられる
馬士の新米どぶへたれて居る
行燈へ針はよしやれと和尚いひ
市二日突出しの出るやうじ見世
息子の手屆くところに金はなし
神道とじゆだうの米は雪とすみ
大黑屋市兵衞ゆだんせぬをとこ
圍れの母ねんごろに回向され
亂れ矢の中を白齒があつちこち
なかぬやつめは娑婆中に借だらけ
腕おしの地どりのやうな疊さし
にはか雨箸も持たない乞食なり
妻戸見て殘つたざくろ喰人なし
滿足に產むと親子でをどるなり
たゞの名の女しんざうこはいなり
内に寐た夜を女房にかぞへられ
駿河町食を三石一斗たき
かぶらずに來る女房は小附食ひ

そら色は禿の目にもあをく見え
きつい事男にせずにつれて出る
富士のゆめ丸綿めすと乳母判じ
玉虫はあぶない役をいひつかり
がた〳〵とするとさんまを燒て置
かつ込みそしやう計有るまつが岡
雨だれは首を仕廻つて通りぬけ
とゞめをば餘人にさせるさじ加減
眞向にかざし木具屋はへいで居る
三河から暮のきげんを來て直し
やんごとの有るつら計賣れ殘り
一箱を息子だん〳〵輕くする
いんぎんにいつて尺八ほどこさず
なまぐさくないを酒屋は結び付け
大風のあとに萬歲かしこまり
嬉しさうに抱へて女房質屋出る
わびことに衣の見えるむづかしさ
切るの突くのとおどかして五兩取
きついこと病後のなりが道具也
傾城のうでに俗名きりつける

一日は蛇のみちになり衣紋坂
あみだへまゐる娘錢ほどひかり
御免駕さゝいな用もいためつけ
出格子が立派に出來て山師めき
皿へ手を當てゝ時宜する暑氣見舞
ひとつの利劍拔き持つて神樂堂
木に餅のなる程目黑にてすゝめ
綱わたりすると高尾も玉のこし
御屋敷があると添乳をゆり起し
牛ざきを外科療治する氣の毒さ
四人を息子いかして遣ふなり
代脈の因果とけふは不出來なり
草市へ目やにだらけな顏で來る
妾が兄事をかしくも鞭をさし
獻立へ又ふりかへりこけをふき
娘の貌見せもあたりはづれなら
才藏は草履けんくわの中を出る
引け過の初會なまいき過ぎた奴
片桐が爲にはちや〳〵の局なり
いつちい〻くせの生醉詩を作り

さあばア樣御出だとたいこのき
大御無沙汰とえ樽のあとへ來る
肩でかせは切るが刀ではいかず
わづうかなぞり〳〵をする恥しさ
腹ばかりかしてりや妾い〻女
行ものだをいやすけんうさアねえ
くらへそばへてみかどさん〳〵
品川のげびにはつらがしやくんぐる
鰐口へずつともつてく十五日
淺めらがふざきアがると遣手いひ
どらのかさ秋はどつどと上るなり
ふさつて〻をねばを取てくんな也
不屆さ晝寐のかほへ論語當て
なんの因果に大名に請け出され
しづうかなとこで仲條時行なり
美しい顏をふくらし船に乘り
金持を見くびつて行く鰹賣り
旅籠屋はちつと〻いへばちつと成
うす雲は當世高尾は古風なり
一聲でわれも〳〵と貌を出し

す一分は用むきの無い中の町
横しまな美食などする樽ひろひ
休めもうよしといはれて強くもみ
腸を入れかへにするさかな賣り
かげまなど居さうな所いろは茶屋
九十九人は親のはらからうまれ
ひんの盗みは大黒に目はかけず
朝歸りだん〳〵母へ火がまはり
時過ぎ時きたりよう〳〵と來る
ふみけして禮いつて出る雨宿り
傾城をつまらなくしたい丶男
つれをはぶくはこんきうな女郎買
きついせき乘物町へよめまがり
ゑぼし大紋でさんまを二つ買ひ
御后を芥の中でさがし出し
何となくにくいはよし原のば丶ア
元服の仕着せ松坂こえたなり
はうさうでびいどろが本當に成り
たれどこが有る迄ころり〳〵也
はしり大黒を和尚はくやしがり

ゑちぜんは一生をさな顔うせず
こはい事こたつで餅をつく氣也
脊中には滅多にするゑぬひとり者
す一分は吟味しぬいた金を出し
我が内の入牢馬鹿げたやうに見え
情がこはいと捨てらる丶正燈寺
欲の世のなか持參に先ンがあり
ざうにと素麺二百が物は喰ひ
のし餅を着物のおしにい丶仕廻
猩々でからがうたいで呑み惡い
我舟へ船頭留守をさせらる丶
大そうなうろくづを取る熊野浦
音のせぬどらを此ごろ和尚うち
大江山出見世の亭主ふりよのけが
しりで穴上手に明けて人を入れ
さんげ〳〵借金でまゐりました
なさるとも言ず御手がつきました
引けるのにこくら〳〵と店ざらし
どうしなんしたとほたて貝へいれ
小木の花見いたつておもしろい

おれは〳〵と計りむこ花の山
あ丶しはくするのも伊勢屋虫の業
まだ御呼出しはないかと藥とり
膳立を崩して椀屋まけぬなり
大丈ぶおめかけ腹にあくまなし
大不了簡えて吉をむすこ入れ
女の道のくたびれはしりに出る
大あばたこんどもくなし三十四
御夜詰が長いとすけん毒をいひ
藏がへを追詰めて行く小間物屋
藪醫者のかげで念佛講を取り
息子の耳は馬つらはかはづなり
ひだるいにまづい物なし破れ傘
素人にや横ざけのするうなぎ也
とぢ蓋を見付て下女は隙をとり
御しんぞの出嫌ひ實は是がなし
坐禪くわんぽうの地に紅葉はいかに
船をしぞおもふ吉野の御延引
藤を見ながらにわづかな渡海也
ささらぎは寢て卯月には立て居る

願ひ事有つて四つ手はしづか也
親父よりまづ見限るはたいこなり
しんざうが叱ると禿眞似をする
門禮はよこさぬ奴をねめて行く
お袋がつッかつて置くなみのどら
後生をやめて燒餅にか丶つてる
定紋であたりをかこふ能い花見
江戸へ出てゑぼしを暫しかりにきる
三度笠あれだ〳〵とゆりおこし
傾城もあたりはづれの秋が有り
爪音はかんじばち音うかされる
後家のうち男のこゑで鰒をよび
轉び出し糸屋は古いかけもとり
呉服物釣をしながら賣るもあり
ぜんぴやうは艾のからが涅槃經
あみだを賣て新造を買ひに行き
てん〳〵に遊ぶ穴ほる急がしさ
ろうへ貌出して持參を母す丶め
美しい嫁から財布持つて居る
三年過ぎてあま店へ縁につき

大黒は盗んでばちにならぬもの　玉章
大口に八文が賣るなづなかご　芳蝶
極無理なだめさしに來る切落し　麥雨
初鰹玄關をふまぬざんねんさ　洗路
けちな奴九月の十五夜にうせる　窓梅
大師から觀音まではうそばなし　柳雨
惡くふりますとぶらりと角力取　花雪
せいろくが度々に及んで底がぬけ　紀原
中の町立ちはだかつて年始なり　鐵炮
月々に替はる上野の札のつじ　豐好
え丶しまひそれつりよこせ〳〵　文集
きたアないなりでお齒黑賣りに來る　芹丈
何といふ氣だか細見おやぢ見る　紀鳥
先の亭主がよつて來て恥をかき　狐聲
嘘を書き盡したおくに月のこと　文集
のちの四つ成程けちなつらだはえ　未學
貴公をまつこと久しと二十軒　龜遊
仕立屋にけだ物の有る祭まへ　夢中
春三夏六にむすめひなを出し　枡水
ちゞれ髪げびた所へほめられる

吉原ではじめて一のふりてなり　文集
首二つうけ取つて生醉ひはたち　洗車
油壺ぐれんねた刀をあはせてる　門柳
中ぬきの中に駒下駄ころんでる
寢たふりのしぞんどこのか上草履
迷ふまい物かひつしと竝んでる
高なはまでは釋尊の御弟子なり
大黑は五かいの内のひとりなり
小判のはしと中をちをあるき煮る
納豆へちりにくはしき所化が付き
假りに女とあらはれて飯をたき
欲のかは張さけさうなば丶ア出る
盗人の目に花のさく土用ぼし
ばいやつて梯子をあがる大一座
むすめが付でもらひてなし百兩
もし旦那々々と四つ手かッちかち
母門で大腹立て丶ござるぞよ
德を取るより名を取つたは高尾
舞うて見せるによこしなと天乙女
もの着ぼし客災にあはんとす

巾着と遣り手一所に口を明き　文集
瀨戸物やぶく〳〵として改める　洗車
つぼねの年明き甥や姪にかゝり　門柳
十一番目ゑぼし首すでのこと
くれの文口やくそくをはたるなり
若女形實惡を妾つとめ
鼻から烟を出しながらふいて出し
殺したもよこせば藪醫よい仕事
花でつき合て置いたとそ引出し
一本の木立ち屋敷の名をひろめ
長つぼね腹に溜らぬものを喰ひ
新五道うはつく筈さきでござり
歌がるた人の丁場をよめあらし
つな樣といふ文高尾かゝぬなり
やらうの天狗子供にとりまかれ
ひすべし〳〵と源三位に御意

八月二日大雪としちやいひ
寢すごして嫁梅ぼしを貌へあて
薄氷をみちり〳〵と伽羅でふみ

松風を有髪のあまで三年きゝ
ふせがねに蓋をして置く談義僧
看病をねめ〳〵しめる糸さなだ
泥坊さたがうんざりと平井いひ
やきもち坂であま寺の道を聞き
なぜ敎へないよとしめし籠を出し
御夜づめに梶原が出て大さわぎ
にくらしいものは女の紺のたび
生れたとつれるさ中へよびに來る
出來たての貌でおひるを嫁はくひ
大あたり口上くびをふるばかり
むごいやつじやの骨をかす俄雨
またもとの鞘へ納めるばか亭主
唯貰ふば丶ァを遣手とはいかに
人にほれべきをべら棒うぬにほれ
たかを括り過てきられなんしたよ
いらぬ事持參ふたッつ三つかくし
なま松葉あさつばらからしうと焚
くすぐつたがらぬ子を持ばか亭主
けふは引わけ見ずとてもしれた事

船頭をまたせとうろうの油むし　頭照
その樣に誰にされたと下女が宿　紀鳥
あつけない遊びねにふし寅におき　川長
廣こうじ武鑑を見るのにぎやかさ　芹丈
大海で土ほじりするうらゝかさ　和國
借金の穴へむすめをうめるなり　文集
京町へいつてもはりは强いなり　未學
つらいこと一年おきに嫁ふくれ　和國
百人のあたまの上にしつけかた　同
むごい事息子のそばにからす猫　同
ぬかるみへふんごんである安火鉢　同
新造のあげづめむしろ破つてる　車道
石町へ内裏をうつすにぎやかさ　丸水
ひなしかしうせたで鮪買ひはぐり　同
いやはやきの毒がき大將ふられ　青峨
もてねえでどうする物かやぐ承知　芳蝶
くろちりにひとはりぬきの虱なり　雨譚
内のものとは合口とたはけもの　歸朝
はづかしさ尻ッぺた中痣だらけ　青峨
腹のへる藝に息子はあきがくる　狹衣

三會目金のへる木を持つて出る　狹衣

葉十評

笠と下駄おッつかッつの御大祿　丸龍
一曜が六まんごくの御高なり　芳蝶
雲のうへだから御門も月日なり　川長
ふじ山がなければはつち坊主也　鐵炮
人げんのたけりらうがいに妙藥　五連
ふきかゝるやね屋柳を結び上げ　寸魚
まゝッ子にあてがつて置く啞の蟬　龜遊
甲斐の國まで白むくの裾を出し　川長
見手がおほいで三月が嫁くらふ　青露
小兵でも坂東一のぼさつなり　如雀
時鳥月をかすつてないて行き　紀原
をしげなく嫁のまくばる形見分　五連
根强いといゝさうな國甲斐駿河　姫小
中入後源氏ぐるまに高尾山　川長
日にやけたごよう伊勢物語する　洗路
三年立つてから嫁もじまへ也　雨譚
御先まッ白と四つ手で息子かけ　露舟
綻びを笑ふは内儀ぬふ氣なり　芳蝶

初雪や一人ころびと女房よみ　和國
氣のはれた佛事三月十五日　屋紅
女郎はつけ廻し客はつけのぼせ　鐵炮
稻妻は雲をゑぐつてどつか行き　鐵炮
傘と下駄及びかつぱもかりてくる　川長
氣にはかけられなとかける事を云ひ　丸水
ゑかうゑん涅槃に猫もみえる也　芳蝶
藁でたばねた嫁の居るいゝ天氣　聞之
とむらいからやみ付き息子通ひ　丸水
百の字があるでしまひの御歌也　鐵炮
かくれんぼ嫁のするのは大騷ぎ　川長
升わなをひるまかけとく中の町　狹衣
亡者の聲色をきくには水をむけ　五連
星入りの女房を息子持つ氣なり　青峨
四郎兵衞が昔居た所かなものや　玉章
百兩で綿に包んだいもが來る　石斧
なんだをぬぐひよくきいた〳〵　夢中
大きなどらは春の笠秋の下駄　如雀
しもばかで下る三日のかみがかり　枡水
錢はうへのでかね持は芝にあり　芹丈
勘助ををんなにしたを暮によび　鳩古
はらひ扇子箱見たをはじめ也　丸水
氣のぬけた物は晝間の四つ手也　未學
女房にかみなり門で出ッくはし　丸水
まはり燈籠はおいらだと素見物　狸聲
女竹から男竹へ移るいそがしさ　露舟
今戸では人間おにをかまへ入れ　川長
浮草よりも質草はよくながれ　百喜
宿はづれ猿の背中ですひつける　夢中
和笛評　川長

詩では觀音碁を出せば文殊なり　和國
右左り水と艸とで名がたかし　洗路
九體揃ふと一トやしき魚鳥留め　門柳
ひッかりと鳥かげのさす雪の下　窓梅
めのさめた人が名歌を丸くする　雨譚
さてよくしやべる獵師めだと樂天　潮水
井戸ばたの櫻でお秋名が高し　箕山
御法から花ちる里で大一座　雨譚
御納戸金がよし原へ三度落ち　丸龍
極樂の道のりほどの句もゑらみ

本庄のそば後に芝のかゆを喰ひ　雨譚
疵ものにひどい直段を其角付け　石斧
名月の御たづねものは美くしい　如雀
じたらくにとや〳〵にげる都落　歸潮
からかさの内で庄屋は拜見し　百菊
大白月をつらぬいて二度おごり　雨譚
島原は名歌のぱつとしれるとこ　和國
三會目とんとおやまの如くなり　文集
帆柱の木やりを殿ははがゆがり　窓梅
蚊に食れ〳〵ほたるで呼んで居る　歸潮
目出たいと先づ金屏風から仕舞ひ　口喜
二條通りを白ちやうの追人かけ　石斧
くわん東で下女上方ではけいせい　一口
氣の毒さぶさた見廻ひに雨がふり　麥雨
琴と三味せん過不及の病出來　芹丈
中の町扇子つかひていもの禮　清江
箱入の玉川ほかの國になし　窓梅
七十九をとこで二十一をんな　川長
月のはしりを品川で和尚見る　露舟
じやと蚊の出るのは駒込の六月　春魚

猫に追れたで莊子はうなされる　如雀
うでのあるうちに櫻の歌を書き　末學
ねずの番がてら美濃では物語り　玉章
狼にころも重忠見あらはし　丸龍
ぬるい茶のやうにはいかぬ關が原　雨譚
かはごろもより類のないから衣　川長
千早ぶるかゝさんやぼめ〳〵也　口喜
陸奥で名をあげて駿河で名を留め　同
當意卽妙は木母寺の山號　麥雨
品の月かくれん坊はけちなやつ　柳雨
松のきどくをあらはして一分〆　川長
つゝついて來たを引れて禮參り　雨譚
こけゝらでもてたと咄す川の中　頭照
おやの名の次第に似合ふ三回忌　豐好
一升でいくらだといふけちな桃　龜遊
狼へ犬のついてる御てん山　雁古
縞の財布へ三味線をごせ仕廻ひ　潮水
いやな下女淺間額に作るなり　門柳

追善　玉柳

年ごろ川柳の翁俳諧にふけりて、としゞ〳〵萬句合の批判に及ぶ、その聲謂つべし獅々吼に等しと。しかるをこぞの季秋、獅々吼聲ををさめて世を辭す。今年季秋諸連會して、かの翁の追福のために、二もゝちあまりの言の葉をあつむ。されど獅々吼歿してふたゝび判の詞をくはふる人なし。諸連ふるきをおもふあまりに、翁の舊知三人をあげてやうやく批判に及ぶになん。嗚呼三人よるといへども文殊の智惠の借用も出來ず、普賢ぼさつの乘給へる象をめくらのさぐるにひとし。さりとて捨置んもほいなく、諸連獅々吼の餘波をしたひて、終に梓にいのちながうす、名づけて玉柳といふ。ころは寛政辛亥年九月廿二日菅江序す。

菅江葉十　評

柳にも雪をれのあるをしいこと　石斧
むごい事役てうちんで乳を貰ひ　玉章

和笛葉十　評

蟬丸に似た人をよぶ大法事　如雀
やれたつな〳〵で武藏珠數をすり　芳蝶
玉たぼこ見せるたんびに搖ぐ也　串柿

菅江和笛　評

御駕からわんといはれる茅花賣　露舟
新造を平氣で遣ふかゞみとぎ　五鳥

菅江評

萩はうり物買ひものは女郎花　如雀
皆ばゝァづれ五六人あみだがさ　柳雨
本郷を梅やしきにておつぷさぎ　夢中
お妾の手がら門外からも見え　百喜
ねこも杓子も吉原の邪魔をする　豐好

菅江葉十評

名はちひさいが氣の廣い國家老　龜遊

寛政三辛亥九月

催主　芹丈
同　丸水
補助　文集

第二十五編

年々歳々華相似たり。盡せぬ水の言の葉に、柳の老木枯果てゝ此道既絶なんと。時に笛先生なるもの川叟の俳風を慕ひ、是絶たるを繼ぎ廢れたるを起す聖教に叶ひ、翁の撰評にひとし。社中誠に闇夜に往て燈に逢へるが如く、歡喜の美諷美と耳にみてり。予進で家名喜多留二十五編とはなしぬ。

寛政六のとし秋　　市中庵主述

御具足へ枝をならさぬ風を入れ　門柳
春雨の御歌あづまの御みやげ　玉章
四たび目の勅使は禮に行くの也　文集
秋の田へ白い手の出るお慰さみ　麥仕
ありがたく出る御白洲は親子連　五連
千金の夜なべはお膝もとで出來　龜遊
下駄の上にたゝん事かたきは笠　雨譚
六十帖も紙の入るものがたり　三亥
きれ〴〵によむ面白い歌まくら　窓梅
僧正になつてかれ木に花がさき　一山

奥樣に十ヲ若いので御意に入り　東李
二ァ人に足跡ひとりあくた川　丸水
奥の客一かははねてかしこまり　丸龍
一日のひなへは桃の實をあげる　狐聲
短尺でする色ごとの品のよさ　豐好
かさをかす家の稲荷で雨がふり　ごまめ
六月のついたち雪と炭が出る　紀原
上方の祭りをんなのぼくを出し　龜鳥
おほいちざ正風體がもてるなり　芹丈
免許まで持てゝ嫁はねかしもの　かてう

咲と手のたらぬ太右衛門が中十日　三朝
鹽竈のけふりたえ〴〵十二年　芳蝶
花ざかり伊兵衛も一首詠で寢る　歌遊
くつを冠にくらうどは口ごたへ　如雀
一生にめでたき内をはき出され　三丁
この水を呑むなといふが玉に疵　連鳥
東帶のらうにん二月下旬出る　湖水
是は〳〵と母の待つおそざくら　和國
しッぽりと和尚の悔みなれた物　孤雲
てきはきとした雨の降る暑い事　千鶴
二百十文がかさをふきをられ　美德
門の立つまでは風來人で居る　狸聲
二夫婦の内だん〳〵に夜が明る　吉川
あつちから喰付きさうな松魚也　長故
ぬす人は虎と熊とで名が高し　香貞
見世をはらせるはばら〳〵扇也　五鳥
猪の逸太樣の御長屋山師聞き　文子
白粉で富士を作つて馬鹿を待ち　紀樂
蝶々がとまりなむ三ぼうにする　浦舟
丸山で口舌こはせがおつぱづれ　珍鳥

折紙がむすめへ付くと疵になり　子誠
酒たけなはに及ぶ頃ばゝァ出る　麥雨
大持參でつち其夜にうなされる　五鼠
大どぶをこす玉とりは男なり　口喜
看病によく來たッけが解せやした　芋洗
樫の棒見ると痛氣がはつて出る　紀鳥
油繪の障子を明けてどくをいひ　一馬
竈はらひじだんだをふむ油松　喜水
むくじれる朝顏に衞士火をしめし　湖舟
あいさびへ眞赤すくがきついみそ　儘成
歌も句もはの字止りは古てには　高麗
さくらの毛せん桃に出しておき　石斧
氣のきかぬ人と山吹おいてにげ　曉子
遊び所をあんじてる病み上り　邑市
本性でかへるはげびた花の山　詠歸
だらうといふに嫁いゝえ〳〵　柳雨
其外の月はねうちのしてがなし　扇朝
はだか王らしく花魁(おいらん)うれのこり　秀印
叱られる度にむす子の年がしれ　麴志
名のたかい子供德利や瓶をわり　若竹

小賣をば致しませぬとさして居る　百菊
川留にこりて寢覺のそばもくひ　川鳥
ずぶ六の客へ鍬鎌素湯で出し　桂里
江戸の馬田舍芝居でつがもねえ　東鳥
ひッかいたのが名代の申わけ　東湖
どたばたを見れば鰹と猫と下女　龜水
さばけた叔父き勞疲をかたづけろ　不醉
宿下り道をきくうち葉をちぎり　周栗
でェぶ降すと素一分が困つて居　漏安
小町の手がら洛中へかけこまれ　鳳頭
淺黄羽二重を振つたで名が高し　丸蔦
折鶴にふいとふくれる嫁のかほ　姫小
四月上旬に小判をみそでくひ　里鳥
黑猫と小判をむす子ながめてる　未學
ついぢまで筋めたつとき大地也　花丈
おめかけの十九家老は國をたち　今紀原
はい軍の螢あふぎのうへを飛び　兎舟
西行も野郎のときはきたをむき　康丸
いなびかりまでは玄德箸を持ち　宣川
あふぎ屋のかなめ東江流を書き　左笠

花の雨寐ずにぬつたを悔しがり　圓之
大風を吹かせに娘やどへ來る　東里
さくらより娘あぶない年によみ　渡柳
醉たふりでもいけぬもの大晦日　玉如
豐といふ姓を貰ふとひとりまへ　綺席
和尚化して本田となるいすゞ川　顏六
唐からの直段で品がげびるなり　澤志
龜の子へ肝をつぶして嘘をつき　角香
あはァれな音で朝づけ隱居くひ　霞朝
蓮の葉の上へ書出し置いて行き　鬼郷
禿にもたせ居風呂でよんで居る　柏之
虎髭のぶつたくりめと長半場　守靜
鬧しくきれ〴〵によむ下女が文　三柳
あれさもうおよしと油手で敲き　聽山
大門のとびらかた〳〵五百兩　箕山
名はたいを顯はして居る吳服店　春魚
禿にも最中の月をねだられる　莞爾
大學にたらひの印までも書き　和泰
吉原の袖はおこわぢや留られず　雅情
しゝたけは下女牡丹から出來るかえ　散木

ありがたや太郎冠者共傘を持ち

うッかりとおはなしのやむ時鳥

おめでたさ鑓も長柄もとび上り

桃の花かんむりへちるのどやかさ

御たいくつ晝夜寢耳に水の音

奥樣のおしやく妾のときやく也

花の翌日御居間を毛虫一つはひ

われた田へ寶の水をぶちまける

惜いこと袖とひたひに及物なり

けづりかけ程はのこして立歸り

羽ものか毛ものか覺束なくとよみ

琴箱よりは椀箱が御意に入り

待宵の晝までたゞの侍從なり

麥へふんごんで茶びんを駈拔る

霜月のけはひ十月かみをゆひ

太上天皇ばァ樣のゆづりもの

十兩に目のないやつが點を打ち

春や昔のとてうしから文通

百員のぬけがらを持ち三をかひ

色直し緋絽を着て來る面白さ

そうこうへ首尾よくまたぎ嫁河原

いかして金を遣ふのは時花醫者

もつと此方へよせといて月の事

年たち歸りうつとしい嫁を見る

初松魚直をきいてかふ物でなし

暑い事かさねだんすで蟬が鳴き

數ならぬ身ではくへないはつ鰹

口上を庵室の戸にはつておき

手も足も出してこは〳〵禮に來る

おんみつを出し仲人へ返事する

もう六度降うと下戸は精を出し

越後屋のゑびすやきもの源五郎

黑羽二重でかくれるとしれぬ所

若い時の遊げい役に立つた子房

色紙の序さうめん買ひにやり

なぜでもの娘かならずとなり有

めつからぬ樣に生醉おくられる

くんひんな文字で反物の書付け

又貝を捨てゝ行つたと茶屋笑ひ

家のまん中にやどふだ芝屋出し

義貞をむすめ祐成嫁で見る

伊勢屋の花見どこまでも花見也

うんのいゝ嫁ぼた餅へ袖をかけ

にはとりを一つ賴むと關でいひ

下女がおもてもを白々と花の朝

氣あがりがしたと煮〆の屑でくひ

とんだ雨だと瓦師は大さわぎ

あゝらあやしや細見を親仁見る

びっしよりくさりじねんじよう〳〵

ぼた餅を喰つたで首が廻るなり

今夜出た雲があしたはぬたになり

江戸中に甥をくつてゝ飴をうり

大いせ屋古せを二本百に付け

道具の大きいを比べるあやつり

身輕に出たちごみが致しませう

近くの他人湯をわかし腰をだき

旅の留守まよけに里の母をよび

化けさうな傘をしぶ〳〵いせやかし

大阪の金逆桐が一分出來

辻番でしめを引つぱるいゝ天氣

油うりあとで水ばなほどまける

見物左衞門が豪氣に邪魔がられ

五十茶をやつべしほめる雨宿り

にんじんのはいるは安い鱠なり

潰れねえ密柑持つてる五軒の子

門口にらんぐひの有る宿紺屋

酒店でほり物をするらんがしさ

茶をきつし尻をつねる代百銅

親椀をたがへすやうに信濃くひ

なぜ小豆飯だと兄は聞きたがり

ちんきやくに女房御用の耳に口

ころんだ子泣出すで猶はやる也

こはれ大へんと素一分雪へたれ

燒餅を下女は小さく路次でやき

二十八からふんどしが白くなり

江口の遊女持りやうのちゞれ髮

繁じやうな土地箱入の水を呑み

こばんの上へまつすぐに雨は降り

七月六日黃白の鯖が出る

目出度さは月諸共にお使者出る
在五の机に扇だのふくさだの
お妾のしやうぶ刀は切れるなり
南北に新都の出來るもゝの春
よしのから兵庫へ仲人指をさし
行燈へうつさせて嫁つめを出し
しるよしへ借にいにけり金屏風
嫁の酌ちつとゝいへばちつとつぎ
かんざしをしるしに貰ひ物凄し
あんまり沙汰があり過て嫁困り
嫁のうすいもかけに勝つ十三日
笹の葉へ折々からむみだれ髪
せはしなき寐耳に餅の音をきゝ
ざうげ一本に舟のよるきつい事
髭を惜んでおひはぎに一首よみ
ほたる飛ぶ下にあはれな扇なり
さア御覽なさいとゐざり玉を出し
夏のひきうすに王ほう訛される
箱根から見れば大きにくぼい所
人がらな四つたり一座大ぐらひ

おやぢのは猿息子のは猫にあひ
つじ番をたらふくにする妾が兄
奥行と間口の知れるむす子の代
私儀かつてに付きと三代目
いたいこと帶とはかまで十二兩
せふばつは指と髪とでわかる也
虫の付かぬ内と桐の木をひかせ
藪針醫あだかも蜂のさすごとし
わつちのは蟹ぼたんさとはやる奴
花物をいはずけいせい落手する
來る人に嫁うぐひすやひわであひ
哀れさは土手に火鉢の遣ひすて
大あせでぢさん古着屋ほどたゝみ
蒟蒻も鴨に入れゝばひんがよし
秋葉はれうるこんぴらは見る計り
花嫁をしちやのかくでふんで見る
傾城はそらごと女房小言なり
吉原へそば喰ひに行くきつい事
わらじの儘で川留めの咄しなり
百さじきかと見れば隣の役者

いつきかしづかれて柳橋はもて
近松ばかりは作者の一本木
蝶々と千鳥を鶴が引きあはせ
たゞ事と見えぬ樂屋の大さわぎ
素見うつかりひよんとなる代三分
合紙にからかさ落手いたし候
蛇のみやげ女房も赤い舌を出し
あばたでも同直段ゆゑうれ殘り
萬卒は得やすくかへ玉を出し
とんだやつ李下へ袋を持參する
八十九日にきすをもう釣に出る
まぎれ扇をつかつてる玄關番
天文をかんがみ女房夜着をとき
神樂堂袴がないとまだはやり
跳足になつて立むかふ下手の鞠
素人の普請眞木わりなどが出る
神はかへらせたまひけり三番叟
八百五町常體の晦日なり
しつけそをぬいて禿はどうづかれ
あふれ盃つんぼうへころんでく

うなぎ屋を止めた咄しの恐しさ
古椀をうつてあんころ餅にする
蒟蒻やを構はれつちこねになる
田の畔の時分はけちなほこら也
大だはけ茶店で腹をわるくする
女房の留主に出て居る火打箱
目を口にしてよび出すの面白さ
芳ごのとうになつたのを後家は買ひ
村の色おじやるべえかと筵さん
闇はあやなし持參嫁はらむなり
九郎介へ白いゆもじで願ほどき
すたる物なし仲條へごせがとれ
わり海老にたこ婚禮にいゝ肴
おもだたぬ枕言葉はお手が付き
干すは夏ぬれるは秋の御製なり
象の出た翌日まんじうの御拜領
どこか風ふく樣で無い名歌なり
大名のつぼんでとほる花の山
本降になり御不斷に御召かへ
御立身さゐん場こつばだらけ也

今朝の花見が濡やうといらぬせは
供奉の官人松の木のわきでぬれ
羽二重のはらを木綿で六月すれ
わか死の鶴上下でれうるなり
あついはず花嫁小袖まくを打ち
仲國が行く道すがらさわぐ音
はじめの姿ひきかへて禮參り
色事の願辨天へ座頭かけ
大層な庭籠さくらを植ゑて置き
お高い御用を女郎にたのまれる
外の木にとまる鶯げびるなり
見しや夫れとも分かぬ間に嫁隱れ
德の有る本道は苗字がしれず
とくほんの藥禮まるい一分なり
母親は子ゆゑの月夜にもまよひ
京都でも不沙汰の門は横にふり
野がけ道すくもへ銀の首を入れ
席正しからずとまでのやす見合
其時分ぐにや雲といふ太夫出來
おもしろい雪見は扇づかひなり

神木の寐鳥のさわぐおそろしさ
ひとり娘だとかへつて犬が言ひ
杏はやつてきなさッつろと邪すゐ
うぶきたひすゞめを二枚程疊み
大根が出たで盜人かぶじまひ
雛の膳米屋のとなりさてこまり
歌がるたかいて取つてはしらす也
とんだ花火をうれしがる恐しさ
勘右衞門芦をからして駕をたて
すまんまをたべさせ候と里へ文
藪いもの見舞張子の虎をやり
尋ねわびいふくもぼろんじと變り
軍に負けてめがねをば鼻へかけ
村ぶげん娘が逃げて芝居じやみ
つれ〴〵はいゝが參らせ候が疵
發句の人論ふぐの酒もつて來る
けいせい及び百姓もくろふなり
羽團扇であふぎ馬樣きついもの
君命をそむいて奥でほめられる
扱が濟んでひなたへ二ヶ人出る

二階の窓にやごとなき盜みもの
ちやうちん屋安い女郎はしらぬ也
せん餅屋計照り降りなしに賣れ
ねだられて戸棚へはいる大阪や
彌左衞門からゑんをきる提灯屋
よく茶にも醉はぬ物だと持遊びや
咄し聞きたさに築地の餅がうれ
遲松魚短き足で伊勢屋買ひ
酢ださうだ進せ申せと女房おき
雪見とは馬鹿々々しいと信濃いひ
吸付け乍あい谷中でござります
ほれ藥佐渡から出るがいつちきゝ
朝寐坊かけ直を言つて起される
徒をしたか後家苧でからげられ
書かぬのを踏臺にするおく道者
藪から棒の出たとこは小ぐるす
鳥籠へ蟹を入れとくめだかうり
せりといふものが出來たと桀の民
そばの客かむ内二つ明けられる
千早ぶるばアさま正五九月來る

御尤樣と御殿にこしがはら
地ごくのこう麻おく澤で土用干
跡くさらかしの友だち親仁入れ
着込はい立て春屋は飯をくひ
ふげん樣凡夫へむきのよい濟度
素見物かはせりや見事買ふ氣也
かるゐさは絹三疋のどらをうち
えびす講耳をすぼめて信濃くひ
又折もござりませうとは半吉
肝じんのうまみは式部書かぬ也
千年も言をりになる放しやう會
名が折れてから名のたかい杜若
法眼のびやうぶ法眼明けて入
きつとした形見古券に昆布そへ
するが町一ゑんこれを領すなり
咲くやひめ俗名お藤さまといひ
目の有とない紫衣の出る大法事
膝や手をはたいて翁かへるなり
むさし野で蟲をあきなふ繁昌さ
不沙汰の言譯もさせた名句なり

旅日記八日目に付くかきつばた
尊とさは無言でかはづ經を聞き
追善にやなぎの枝を手向なり
亂拍子聞えぬほどのつよい降り
萬歳がそでにあまつて嫁はにげ
まだ若いからとゆゐ言きれい也
かまくらで今道心を母たづね
甲の座へ大屋のすわるあづき粥
ゑひ覺え四十五人がまうしわけ
是で蚊もなくなりますと其角言ひ
初茸はうしろ姿を見せてうり
音羽の瀧と言きらず針が出る
かなへが歸り典藥で大わらひ
三浦より姿海老屋ははねるなり
曾我になるまへ春よひに梶原
ばせを葉へ嵐のかゝる古跡なり
中央にたんざして居る美しさ
嫁の禮巳午の間にやつと出る
歌人の知らぬ夕暮にむす子行き
ちぎりくわんの木上下の大不埒

つぎ物は嫁歌までが上手なり
燒香の初筆上下あたらしい
水姓の字をくり出して孔子付け
顏のすみ嫁おちたかえ〳〵
善をせんとし振袖で三分なり
色惡の跡のやつしは鍛冶屋なり
袴着を夷待つてるけちなやつ
かた人なしにおらんかまでをかし
美しい尼二三人しやかまゐり
百年跡に泣いた日に魚類なり
女房は旦那をもしと付けておき
早い書出しけいせいの暮の文
商賣に身を入れてから夜具が出來
金の草鞋も有るだらうと豆腐屋
まつさをな顏踊子の病みあがり
引き物に見あき長興山と出る
身をしる雨がいつか止み後家作り
花かんざしをぬいて出る一番手
中の町忌中のふだのないばかり
心中であらうとあくた川で言ひ

ぬか袋目口いぎやうに動かせる
かくよくに備へ師匠の花見也
ふうわふわのれんに螢來てじらし
太郎からべらぼうとなり川をこし
朝鮮垣に指をくむむすめがた
未おまめかとは聞かぬに劣る也
具足のつくろひと歩行前九年
木馬にて立がけをおふ春米屋
結ひ直すたぼからとんび烏出る
夜伽の襟へひいやりとへぎ生姜
あら面白からずの雪一分もなし
闇仕合ひ冬も蛙がないて居る
失禮なあいさつはお前でもいゝ
むす子の花見内を出る名のみ也
鑓かつぎ連れて家中は使者に出る
向うより來る小提灯そばやなり
たま〳〵の芝居通じにやたらきゝ
まあうゝといひなせえなと正燈寺
振袖を着たすつぽんに引かへる
兩がへ屋六十四文はねのける

よろけほふだいにしておく野掛道
やけふこゑ三味線ひきが紛らかし
千金の日を桃の木で子はをしみ
奥家老かみの毛の膏藥をつけ
着せかへて母をかしがる足の裏
惡たいの買喰ひ笘をあげてする
夫婦して雪打をするとんだこと
藥鑵西瓜をこきまぜる法事客
一の糸計り付いてるはらひもの
乳が黑くなつてみのわへ蟄居させ
どつしどし來る足音が三分なり
死はぐれ大日本と書いて見せ
卵ほど嫁も夜なべのひざを出し
さしッこの弓懸をかけて舟をこぎ
ねじめたがつてぺんぺこを習ふ奴
雪の留守炬燵で女房まふぐくひ
陰德をほどこすで下女いゝくめん
時は得がたし留守の内留守の内
雨戸にあひ栓あひくろゝやきもち
下女鴨をなんにすべいと錢でとり

一體分じん二三人よこに行き
門松にみそをすらせるしはい奴
大石の中にかるいしひとつあり
さい日の矢とりしりだの頭だの
大日坊がいきてると七びやうゑ
あかるんだうんさいで出る安大屋
大男白ふんどしでぬるく見え
藝者どらをうつたのも百のうち
蓮堀に氣を通しやなと池の茶屋
毛ば立た三冊の秘書かりておき
煮湯よりひどくしたのはかひの國
阿房宮らせつしたのがはぎき也
振袖のほまれは梅にほとゝぎす
笹蟹のふるまひ膳をすゑて待ち
萬歳びつくり一休に出つくはし
御稱美になま物の出るしゝん殿
奥樣は聞きお妾ははやくくひ
琴の音の止む日七くさ爪をとり
おとのした池へ翁のかげうつり
折鶴にばかり息の音嫁は出し

ひいやりと子の筆をもぐ金屏風
爪の長いは琴よりも三味せん
さきばこで出る助六はわり下水
おもはずしらず貞室は一句出來
ほめられるたびもち直す日傘
式日の手紙日付けの下へ賀し
櫻からさくらへこけるおも白さ
お妾は柳左久良をこきつかひ
ひいきのさたとして團扇嫁はかひ
夫れ見たかとつて太公盆を出し
幇間じゆずで拜んで敲かるゝ
さア登るべいと賴義御がいぢん
ゑひを鹽茶でさましたは十四日
山の芋のと大木戸のよつでいひ
草餅のひゞきかむりが横たはり
麗かさ垣根のひたしものが出來
大學や援山日向にそつかへり
十三日うたが長いとしかられる
白たへの中をかすかにふぐの聲
繪に書いて置てもすんだ簞笥也

二十つきではふか也と子の曰く
結納が來たと桐の木はつッてる
茶瓶の火かりにかゝる下戸おさへ
素見物首數を見る不はんじやう
丁寧にさかもりをする御膳のり
分地へは從五位の服の奴を出し
母のすご六盤象牙ぬけている
おそろしい十七文字はあたご也
能く有る扇富士でないやつは鶴
草摺のうでしつけんの内へ入れ
きついこと俵が米のちゑを出し
えしれない文を干しとく三丁目
うつかりと太鼓一分で鼻をかみ
かぶろ菊糸をきらせるとんだ聲
少長が死に奥家老耳ふさぎ
うち拂ふほどにお内儀夜着の綿
色事に女房やきめうばんを入れ
べら坊も有る者しるこ餅をしひ
伊勢で髮おき高繩では袖とめ
夕立に出るあどけない舟大工

あかんべいさせて目醫者は療治する
手や足でしひられたのは四天王
暑氣見舞丸づけを十いせやくれ
たゞくさを下女にうたせるお不勝手
すいくわで歸り女房おこすなり
ちと教へやうかとかはる下手將棊
花角力取らうと天狗日待なり
氣の毒さ家財ごふんで書いて居る
百鬼夜行をこしらへる雨宿り
お土産に是もなさいと飛車を出し
ふげん樣一度ひぢりめんをしめ
白むくをぬいで浴衣で床へ來る
通俗のせうべん無用鳥居なり
古風なほれやう一心命なり
びりついて我はわるかれ人よかれ
お祭りがいやさに美濃へ嫁入する
千金のあかりで式部夜なべなり
百のうははに駒引のあるおたか
敲くとばちがあたるよと金屏風
暦見て机をなほす長閑やかさ

美しいうけで國からしばらくウ
錦着る所存で紅葉わけるなり
伯父樣が常の座敷にして歸り
大層な竹はゝき出し帳をうり
なんと汚れはしまいかと翁いひ
羽子の子が松へとまると嫁はにげ
はね虫に妾まぶたをすはせてる
腰元のいたづら狆を富士びたい
鶴に蔦こたつの上に二三さつ
嫁の灸もうしまひかのしまひかの
門松はさしに彌介を荷ふなり
たいまいを黑ちりめんで嫁包み
嫁の指四五本にうどあいしらひ
煙草つぐ手へひいやりと三會目
かべちよろに己が借ると野掛道
上田の古着も大阪でひとはれ
十三日さゝつぱほどのなます也
嫁のおもては白々と十三日
駒形をかけて茂兵衞を親仁見る
土器に下戸結びめをとらへてる

下戸ならぬ男にこまる花のくれ
たて横に内ぢう歩行くいゝ女郎
酒呑みは饅頭の子にしめられる
門松に藁のこつふをくゝしつけ
疊さしあたまへさびたもめん針
三會目うまれかはつた女郎出る
三の切のしゆかう仲光がはじめ
祭文を語らつしやいと童子いひ
市すぎの月が遣手の顏へさし
眞木のぬけ売を買ひ染物をする
時廻りおじぎをしてはしんを切
ばかへといつて笑はせるあふむ石
茶碗は承知だから歌は御めんよ
ながれのすゑのちうや出る柳原
上下が一度にわれるはちかつぎ
長閑かさ空にくじらの聲がする
てんや野にあれど染まらぬ口惜さ
てんやくと局私語くおめでたさ
一町は俄にかはるからかさ屋
竝んで居ても三分ほど高いなり

七本はすはだでうごく嫁の指
お夜ばなし桂馬香車は歸るなり
恥かしさ富士の裾野が廣く成り
このぬしと書いた書籍を娘もち
裏富士の歌をぶとうへ書いて遣り

桐の木は村の娘とおないどし
慘い事よぐに目のない所へ遣り
鳴いて行く下で飛魚いせ屋かひ
しやうかちの官女袴がじれつたい

市中菴の舊友笛老人の撰紙をあつめ、家内喜多留の秀題をかりてはたちよつの卷に繼ぐ、しかも川翁のれん葉、高名の叢草にして春陽に萠るが如し。予此道くらくお先眞平蒙御免、筆を折て爰に柳のはゞかりをこふ事しかり。

子　誠

第二十六編

今や俳風盛んにて柳子の四方になびきなびかせしより、くさ〴〵の姿も此正風流に延臥題にかゝはらず、一句言葉廣く森羅萬象貴賤となく、かみはあめのみまご愛する姑、しもは賤が家の賑ひを御詠に知給ふも、皆もるゝ事なく此風雅止り、翁の樽の數二十四編に滿て、雪月花の蓋を納んとし給ふを、猶長かれと諸連子てうしの替りめを、和笛老人へすゝめて判を乞ひ、五々の編よりことしも一つおさへてつぎ著す言を、四方の雅叟の筆を勞せんもむづかしく、頓て墨を費す者は、

名のしれぬ花で伊兵衛は呼出れ　松歌
花のまくそつと覗いて吠られる　儘成
千金のいろの見えない不自由さ　鼠聲
船頭はむがでをしへるみやこ鳥　雨聲
きさらぎのその望月に西へ行き　鼠聲

桃林で蛤のなくのどやかさ　春駒
大へいに賣るは玄關の扇子箱　狐聲
かう向きなさいと花嫁をすわらせ　五連
孝行はかすみと霧におやに逢ひ　鳳頭
生醉のいびきの上を毛虫はひ　不醉

山吹を出すころ傘をかつぎ出し　狐聲
暮れの嫁二棹二月下旬來る　松歌
あみだ樣にくいばゝアへ爪彈き　芋洗
みなと川菊の流れるをしいこと　五連
金子の十郎びんばふらしくなし　狐聲
一字宛傘屋で賣れるのどやかさ　春駒
かんしんへ劔のやうな口で賣り　錦鳥
代句だらうと九郎助の額をほめ　同
たいまいで御庭の雪の寸をとり　里冢
鬧がしく春は來にけり豆をまき　枡水
すつぽんと鷺で赤子は喰はじめ　狐聲
七寶莊嚴したのをめかけさし　雨譚
鹽引に弓矢たばさむいそがしさ　三交
法眼の世話であひたい替り出來　鳳頭
鶉聞き〴〵手あぶりを拵らへる　東李
賴豪の外は供物をかじるなり　春駒
生醉の突きあたるたび花がちり　鳳頭
ひからびた餅を萬歳内で喰ひ　尾上
奥方に異名を付ける切落し　五蝶
かんばつた諷御子孫も繁昌　雨譚

ねからよめませぬと鍖でほじり出　紀鳥
不二の雪あてに川越し一分かり　蘇竹
雪見には馬鹿と氣のつく所まで　錦鳥
かんなくづ蛙と同氣あひもとめ　文集
高うは御座りますと出る鳥と魚　三交
ぬかるみへ娘を入れて螢にげ　不醉
踏付けにした看板を足袋屋出し　柳雨
二十四にたつてくんなとかのえ申　三交
月を仕廻つて天道に見放され　狐聲
女郎の手を引きやッたらに曲り　紀鳥
引出しはすうい〴〵と何もなし　不醉
黑犬をきやんと云せて四つ手かけ　枡水
たッた十五兩でおすとあどけなさ　かてう
潮吹きや天狗水茶屋にらんでる　儘成
烟草にせうせと根津の文を出し　鼠聲
餡ころを提げて來てもう出るな　窓梅
麥の後ずいきの中で又はじめ　三交
おめかけの威勢は股で風を切り　鳳頭
三階で姫君はだをぬいで居る　尾上
鳥かごの中に髮切虫が居る　三朝

けふも又留守でござると諸葛亮　完示
しんじつさ櫛卷きで來る藥取り　欒子
一寸した雨を降らせる太神欒　尾上
そりや蛇と火繩で威す野がけ道　東李
順の峯入知る人は花ばかり　蘇竹
花の朝寶永山を下女つくり　里鳥
もう五年おそいと達磨首ばかり　五蝶
女郎屋へころもで來るは旦那寺　如雀
鍬だこの手で吹殼ををどらせる　錦鳥
古風なる男ふんどしあごでしめ　三朝
内にない物ではなしと女房いひ　儘成
脈を見る鼎なんとか言はいひ　如雀
御意に入るはず奥樣も柳ごし　川鳥
出合茶屋勿論すきやかゝりなり　狐聲
銘のある石親分の門に置き　玉章
初の字は七十五聲ほどのうち　春駒
餅花を買ひにやらせて飯を喰ひ　尾上
信玄と道鬼相求めた軍師　如雀
片乳房にぎるが欲の出來はじめ　儘成
郭公聞き〳〵二ヶ人討ちに行き　鳳頭

ぬけて出る咳を息子は工風する　狐聲
籔にも功のもの明智をころし　鳳頭
からかさと人が花見の中へ落ち　尾上
御隱居と聲をからして咄す也　桝水
聞違ひあらとうとなの御馬なり　鼠聲
本所に二三字京に一字なり　窓梅
禁酒だとおツしやりませと袴腰　門柳
風鈴の短冊讀める暑いこと　尾上
北は金南は絹で橋をかけ　湖水
雲長と宗祇和漢の髭をしみ　芹丈
歌枕だけ興津をば寢ずにたち　偶中
だアれかゞ居やすと歸る金の禮　紀鳥
かみなりを這入り稻妻形にぬけ　鳳頭
船頭はへんてつもない松と椎　尾上
たま〳〵の上下供に貝杓子　門柳
袖形で畫寐の貌の蠅を追ひ　霞朝
獻立に節を付けては子をねさせ　花丈
かうに成つたと夕飯を忘れてる　鼠聲
屋敷中やうこく忠が幅をする　尾上
馬狩りとてうかう觸れを廻す也　窓梅

螢籠そばに史記だの左傳だの　柳雨
かい名を鳥に聞かせて放すなり　窓梅
人ほどにしぼつて入れる花の琴　尾上
放生會ぬくめた方を鷹は見ず　かてう
三井寺や比良を服紗に嫁なほし　鼠聲
燭臺をかりるつかひに何ごとだ　三交
暮れかゝる軒端見て居る美しさ　尾上
けんしきは花餅りにはから簞笥　蜃虹
苦肉の計略香ばこに小ゆびなり　玉章
鬢ゆうた厄介を二人持ち　窓梅
玉菊へ手向けぼんのうぼだい也　鼠聲
芥子の花一輪取れば二りん散り　尾上
わるくない足どめは盃が出る　鳳頭
むらさきの鹿の子落合ふ中の町　不醉
桃から梅へ一ばんにくだる也　霞朝
小菊一帖たてにして高楊枝　曙山
駒下駄で生捕を引く中の町　偶中
光陰を座頭のいそぐすばらしさ　窓梅
鳥籠のたかは二羽ぎり跡がたえ　矢正
罪でない虫を花よめころす也　東李

叩かれて痛くないとて悲しがり　片岡
子を持てしるとはおそい思付き　昔人
いつちい丶事といまさかなどを出　尾上
そんならしのび爪でもに嫁困り　春駒
白むくのすみ末世まで落ちぬ也　窓梅
南朝は藁でたばねた武者も出し　昔人
夏と秋利息のつかぬ金をかし　鳳頭
ひんがくのあかり吹きけす南風　蘇竹
さくらより釟菊娘ねだるなり　錦鳥
見たり見せたりで一兩十匁　尾上
鬼は留守かと洗濯に綱は聞き　蘇竹
瓜田より不埒とうふへ屑が入り　蜃虹
牛の刀で熊坂はれうられる　狐聲
あなたは丑の御年かと吉次聞き　松歌
俗な繪合せ歌麿や榮之なり　松歌
鳥の名も替り息子の氣も替はり　不醉
花ぐもり晝から桐の梅を見る　柳雨
銀ぎせるつばなでやにを通す也　尾上
い丶むすこ内の朝顏ばかり見る　花丈
大層な庭子錦のねぐらなみ　蘇竹

千兩の中へとほりをすッとつけ　五連
世をうしと悟つて耳を洗つてる　東鳥
おめかけの妹扇子の二本ざし　偶中
近付のかたへ駈出すにはか雨　五鳥
白い手で簾をかゝげる中の町　偶中
人面をみだしてかへる花の雨　五鼠
六月は銘あり五月無銘賣り　門柳
五月は拵へ六月はつぶみ賣り　昔人
青樓のふた片手ではしめられず　不醉
惚れぐすり二貼國府の中へ置き　如雀
灰吹へ一寸越川嫁は乘せ　五鼠
色々と作りつくして横にさし　錦鳥
口は燒いたか桑名へは一番手　丸水
夜やさむく白魚に出る佃島　窓梅
遠く遊ばずで伯父から所望され　矢正
遊山湯に行くは持たが病ひなり　片岡
仲麿はもろこし團子にて月見　孤雲
鷲の案内でひよ鳥をこえたまひ　芋洗
三會目あした愚札を呈すなり　矢正
神慮に叶ふ飯をくふ伊勢屋なり　虎同

旦那は正阿彌供は七厘あみ　美德
盜人を捕へ母親こゑを下げ　錦鳥
柏にくるむと團子が餅に成り　如雀
景清をつかまへに出る十七夜　孤雲
する膳をきらひ息子は買ひ喰し　竹苞
暑いこと釣瓶ひとつに人だかり　里冢
そりや頭卷だと傘を押ッ付る　東鳥
瓜田へ沓を入れに來る留守見廻ひ　山々
伊勢の留守床やみにする不屆さ　三交
すつぽんの名は飛込んだ時に付　儘成
籥かけは藁の柄杓で水をかけ　同
乳母がしりほゝばりかねる枕蠣　東鳥
長うたへ妾技折をはさむなり　鼠聲
春の式法事をはり嫁の禮　尾上
上下に楊貴妃のある眞盛　同
嫁の禮おはるみじかに成て出る　窓梅
男の中の豆入りが幅をする　尾上
うしよをひけなどと葵の上の供　雨譚
禮帳に去年とやいはん硯箱　窓梅
碁が濟んで仕廻ふと柚つんのめり　春駒

雪打に口をすくする花の主　尾上
らにしをになんぞと地下の歌學振　屋虹
蒲燒のすじまで息子あなを言ひ　三朝
太右衞門は獅子太郎兵衞は牛を飼　同
夕べから見えぬ茶わんに蕣あり　芋洗
又鞠をつくかと醫者の弟子はじれ　尾上
慈悲な事彼奴と彼奴二度に出し　隣狸
どの子が目好き古市の踊なり　尾上
筆に手は付ず墨をば賣るところ　雨譚
ばい〳〵儒者も許すなと始皇下知　門柳
千代の春ちかく雲井へ登るなり　松歌
有難さひくいまくらは棚へ上げ　東李
しやちほこは山と谷とに住まぬ也　如雀
佛力で他人の馬にも踏まれず　かてう
繁昌さ聞きに行ずに繪馬を見る　里鳥
御立身魚に帆かけて乘つ付ける　東李
千兩で染萬年へまゐるなり　錦鳥
むらさきで源氏を包むいゝ涼み　里冢
目が覺めて見れば座敷に琴計り　莚雪
丸いあたまがふたつある秋の暮

西海の波にたゞよふ香包　片岡
りんとうの會席書へ札が落ち　湖水
貧學のあかりにたらぬ春の雪　器水
甲の座に居るぬけがけの手習子　錦鳥
箸紙を細工はじめに嫁こさへ　矢正
姑が出ると手のちゞむ歌がるた　一德
またおたのしみだと杖で呼戻し　矢正
一日は龕相六日はしつて付け　榮桂
兩方に正の字の付く御神號　窓梅
神德は御番組へも入りたまひ　かてう
御扇子と笏で雨天の御挨拶　鳳頭
四角な口を吹き閉ぢて風は凪ぎ　蘇竹
餘の山と違ひ子寶までも持ち　門柳
他人根生むづかしく書いて出し　叶
藤ばかま野分にひだを崩される　里鳥
法眼の請合ひで濟む御結納　文集
朝起きの鼻へ八重櫻がにほひ　狐聲
どの子が目好き五月雨の名歌出來　隣狸
やつと舞やしたと神子は初舞臺　竹二
目にはつた鈴でにぎはふ神樂堂　川鳥

爪音で丈けに餘つた智惠を付け　川鳥
御殿にも御寺にもなるよしの丸　三朝
竹賣をよけ〳〵鯖の御使者行き　柳雨
被など着てなまめいた見合なり　一德
二つ三つはなせば秋の暮ちかし　叶
白酒をくもの下からかへて來る　一德
看板に日月を出し星をさし　かてう
愛相に嫁は一口なぶられる　儘成
三尺のつるぎ四百の元手なり　狐聲
いけしはい女めだなともう槐　尾上
世帶道具が寄合ふと松がとれ　五連
彌生とさつきごたまぜの壇の浦　芋洗
恥かしく丸わたで來る伯父の内　狐聲
頂いてのんだ息子がいつちもて　柳雨
はやり色かつかちめいて息子着る　同
褌もいらぬとむりにもらはれる　かてう
はてずるい奴と女房の櫛を借り　錦鳥
雛店へ素見のはずでむすめ行き　狐聲
狐にばかされ薄をしよつて來る　三交
身體髮膚そこなつて夜具が出來　松歌

こたつほど咄しの出來ぬ涼臺　矢正
李下の冠桃の木の蟬袋　春駒
講親のあるのはけちなやかた船　窓梅
老いぬれば土場淨瑠璃の茶抔汲　中葉
俄雨取まけえ〳〵といふ身なり　片岡
御婚禮おつしと言つて呵られる　孤雲
品川へはまり衣の楯がきれ　三交
長半坡だにてうばかり二つ出る　曙山
七月下旬あアでおすかウでおす　芦舟
ひまな見世こゝにも四十騎の軍　曙山
喉つきのかうべに宿るかよふ神　かてう
沐浴をして蘇生する暑い事　孤雲
御年貢に詰り下駄やと寺へ賣り　松歌
貧僧を夢に見下女はかつがれる　東鳥
物置きの錠はぬかみそだらけ也　川鳥
名代は禿にすこし毛がはえる　儘成
腰よりはおれが立ぬと下女が宿　姫小
桐の木を切るころ娘ずゐが明き　喜水
香を疵にして店賃が百やすし　矢正
秋一は天上はれた御出合　孤雲

縄の入る盗人でなしかきつばた　尾上
淺草はたかし音羽はふとい猿　東鳥
草庵の返事に添へる菊の花　尾上
月に又ござれと柴の戸をたてる　川鳥
けちな啼きごゑと賴政引しぼり　鼠聲
おめかけの歌書細長い箱へ入れ　尾上
看病のやうに寢釋迦の箱を置き　龜鳥
他領まで嫁取上げる歌がるた　芹丈
めりやすを黄色に染める練供養　窓梅
黄金も借り貸しのある夏と秋　尾上
張立てのしやうじを破る色直し　門柳
出ぎらひといふ振袖は聟を取り　兎圓
欲の無い形見手跡が貰ひたい　孤雲
不斷著へつめたく戻る御延引　春駒
跡はさみ箱がおめかけ不足なり　丸龍
吉野から法名の散る暑いこと　左笠
御地赤をぐつと茶に見る松葉色　春駒
山々嶽々を晴天十日見せ　門柳
けちな呉服屋しつかりと物を言ひ　同
さよ衣やぶつて五兩わきまへる　同

けふの上客とお針に蕎麥をしひ　桝水
じれつてえよの字廊下に餘る程　兎圓
一鹽の鱚くし卷の女房干し　亀鳥
年忘れ年忌と讀んで叱られる　春駒
蟬丸をとつ樣といふ座頭の子　三交
さくらから女房に杉の釘を見せ　五鳥
長いしけばたり〳〵と柿が落ち　梅枝
のつきりが案じられるとお仲言ひ　春駒
水鐵炮をつるべ打つ暑いこと　柳雨
役者の法事石橋や道成寺　如雀
賑かさ役者とてうち〳〵する　三交
劍菱の大紋を著るにはかあめ　喜水
まゝごとの世帶崩しも泣別れ　玉章
鳩の豆楊家のむすめ賣つて居る　狐聲
すわり直されじやうだんだ〳〵　尾上
御寵愛石になつてもまたわられ　鳳頭
欲の有りたけ聞いてとぶ放し鳥　芋洗
うつくしいばつかりの嫁二十七　偶中
雪の朝おのれ〳〵〳〵　我口
あんどんの柱かくしは茶漬見世　五蝶

才藏の向うへ木藏ならぶなり　狐聲
食に餅きらふは雪の料理なり　東鳥
いゝ子の振をしてかゝア二分にする　鼠聲
月迫に餅屋は團扇つかひなり　不醉
嫁菜ァ買つしやりませに道を聞き　柳雨
由兵衞を口の酢くなる程譽める　鼠聲
やれつくな〳〵と火繩ふり廻し　錦鳥
でんぐり返しする傘を伊勢屋貸　鼠聲
虱にたとへかずのこで叱られる　同
世渡りもさまゞ〳〵股をくゞる也　東李
あくぬきを締たので下女勘付かれ　不醉
役者附嫁どれ見せな〳〵　柳雨
隣へ嫁が來ると聞き病み出だし　湖水
其名も月の色人を兩度買ひ　鳳頭
艶藏人も卽言で落ちをとり　雨聲
汐を汲む邪魔を二色殘すなり　窓梅
伽羅佛のあたりで桐の音を尋ね　狐聲
御延引花に一雨あつたやう　樹水
花色ををしさうにぬぐ御延引　鳳頭
御ふばこへ根松の這入る麗かさ　春駒

萬歲の子に道を聞くかきつばた　三朝
御幕をとると短冊へ人だかり　春駒
ひんの能い木登りをする花の幕　同
花の宴には早蕨の御重詰　松歌
櫻煮を重詰めにする花の宵　鳳頭
梅干や干瓜の邪魔其角する　窓梅
人の田へ水を引かせたのは其角　昔人
金屏風今年はどれと御手あつさ　窓梅
打つ杖の下へはづれる父の慈悲　五連
夏の夜の碁に一手ふけ二手ふけ　尾上
ひらめの千聲より鰹の一ト聲　芹丈
角田川母がたづねるからと逃げ　三朝
毛を剃ると飛だ大きな物に見え　同
下女が部屋大一座とはむごい事　芹丈
旅の留守別條たつた一つあり　不醉
人こそしらね賴政がむすめなり　三交
金と錢てんびんにした御緣日　かてう
雨宿りするに及ばぬありがたさ　尾上
片方は四百餘州の目をさまし　窓梅
夢の番附孝靈の後に出來　矢正

不二の歌自力で風になびきかね　不醉
通用のよい御寺號を御建立　桝水
觀音のちからで文武勝利を得　昔人
琵琶の夢近江の守に成らせられ　同
重陽はなんにも立てぬ節句なり　如雀
白川の名歌能因くろくなり　古柳
二ヶ所立てる外山の金屏風　狸疊
立聞きで末世へ殘る名歌なり　文集
小式部は地利を功者に口ごたへ　雨聲
神前できの字を五つよんで聞き　窓梅
釋門はむかし武門のあつたとこ　三交
おもふ壺へは落させぬ師の御坊　如雀
夜なべ細工のてつぺんは駿河也　五鳥
敷しまですればことわり納受也　里鳥
旅でない歌枕する春のよひ　鳳頭
大和のさくら山城で伊勢はほめ　川鳥
御立身なまぐさい風門を吹き　かてう
舞鶴は空色に能い模樣なり　文集
つきまとふ狐をはなす國家老　かてう
山吹とちがひ見ごとな梅の花　尾上

一ト御殿稻妻のする花の朝　三交
月の疵直打をしたも名句なり　矢正
おひ〳〵に割込の來る初のひな　五連
御表のおふじは高い顏をする　尾上
糸ゆふのたつ日は嫁の帽子針　狸疊
間紙が足らず獻立引つぺがし　矢正
江の島はうい物といふ旅でなし　鳳頭
花よめは齒にきぬきせて笑ふ也　古柳
船番所越すうち藝子汗をふき　尾上
不孝の罪でいわし引く天の網　蘇竹
面白くない箸紙を女房くれ　文集
萬歲をならんで見なに姉こまり　窓梅
さアまけてくんなと櫛に惚て居る　東李
河東ぶし杖にすがつて隱居聞き　不醉
未さとあらそふ女房ふけて見え　かてう
てえ〳〵をしたらやらうに禿じれ　松歌
駒下駄で酒池肉林の中へ來る　不醉
目藥の看板眉は入らぬこと　雨譚
もうくける計と探すたばこ入れ　鳳頭
また帶をかせかと河岸の姉女郎　一德

裃からちろりを出してくらはされ　鳳頭
足の木像を足袋屋は持つて居る　柳雨
目がさめてあぢきなく喰ふ粟の飯　鼠聲
孕み句で點とりに來る下女の宿　如雀
ひそ〳〵と繁昌をする出合茶屋　窓梅
色しやうがかけさりとてはおしの事　文集
桐に巣が出來て御家中あんど也　不醉
歌人は居乍ら一城持ちこたへ　尾上
桃の花見い〳〵張飛引つかける　古柳
我夜具へ女郎を寢かすきつい事　狸聲
猫もあり狸もあるで嫁が來ず　蜃虹
吸口をぬくやうにして嫁は出し　竹苞
山形が組子花かんざしで出る　如雀
萬字屋は草分けらしい家名なり　狐聲
いさかひをしい〳〵碁打中が能し　桝水
三番叟共をならべて高砂や　蜃虹
鹿の晝寢を埋むほど八重が散り　松歌
けちな呉服屋勝手から茶を運び　窓梅
御立身目出たくへりし虫の聲　不醉
五月やみあやめは本のさぐり題　春駒

すき通るから召したまふ緋の袴　五連
お妾はいづれの緒よりだかしらず　窓梅
瑠璃の櫻も咲きさうなところ也　尾上
にはか雨女房は梨子の花を出し　狸聲
齒はたゝぬはず神詠も岩ほなり　春駒
にくい事金を撞木でかき寄せる　尾上
何のことはねえ初會は御儀式　松歌
よしの山是より上の句はきかず　矢正
もうよからうと藪入を母おこし　門柳
あくる日の群集は聞いて來たの也　丸水
ぬひはくや鬧しい程しづかなり　錦鳥
門徒宗の佛壇を三分で買ひ　狐聲
先生お目がさめたかなと玄德　松歌
忠臣は根づよくまうす御諫言　東李
朝々きえるうつくしい不二の雪　尾上
大太刀をぬきさうにしてよしにする　同
ぬかぶくろ二番煎じて母あらひ　柳雨
此糸で綴ぢて六十帖にする　窓梅
鼻につかへる飯をくふ恥かしさ　五鳥
見かけは光り輝くがからつぽう　不醉

目にはさやかに見えね共恥しさ　花丈
玉の輿たちばなちらし蒔繪なり　三朝
五月雨に下女のじれてる火打箱　藤枝
どさ〳〵〳〵と猫の子に湯を浴せ　湯島
せいた奴歩てかき立て叱られる　紀鳥
本尊の御名を其まゝ額に書き　鳳頭
源氏繪を蓮花へ書くと哀れなり　窓梅
法官に着るむらさきは殊勝なり　尾上
御禊川一夜明けると法の聲　里鳥
錢金のあひだに光る彌陀如來　鼠聲
神國は人をだまさぬ琴のおと　五連
顔にてりはの色もなくたつた山　尾上
遊女とはあんまりはでな化身也　同
手もつけず折るはけ高い杜若　同
椎が本秋は御法の船も見え　蘇竹
をしい事無常の風になびくなり　文集
山では聞いてよみ野ではよんで聞　蘇竹
勅使までほき〳〵とする孝の道　芹丈
法眼のすゝめ水干急に出來　門柳
雛の乘物跡棒は乳母がかき　矢正

借金はぬけて外聞わるい春　尾上
朝がへり妹が物をいふばかり　里冢
深林人しらず竹の子をぬすみ　不肖
紅葉から袖打ちふつて聟かへり　春駒
相の山泣子が親をすぐすなり　五蝶
柏餅椎と松とのあひをこぎ　三朝
盗人を地黄のやうな目に合はせ　一口
花の數なると冬瓜は未だ安し　窓梅
村の嫁蕗や茗荷を掘つて來る　如雀
夢中に成るはず魂茶屋に置き　片岡
人別をめでたくぬけて名が替り　錦鳥
蛇の出這入りに賑ふ六あみだ　かてう
澁皮をむいてひらりと猪牙へ乘り　枡水
竹村の伊勢あたしはい所でなし　狐聲
堂守は塔から落ちた大工なり　川鳥
生醉ひの女房寐聲で禮を言ひ　憐至
驚かれぬるにそろ〳〵客は逃げ　尾上
若松染の綿入れで禮の供　鼠聲
かみなりの内で買てる子の太鼓　狐聲
禿の力もの〳〵ふを引きとめる　里蝶

小判のはしを連れて出る中の町　窓梅
だにほどな銀でお家樣寺まゐり　鳳頭
村使ひぬれて正月ふれて來る　竹二
つらい事棹を握つてこいで居る　三朝
煙草盆取上げられてつイと立ち　窓梅
丁寧に西瓜をくつて下びるなり　鼠聲
柿盗人を呼生ける馬鹿なこと　狐聲
あたり見廻して汁粉へ下戸這入り　一德
不二土產舌はあつたりなかつたり　鼠童
酢と菖蒲は紅葉から歸るなり　窓梅
朧月壁へ立てかけ下女はぬり　蘇竹
おふくろが出て神さびる神樂堂　春駒
眞綿で首を包まれるはづかしさ　不醉
妾のは干しぶえのする土用干　鳳頭
俄雨子のある嫁と引合はせ　川鳥
品のよい根こぎは千代の例し也　春駒
渡し場の名に計いふおだやかさ　尾上
夕ぐれに一首けだかい心まち　同
鷄明に花のまくらへたちたまふ　同
まだ二人有を知つたか二度と來す　同

たつ時に跡のにごらぬ湖水なり　窓梅
われ勝にあら玉を汲む江戸の春　枡水
住國にない色を織るから衣　尾上
伊勢物語在宿で書いて居る　同
かの所はかうかと笏で角田川　鳳頭
御延引すぐに雨中の花を題　春駒
年寄りの冷水でない美濃の瀧　同
五月雨の奥海に成り山に成り　尾上
百人で御機嫌をとる御延引　蜃虹
師は寒く弟子は涼しい名句なり　尾上
鶴といふ字も舞て居る長閑かさ　春駒
我としへ四字足したのが名句也　柳雨
踊子にはまり切つたも一首入れ　尾上
四月朔日に腸をぬかせる珍らしさ　昔人
金の威光はこはい物縁に付け　中葉
書判の請取りを出す伊勢の御師　窓梅
薄のそばでてえ〳〵を家内する　門柳
そつとよと嫁梅漬をたのむなり　紀鳥
見通しに居るのに汐干母案じ　錦鳥
おちこちのたづきに猿を連れて出る　窓梅

江の島へ嫁たしなみの駕蒲團　蜃虹
ちんがらこしい〳〵土用過ぎも干し　芹丈
つういついあゆみを渡り藝子乘り　尾上
ふることを采女の宮と木辻町　東鳥
いゝ日和ほど腹のたつ花の留守　東李
駒下駄だらけ連彈きの上りはな　尾上
する頼母しくない所へ櫻植ゑ　不醉
居續けの髪べつ甲で撫でつける　松歌
燈籠を賣つて息子は損をする　花丈
大男二人土俵でもらはれる　狐聲
櫻田のやしきから出るつくし賣　如雀
眞白な耳づくをよけ四つ手かけ　鳳頭
人だかり角木瓜の障子なり　雨譚
雪で見る書籍へ落つる水つぱな　芋洗
五兩とる時は鼻毛をぐつとぬき　枡水
燒つぎ屋しかられ物の問屋なり　五蝶
いゝ年で出合ひにかよふ尉と姥　窓梅
摘草のはしりが來ると松がとれ　紀鳥
主人相しらずうろつく松の内　歌遊
三會目薩摩に佐渡をあいしらひ　紀鳥

敷ぞめはほうり込まれた樣に見え　不醉
髭を撫でる丸山の三會目　紀鳥
珠數袋嫁のけいはくはじめなり　鼠聲
鵜が行くと鷹が又來る間の惡さ　かてう
遊藝を孔明一度用に立て　玉章
孔明は松もかよはぬ琴を彈き　四連
鹿に鞍置いても指のさし人なし　五鳥
切手をわすれ瓦師の河岸を借り　不醉
春太夫ちやう場に成ると嫁は逃げ　湯島
逃げながら高慢をいふ一のもり　東長
黑木賣呼ぶとやんわりふり返り　錦鳥
三年でいろはをあげる本望さ　如雀
庭の面はまだ乾かぬに粘やのり　曙山
綱が居た跡へ蠟燭取りひろげ　雨譚
提灯におよばぬと仲國は出る　鳳頭
お爺にちつとかしなよと十五日　紀鳥
印傳を明けて橘二分で買ひ　鳳頭
一つけん勝負丼をつきこぼし　曙山
七種に伊勢屋もとぼしかけを取り　蘇竹
乳をもらふ内栗虫を抱いて居る　東長

手を出して足をいたゞいたは子房　紀鳥
暮の文てえげえあかんべえをされ　鼠聲
座頭の坊足袋屋の前で蹴躓　尾上
三會目隣あるきをせずに來る　窓梅
ごみかしやせうと紙屋と鮒屋いひ　鳳頭
吳服屋で反古張を出すにはか雨　鼠聲
寒が入りんしたとさ三文もなし　窓梅
百人一首御の字のつく歌で苅り　尾上
後の月見には野分けの卷を書き　窓梅
花の無い春もにぎはふ御本坊　一德
桃の宵奥は雲井の調子なり　尾上
何處へ行く氣だが二條を逃は逃　蘇竹
古今武總の建立は九品佛　如雀
古近江と知ず彈いてるひんのよさ　尾上
奥樣と車座に居るおつれ〴〵　川鳥
國家老わつちが思ふまゝにせず　窓梅
さよ衣つれ〴〵とした返事なり　かてう
七月の節句は酒が無銘なり　枡水
船頭に紫衣でおぶさる運の能さ　尾上
品のよい襷をかける御ぐし上け

白石に先をとられる朝がへり　尾上
どこのだえとは失禮な金屏風　春駒
大勢を涼しくかへす見世開き　鳳頭
聲今さらにわづかなる嫁の琴　五連
月やどるらんで花嫁出にくがり　不醉
鴈がねのそばを白魚かけまはり　尾上
數ならぬとはむづかしい時鳥　是閑
喰物の小言も孔子いつて置き　雨譚
氏神は八幡と綱まうし上げ　同
功なり名とげて鱸やん〴〵　曙山
譽られる盜み柑子がころげ落ち　芋洗
江戸橋で道外を一人宛かゝへ　鳳頭
銘々にほめて引つこむ冬の月　川鳥
月見る月は此月のむづかしさ　窓梅
しやう根草娘を嬲るうらゝかさ　志夕
中の町そとはだかりはいゝ女郎　窓梅
からし味噌嫁の譽たが氣に當り　一德
尋ねにくいのは小督より楊貴妃　三交
まゝ事のやうなで賣れる南禪寺　隣狸
むづかしさ精進をして緣を切り　尾上
投出した六位の側に大びしやく　柳雨
うたうたひ顔をしかめる禿菊　志夕
角田川これから聟の道はなし　不醉
寢入つたふりで待てるも古風也　同
談義僧すしをつけるは手柄なり　窓梅
おしめりが欲いと紺屋世事を言ひ　片岡
二十日過ぎ素顔亂髪文を書き　玉章
因果な子だと賀の餅を里で喰ひ　錦鳥
重箱をとなりへ見せて猫をかり　尾上
湊のごとく船がつく下手講師　中葉
鉢卷にあやまつて居る鰹賣り　器水
納豆を春までのばす泉岳寺　窓梅
心中の前夜男のひざがぬれ　蘇竹
穴ばたの腰を卒都婆へかける也　孤聲
顔を見に四匁五分買つて吸ひ　花丈
畜生にや劣りましたと乳を貰ひ　五鳥
むぐらもち時々上へふみはづし　里島
おまんまのおかづ定紋割りで出し　同
徒然のまゝいが栗はゑみわれる　窓梅
琴を片寄せて隣の子をあやし　鼠聲

灸をすゑるも孝行の一つなり　門柳
ねん〴〵花の高名は臥龍梅　曙山
ほとゝぎす愚案の所へ珍魚來る　三朝
笈の歌外の鳥だとつゞられず　かてう
紙雛はちやつとで取れぬ所へ落ち　一德
負うた子に教へわに口叩かせる　柳雨
おひねりを投げて貰つて嫁拜み　窓梅
ほか目には蜜より甘い母と見せ　狐聲
公家の乳母けいあんをする黑木賣　里鳥
木ばさみも捨賣りにする中約言　柳雨
翌年の雪にはさくら炭を焚き　孤雲
禰宜の子のこしやくてうちで拜也　松歌
秋の田を二百十日に生醉する　三交
まんぞくに玉子を仕廻ふ太神樂　鳳頭
君が一日のなさけは惣仕舞ひ　鼠聲
松の葉へ早蕨一本書いてやり　かてう
松根に上戸のともは大あくび　川鳥
里がへりぢゝイばゝアをまづ咄し　狐聲
嫁の供けちな小間物屋ほど持ち　窓梅
水ざふすゐといふ腹へ異見なり　鼠聲

猫がはらんで一家中まゆにしわ　尾上
三分位は不斷ありさうなてい　同
どらでない四ッ手麥藁細工つけ　鳳頭
本性を違へずいつちい丶へさし　窓梅
さう御座らうと存じたと飛車を逃　柳雨
すみ〳〵で大工をそしる疊さし　芋洗
買初めは輪飾りのある四つ手也　鼠聲
卒都婆下りませい出ませいと六位　雨譚
ひつぷの雪見鰒汁をくつて出る　尾上
生醉を藝子にたのみ寢かし付け　同
古今の難澁ぬり箸で小だたみ　儘成
ちよつとした船中をする茅場町　尾上
骨ぶとな源氏荷なひて水を汲み　偶中
姫はじめ萬歳時分はづれなり　かてう
ひんのよさ緞子の塚へ手を合はせ　鼠聲
なまめいた院號のある下屋敷　長故
大茶の湯申の下刻にやつと濟み　柳雨
おなじ刻限に三人さびしがり　隣狸
しのぶずり召し傾城に亂れそめ　門柳
ひんのよい腕づくですむ御右筆　尾上

上品なをどり子の來る鐘供養　尾上
つかみ取りには傾城はいかぬ也　同
箱根山櫻は茄子のとほるころ　霞朝
ぼだいじゆへ集つて啼く衣蟬　不醉
生國の極樂者を佐久間置き　窓梅
濟度のうちで大日は木綿もの　同
本膳にうまみを付けて國へたち　三交
玉のこしから引きおろす國家老　東李
おくさまの方には入らぬ筆の鞘　尾上
商人のよききぬを着る御祭禮　竹苞
御年貢のからで初音の鼓出來　かてう
今もつて綱へ手を出す御ゑん日　不醉
神國へ寺のことばは過言なり　窓梅
稲妻をぐた〳〵にする師の御坊　里冢
濱荻を他國の名にて伊勢はよみ　窓梅
御立身紅白棟にひるがへし　尾上
京染めにしては五の卷色のよさ　里鳥
おく樣は甲乙なしの糸で彈き　尾上
笛の音に琴の調子もくるふなり　偶中
あくる日に幕の干上る御殘念　枡水

年よればぶしやう一字で返歌也　窓梅
梅山吹は文と武に手を取らせ　芋洗
釣がねは無銘面には銘があり　かてう
山もわる位勢の客をふりとほし　川鳥
琴の身がまへで袴を嫁たゝみ　壽
長刀の流義をのこす白拍子　三交
十五日甲の座で見る大あばた　尾上
過分といふ禮豆腐屋はつに請け　春駒
三年の古きず屏風かさぬなり　窓梅
いびられに行くが女のさかり也　不醉
松竹で千里も祝す寅の月　三交
狂言ににつと冠の緒がゆるみ　偶中
御えらみの枝折にもなる紅葉也　蜃虹
歌によむ時はやさしい大江山　曙山
島がくれ行くほど曇り御見合せ　春駒
他人へは蜘としらぬが佛なり　枡水
名のたかさ五色にもれた唐衣　雨譚
どつ〳〵と笑つて雜煮二膳出し　枡水
賑やかなこと老筆のしわものび　蘇竹
去りにくいわけは櫻の返歌なり　一德

たゝみのうへの摘草は蕗茗荷　窓梅
けつこうな御天氣に嫁禮に出る　春駒
新藏を丸綿で出るよめの雛　五連
御居間まで出る植木屋の歳暮也　尾上
山櫻しばられるのは手がらなり　同
若草を白魚の喰ふうらゝかさ　蘇竹
十四日土藏のを出すいゝくらし　尾上
夫婦とげんじ三日目に客に來る　同
美しいすつとのかはを御寵愛　鼠聲
よい花を見ながら水を汲で居る　尾上
きゞすのあさる所から御ひろひ　同
快晴さ筑波のふもとみやこ鳥　門柳
牡丹花も程よくしめる二度の雨　尾上
彈き初めに嫁梅が枝はきつい事　柳雨
下げ髪へすゝきのからむ芥川　鳳頭
琴の上毛虫が落ちてしばし止み　尾上
のどやかさ鍋がとれると釜が明き　同
御退出觸れに鞠場の羽子がやみ　かてう
始皇帝今朝の地震をおもひ出し　柳雨
孝行は雪とこほりで名がたかし　同

朝起をしては見に行く八重櫻　五連
きのふの姿引きかへて御慶なり　鼠聲
無拍子な薺御わらひ草に成り　不醉
嫁の來た春萬歳にきつい入り　鼠聲
琴の音にひらりとおりる文使ひ　尾上
雨風で須磨の出船は手間がとれ　窓梅
栗の木の杭に是より丹波道　如雀
名は七つあつて女のかなめなし　蘇竹
面色筋をあらゝげて五兩しめ　鳳頭
さて安く賣るなと枕紙にする　窓梅
どこへ出しても耻しい嫁を取り　春駒
泥へ棒うたせて元の鞘へ入れ　古柳
しん中は世間にたつた二人也　尾上
身じまひ部屋の噂にも金のこと　鼠聲
麥わらと赤土たばねせなアくれ　兎圓
下女が癪藪から坊主呼んで來る　尾上
口紅がさつぱり池の茶屋ではけ　三交
柏餅あんをくじつて叱られる　紀鳥
傘の柄もりのやうに下手に成り　花丈
山伏へよな〳〵見廻ふ大天狗　左笠

第二十七編

夫鷄旦に朝へ翁參りて歌をうたひ笛を吹を國柄奏と云、こや裏の上下をやはらぐるの節會にや。爰に叟あり、和笛子と呼ぶ。よく歌のはしなる前句に高判の一の人を定め、二三よりする大尾迄の位有る人のこゝろをやはらぐるも古列による者ならし。ことしも年の始よりの點句をつゞめて二十七編の册となす言を奏す。

寛政九の暮に滿十の春櫻木に花を咲す

弓と矢の外も戌亥をおんまもり　松歌
もの丶具も身幅もふえて御凱陣　川鳥
船玉を住吉丸のなかへ置き　鳳頭
神國の德には孝のかずしれず　錦鳥
鏡山とほりすがいに寄たうた　如雀
横笛にすゞむしの舞ふ神樂堂　鱗至
平家をも月の名所の人が書き　窓梅
鉄打がつゞくと鳩は家根へ逃げ　鬼蔦
きついこと天ひつかりの放生會　狸聲

櫻町の院ごちそうやくは嫁　かてう
氏神も一人はしれた四天王　曙山
振袖へこうけんのつく男坂　錦鳥
御局が附き鳩のまたさせまうし　鼓音
野邊はみな亂筆になり時鳥　木印
雁つらをみだし柱箱へ嫁入れる　如雀
雛店へ昇殿をする能き買ひて　狐聲
食ごのみせぬと孝行しれぬとこ　柳雨
見出される迄はほっても嫁いはず　錦鳥

山ふたつ雪と月とで唐へしれ　孤雲
はる〳〵太儀と奥様およろこび　松歌
源平に咲いて貞女の名をのこし　里幟
しほ水がはねて紫しみが出來　山壽
浮艸へむだに深草かよひ詰め　三交
櫻色とはからにないほめことば　春駒
たのもしい矢立のなかへ櫻散り　鳳頭
松よりもさくらにちかき嫁の禮　儘成
高野山むかしかくした齒を納め　喜水
結んでも〳〵繻子じれつたい　山壽
爰にても御出なさいと次郎左衞門　喜水
ばらりッと汐干は人を蒔いた樣　竹二
古市で大和まはりへ疵を付け　かてう
針めどを二人前づつ嫁とほし　鈴和
高き家にのぼりて大工餅を投げ　儘成
せい計りとは母おやのおろか也　同
何事が出來たかかよふ里の母　喜水
美しい鬼が去られたあとへ來る　偶中
田舍町につくるが花の繁昌さ　木印
そのひどさ僧正壺のふたをする　如雀

また來ても老若男女二人あり　三交
御こたつを明て御登城召をかけ　糸柳
夜の烏時の烏とで名を上げる　窓梅
三日月のひかり蛙はおそれ入り　有幸
實のならぬ花から歌の種が出來　錦鳥
ぬれごとは雨よりほかにない女　有幸
雪の松一枝あをい名句なり　錦鳥
四たび目の風で牡丹の花は散り　萬仁
このしろの配膳をする屋敷守　窓梅
ごせめいた物さと妾おつこなし　木印
音に聞くつゞみを禮者打ちながめ　喜竹
上下で配るひじきはのしを付け　春町
御持佛で稲妻のする門徒宗　鳳頭
三つ蒲團孝不孝あるぬりまくら　東李
毛せんへ陣取をする嫁手がら　川鳥
愛相に嫁やぶいりに一首まけ　かてう
膳なかばあたらしい顔一寸見せ　志夕
琴よりも足を引くのを暮に呼び　是樂
星の名をふたつ覺えるすゞみ臺　一德
い丶息子内のおまんま計くひ　器水

糸を卷くやうに花嫁餅をくひ　儘成
よこの物だてにして嫁琴をやめ　窓梅
につこりと重い返事の封を切り　萬仁
高砂をうたふは堅い醉ひざまし　錦鳥
燒香は煙りをつまむように見え　有幸
母樣へまゐる封じめ麥でつけ　川鳥
かき立て隣の嫁を待つて居る　萬仁
安產をしらせながらに鍬を借り　偶中
新造も新酒も人のさめやすし　來二
新造になるまで三度名が替はり　同
得しれぬ女新道の店へ越し　孤雲
挽割を貰ふ虛無僧わらぢなり　萬仁
四斗樽の水月に二度能く賣れる　糸柳
湯を出して足を頂くはとうふや　春駒
入聟の相談からす猫が聞き　偶中
詩の出來る度に德利が輕く成り　狐聲
鑓先で取る給金は下座見なり　窓梅
我戀を人にしられる御祭禮　東李
上つてもいゝと格子での給はく　來二
端折るとき片足少しづつ持上げ　鬼蔦

蚊屋のこゑ鰹の邪魔をして通り　窓梅
孝行に乘れば靜かな四つ手駕　鳳頭
細見で見ても香車の場所は鑓　曙山
帆を上げるやうに首引負に成り　同
錦より篇をよろこぶ國の親　矢正
棒の手を馳走に見せる深代寺　錦鳥
齒にあたる肴を遣手嬉しがり　狐聲
はた持の名に八助はきついこと　矢正
柱からうまれたやつが餅を喰ひ　子誠
病上り此のとほりだと腕まくり　松曉
女房は留守臺所のにぎやかさ　鬼蔦
賬やかにすだれをおろす大中り　窓梅
大根の荒事をしたことも書き　同
湯氣のたつ顏を鏡へ嫁うつし　來二
春の夜は櫻があるで直が落ちず　錦鳥
年一つ寄つてよろこぶ四十三　一德
逆緣ながらと妹をのぞまれる　木印
目一ぱいお付けなせえに嫁困り　儘成
諏訪の池狐が馬をのせるなり　片岡
原よし原で見るやうに嫁よそひ　曙山

桐の木のもくで娘の年がしれ　喜水
流鏑馬の供辨當を萩で喰ひ　木印
三味線は琴より人がたんと逃げ　窓梅
お月さま見とほしだよと母異見　同
柄杓おつとり大名に付いて行き　鳳頭
足元を鞠場で見るは下卑ぬなり　孤雲
夜討の無人口取りやめかけ出る　春駒
異見聞くたもとに月の仕廻文　湖水
山吹は現金小菊掛けに成り　窓梅
返す書わすれた義理を伸上り　錦鳥
瓜田より不埒の出來る麥畠　狐聲
村持參顔までいつそはたけ也　同
けちな柿だと潮吹のまねをする　柳雨
ぼた餅にほうろくの入る十二日　鳳頭
前金に取るはず病氣よこねなり　姫小
仕廻部屋うゐてん〳〵の身の咄　志夕
物着星質を置きにく馬鹿なこと　かてう
そのもとみだれ御局が牛をもち　一德
あらおめでたゃめでたやと仲人賀し　かてう
廣さうな名で狹いのは乳母が池　一德

明ずの門へ少將は九十九夜　偶中
千代田からうつす千歳の御山號　名葉
千金を日ごとさづかる御神恩　矢正
筆道のほかにもねがふちから石　錦鳥
白妙のなかへ山鳥おりるなり　窓梅
三箇國金箔のつくうめの花　三朝
兄弟の花で夫婦の名を上げる　雨聲
神木の松風かよふ琴の町　東鳥
かうえきをせぬ市のたつ御立身　窓梅
菜計りは二把にたばねた物語り　曙山
元日の禮ねむくない人が出る　一德
書きてよりよみ人のすごい時鳥　如雀
八つ橋の元祖むらさき衣なり　水兒
芳禮と眞綿のあひに白く見え　萬仁
御謠ひがすむと暦も細字なり　竹二
冬の汁一字より二字ひんがよし　柳雨
ひんのよい藝者のならぶ十二段　志夕
鹽引きの中で鼓の市も立ち　矢正
工商の上の座に置く鑓と鎌　三交
くだものでいましめておく沓冠　窓梅

天下太平謠ひかとめかけきゝ　窓梅
琴の音をおつ片付けて嫁の禮　雨聲
白魚がはねると古歌が一首減り　曙山
雪月花かけたで嫁は負けにする　錦鳥
肩衣にばうしを見せて緣を組み　狐聲
島をおる所で切戸を聞いて行き　鳳頭
有りがたさ臥す猪の跡に高枕　かてう
南海と東海瑠璃の左右なり　竹二
齋日のあしたはきつとした群集　枡水
よい御手を財布へ入れる惜しい事　銀杏
神詠にこりて交えき船ばかり　かてう
かり物の内へは入れど手がら也　鳳頭
初子の日引きに行くとは面白し　芋洗
國家老五百匁付けて猫を捨て　川鳥
哉どめの名句狐の足をとめ　柳雨
左右には琴眞中はつゞみなり　かてう
御加增へ農具を持つた魚が來る　同
御院號おらもしらぬと花の山　三交
ぬれた桔梗へ山吹の花を出し　春駒
桃青が塚はしりから日があたり　如雀

七十匁不易にならぬうつくしさ　蘇竹
菊つくり帶に手紙を置きわすれ　川鳥
爪音に藪蚊を拂ひ〳〵聞き　鳳頭
入相をおつもりにする花の山　同
はま弓へ鴫居々々とこゑをかけ　川鳥
ほと丶ぎす口舌の腰を折て行き　霞朝
御てん山息子の連れに人だかり　鳳頭
はい水の陣をはつてるはなし龜　湖水
盆暮は女竹男竹の先手後手　志夕
着て見やと母は口から髭がはえ　東鳥
八朔の傾城は季のちがつたの　春駒
こわ色が聞たさきゞす嫁は彈き　かてう
糸道にはさみをかりる久しぶり　すゞめ
追込んだにほひ袋は蚊やりなり　鳳頭
合戰のときは周倉手明きなり　錦鳥
首ばかりよそ行きで居る俄雨　榮桂
夜つぴとい紅葉見るだと女房言ひ　儘成
能じよとはい丶女かとたはけ者　芋洗
どつこいどこい生捕つた暮の嫁　如雀
引當ては五兩と炬燵こしらへる　錦鳥

鮫が橋からだざらつく賣女出る　雨夕
涼臺みんな立たせてほたる逃げ　屋虹
孟宗が御袋は齒が丈ぶなり　如雀
ぬさ櫛を取る時二つ手をふるひ　儘成
牛の御前樣だとかけぬけるなり　如雀
竹箒立てると御供ばかかへり　東鳥
吉原の外聞になる意地を張り　五連
十團子詠めにならず喰へもせず　霞朝
蓼酢が宜らうと浴衣でふいて居る　偶中
名を呼んで置て行きやれは新しい　正德
船の出るのを饂飩屋へ觸て行き　里鳥
うつくしいはずあたひ三分なり　鱗至
氣の惡い名句を千代は蚊屋で言ひ　東水
正燈寺どうだといへばしれた事　狸聲
樹下の納涼團扇賣り紙帳賣り　柳雨
二度の團子で身代を粉にする　如雀
をとこの狂亂紅葉のえだをもち　把菊
重箱をまだ文も見ず明けて見る　鬼蔦
夜具の臺だれに見せても長持さ　無太郎
都鳥つッかけさうに猪牙は行き　鳳頭

はつ旅は灸もしたくの數に入り　片岡
うき船で篝火を焚く罪なこと　柳雨
行きたけの合はぬを親の嬉しがり　虎同
切艾二度の節句にあぶれたの　松歌
顔きずにして五百兩持參金　龜鳥
子雀をねらふ鼠のおそろしさ　柳雨
御所出だと云て石垣はやる也　川鳥
月雪ぢや學ぶが花ぢや學ばれず　里鳥
壁へくつ付て花嫁はしよるなり　春駒
煤掃の日までは顔を汚してる　窓梅
燒ほこり抔とぎえんをだます也　狐聲
異見言ひつくし母親手を合はせ　門柳
惚くさらかしにして置く內氣者　五連
高祖と項羽大さうなまはりくら　芹丈
引摺り起しませうかと張飛じれ　青好
おばアさんのさと娘は立かける　紀鳥
淺間の拔た跡かへと諏訪で聞き　雨聲
鵺よりも化鳥のおほい吉田町　ふくべ
一ッ睡のうちに髮結江戸へ着き　狐聲
ぬき足で折りに行くのは寐入花　片岡

麥ばたけ夕べころんだところ迄　鬼蔦
山伏のあたまへ相模灸をする　喜水
それ樣アでかく御座ると輕井澤　ふくべ
大日は眞岡普賢は緋ぢりめん　如雀
象は獸店からとしつたふり　狸疊
にくい事鷄のそら音をはかる也　錦鳥
三味線が有るで近所に三筋町　里幟
たからぶね鋸の刄の帆を上げる　鳳頭
肴屋にたひより目だつ二三本　川鳥
師匠への讒者机をしよはせられ　姫小
蕎麥好と見えて藪から坊主出る　蘇竹
磯草の蠟石となるあついこと　連雅
桐の木をげほうに見せる御不勝手　喜水
驅ける內計りは上がるけちな凧　窓梅
若衆から野郎の錢を師匠取り　柳雨
山を見て來やとむいてる瓜の皮　春駒
柴垣へつないで笛をひつととめ　鳳頭
朝歸り女房は鐘を出たごとし　錦鳥
雉子計り世話のやけない桃太郎　すゞめ
灸てんのとびいろになる金太郎　友呼

きつとした辻番草履買つてはき　柳雨
手の平へ底豆を出す角兵衞獅子　すゞめ
瓢たんや山から里へこひで出る　東鳥
頭ねつ足寒で四つ手は一分取り　かてう
ちんこへ火跳ると鑄掛おどす也　雨夕
鼻息を考へめかけねだるなり　三交
天地の出合ひ楊貴妃織女なり　鳳頭
花の山石にもたへぬ人だかり　一德
紅白で男女のしれるのがけ道　窓梅
ひつそりと神酒を備へる師匠樣　丸龍
羽子のこの二つ三つ出るいゝ飾　窓梅
筑紫から一度師匠へ御かよひ　三交
坂に押す車のやすむ御ゑん日　狐聲
川中で團扇でさます小豆粥　川鳥
繼母の讒言てうしの月見なり　名葉
十二文串髮へさす初卯の日　門柳
惡方の出しさうな見世切り艾　霞朝
こんどから一人で來なの面白さ　かてう
木か枝か葉か覇王樹はしれぬ也　丸龍
杉の葉の中からせなア踉け出る　隣狸

下卑た風鈴ゆげの立つ上で鳴り　蘇竹
德向の女房あたまを筆でかき　川鳥
髮ゆひは年の寄るほど締りかね　窓梅
しのぶともいふべき所に蛸の足　莚雪
佛御前はけころかとむごいやつ　狸聲
氣のつよい女髮ゆひ床で聞き　有峨
唐櫛にひらめののこる煮賣みせ　鞠志
おきやアがれ馴染んで見れば泣上戸　花丈
みんな鈴ふり立てゝ見る神樂堂　如雀
僧正をおくり溜め小便をする　姫小
ふとしきは豐島に立てる宮柱　名葉
病上りある夜女房にしかられる　丸水
鍋の數かぶつて顏に火がもえる　姫小
さぞおくたびれと殿樣遠まはし　かてう
春三は花夏六には實を上る　辨八
空にしられぬは五町の雪あかり　丸水
賬やかな三夕とうろ月見なり　窓梅
二分有やなしやと地下の角田川　ふくべ
松の木の化けたを謠めでたがり　窓梅
年禮にかむろは腕がぬけるやう　錦鳥

けいせいの涙で內のくらが漏り　器水
森の日を目當三廻り待合はせ　矢正
寶船出家さぶらひ諸あきんど　美德
慾どしい奴が福茶に寢付けえず　和谷
色白なやつと連れだつ願解き　矢正
當分は汲人のおほいはねつるべ　野暮
鉢うゑの松の木を出すいたい事　糸柳
なみ〳〵と無筆の入れる硯水　亭々
三笠山晒し搗てる人に聞き　東李
それのいた〳〵と嫁の前へ出し　春駒
元服に異見も交せてほめるなり　錦鳥
竹の子は孝行栗は不幸なり　同
大ゆかを明けてまつてる里の雛　窓梅
孝行はかぢつた臑をさすつてる　姫小
角物を琴柱につかふ材木屋　かてう
がんじやうな織姫を見る野掛道　如雀
はまぐりが三升來たと嫁ふくれ　川鳥
とや切らんかくや切らんと佛掌芋　來二
のろ〳〵としては居られぬ丑の月　かてう
こくせうになぞとほしがる御留川　喜水

かる燒ほどに帆の見える麗かさ　來二
吉原は重三茂兵衞は丸の內　春駒
たばこ盆から嬉しのは見付出し　鳳頭
しかられる側にしなびた唐の芋　柳雨
大釜の月代近所鳴りわたり　志夕
狢めらなぞと女房は寄せ付けず　錦鳥
師匠さまなまこの表替をする　狐聲
薺賣りせなア突合ひせないやつ　如雀
そばがきへおろしを交ぜる輕井澤　木印
伊勢からも大小便の世話をやき　偶中
手入らずの芋を貰つて年を取り　錦鳥
しんぼうを母が見るので聟がもめ　かてう
賴政もあやめ抱くとは露しらず　三交
父見世に居ますにこまる朝歸り　狐聲
ぬかぬ太刀とは藤川でいひ始め　鳳頭
草ざうし見料によめ鶴を折り　錦鳥
春の野をせり賣りに出る櫻艸　如雀
夜具の損料で三分がものはあり　狐聲
若衆が坊主をしめたのは橋の上　高山
上の句は主お讀なんしともてる　春駒

糀の中に升屋とはきついこと　玉章
恥かしさ嫁しんの無い帶をしめ　柳雨
もし降らば芝居にしなと重へ詰め　門柳
しんがりを下戸が集める花の山　里幟
通俗の釣看ばんを目醫者出し　春駒
雛の菓子五臟六腑のように詰め　一鷺
袷をばかつをがために縛せられ　松歌
精進のなまこを鉢へ植ゑて置き　木印
火鉢へも白箸をうつ料理茶屋　かてう
鮒をなめさせて肴屋寄り付かず　三交
鏡へうつる乳もらひを呼び返し　門柳
恥かしさ時候にもれた雛を出し　窓梅
鶴と龜とで蒲鉾をこしらへる　門柳
板じめを片袖見せるうらゝかさ　糸柳
門口へ師匠額堂ほどならべ　かてう
來る年も御講に目だつ緣どほさ　鳳頭
奥樣はなしとさすがの草履取り　狸疊
神酒の名にいゝは木綿や七つ梅　里幟
てふ〳〵の生醉嬲るのどやかさ　松歌
仕立屋のでつち茶丸の棒を喰ひ　錦鳥

花咲かせばゝアはつらが憎い也　孤雲
ほゝづきの音さと禿屁をかくし　柳雨
景物にすると四つ目を買て居　姫小
藥研堀から來た乳母の自墮落さ　かてう
境内のさくらにむすこ用はなし　有峨
たいこ持狆のぜげんで二分儲け　三朝
梅の花折つてかゝへを叩かれる　窓梅
つれ〴〵に有る筈の無い大根也　蘇竹
身ぶるひに花のこぼるゝ裸牛　木印
けつこうな春と暮春に嫁はのべ　埋草
我家の客わんでくふ里がへり　川鳥
高つきで首ばかり見える母の雛　春駒
時鳥一ばん鑓をうつて來る　喜水
十三と十五のあひで菊を脊負ひ　竹二
屋敷春寺は二十ヂの秋を見せ　如雀
花のかたきを雪で打つ本望さ　錦鳥
土佐坊は月でも頼むほどに書き　春駒
そりや狼煙だと落ちた物拾てく　くつわ
まだだめかなどと膏藥篦をふき　姫小
人おなじからず花火の中を猪牙

かへりには世帶を仕廻ふ筏乘り　狐聲
すは鎌倉の大事ぞと仲人來る　錦鳥
印籠を見せ〴〵下の關をほめ　竹二
初鰹下女は目で見て鼻でかぎ　千慮
白雨に五六俵賣る春米屋　狐聲
客が奴にされさうな江戸の張り　孤雲
熊坂の足へとまつてみいんみん　古柳
玉子とぢの鹽辛木曾で喰はせ　湖水
猫にかづける木娘の爪のあと　姫小
かのらしい奴が付き後家堀の内　柳雨
せき込んで奴の尻へ突き當り　片岡
御建立橋は津島と玉津島　かてう
汐と諸共に御次へばゝア引き　春駒
日本へ唐のむすめが矢の使ひ　鳳頭
御はうびののちは不用な緋の袴　錦鳥
田樂の御庭で出來るのどやかさ　三枝
人和にしかずと興風一首よみ　孤雲
夫婦別有り牛を牽き機を織り　松歌
兼好の入るは風雅な四天王　如雀
御小僧と雛とくらべる奥御殿　川鳥

たばこ盆畔へ火繩をよけさせる　かてう
孝行の德は竹まで名がたかし　川鳥
白なみにおどろき千鳥音を發し　かてう
押賣の佛比丘尼が二人出來　雨聲
呼戻す御番つゞらにたから船　柳雨
五分程もやッとよごれる嫁の箸　儘成
歌がるた嫁取つたのに下女探し　糸柳
もつれ糸嫁へ渡して目をこすり　竹二
はら帶を地藏の御月番にしめ　三枝
むらさき帽子口紅粉をうばふ也　門柳
薈女の金手を握つては言延ばし　姫小
寢所に分地の出來るけちなばん　窓梅
新世帶となりではもう椀のおと　狐聲
雪は解けるに女房は未だ解けず　窓梅
切落しむかひは首をたづねてる　東李
狆ころを帶ひろとけてすてに出る　同
請腰で女房のねれる神樂堂　同
梅の木を後家はふさ〴〵しく下げる　同
御縁日下向にひなを嫁そゝり　竹二
山形は蛙の聲をとほく聞き　矢正

一ト粒の豆をいのちと風車　風化
のがけの先達火繩をふつて來る　如雀
安玄關かご字磐若ならべとく　錦鳥
地人のまづさ人參の鉛なり　如雀
叩かれるきせる禿はみがいてる　左櫻
あくたもくたも后だの婆ァだの　窓梅
縫箔屋廻しへ人が寄りたかり　錦鳥
源左衞門酒だとてうしもらふ所　窓梅
寢所の相談をして餅を置き　千慮
喜三太は内へ呼び込む猿廻し　喜水
切餅を宗旨ちがひの樽へ詰め　狐聲
越後から羽根のはえてる獅子が出る　片岡
穴かしこ御堂一盃尻だらけ　和國
疊しくじよごんのおほい十三日　同
仲人がひらくと花も開くなり　錦鳥
梅の歌冠かたむけ聞いて居る　高山
梅の花武道で一度名を上げる　錦鳥
山ざくら都の人にやどをかし　名葉
鐙まで御袖のとゞくしほらしさ　川鳥
花の外小倉へ秋の御神詠　古柳

御先祖は手取尊體能書なり　錦鳥
鞭を目出たく二十五人召し　矢正
年號のほまれ寶と大伽藍　春駒
只も行かれぬが不沙汰の成始め　同
糸道のなくなるほどに世帶じみ　すゞめ
四五年の口をはたいて傘を借り　鬼蔦
四年たつても漏を置く不孝者　春駒
濡事の二度目は那智の瀧を受け　銀杏
机より矢立はけちな玄關なり　榮桂
さげ籠のふたにして行く肴臺　鳳頭
駒の頭へ手をかけて水ようし　矢正
燒繼の御出入が出來下女不首尾　鬼蔦
摺鉢の鳴るは小まめな一人者　山壽
きすり人の來るをまち下女柏餅　柳雨
うなぎ賣女房をなぶり〳〵賣り　稻里
左樣では逆と奥樣おいやがり　窓梅
梅が香を土産にする御祭禮　三枝
神樂から稻妻のする金屏風　左櫻
ひんのいゝその日暮しは花の幕　窓梅
鉄打の麓にならぶうらゝかさ　鬼蔦

飛梅の愛宕から來る御緣日　埋草
太平の陣屋の上をほとゝぎす　鳳頭
鶯のころに子の日の手がゆるみ　芋洗
能く咲いた根本で銀のけむり立　稻里
折つたのは三河しよつたは芥川　春駒
まな板を打つまで達磨琴を聞き　鳳頭
御延引えいやらやつと日が暮れる　柳雨
花のちる度かはらけはそれる也　卜長
座敷中嫁のはびこる暑いこと　かてう
賑やかさたはしで鯉を洗ふなり　春駒
龍宮へ行くとなんぞか角ぞくれる　三交
眞中にしようと息子大がかり　錦鳥
白魚の火もそのころは物すごし　同
越後から雪のはだへを嫁は見せ　稻里
六片ずりの女郎だけうつくしい　春駒
賣切つて日向をかへる櫻草　三交
手拭はぼうしを除て畔を行き　東李
新場から安針町へ鳩はとび　竹二
身に成ぬやうだと下戸の辛子味噌　素人
村の弟子げッそりとへる拔參り　松歌

曆をも尻から明ける鬧しさ　儘成
功成り名とげて櫻ひんぬかれ　曙山
撫牛の夢は敷きぞめ苦勞なり　三朝
掘れば竹埋ようとすりや釜が出る　柳雨
もみぢにも松のくらゐは二本限り　三交
もみぢから息子と聟の中は絶え　窓梅
いゝほやう片袖留るのがけ道　松歌
中ぬきはふられた客が穿て行き　糸柳
鳳凰もむしろへ下りて箸を取り　矢正
ぼた餅の相談もちをつく時分　狐聲
雪ふり風間おもひ出すどらが事　和國
柿の木の賣買丸い金でする　隣狸
下戸の禮氷た芋をぐつとぬき　柳雨
腹とあたまの頭ぬけなは寶船　芋洗
逆桐をやるのは母のはかりごと　窓梅
通言はおやぢの耳に逆ふなり　曙山
暮の嫁かけ取ばかりほめて行き　器水
廻文の手に葉の中を鶴は舞ひ　竹二
御大ろく着かへる所に一構へ　窓梅
松がえのとなりへからむ町の春　錦鳥

あら玉に愛敬のある藝者來る　春駒
二聲ときかぬは梅にほとゝぎす　東鳥
八重の櫻は人麿の御世話なし　松歌
わた入の十二ひとへを雛は召し　窓梅
ほの〴〵の卷添に逢ふ花の留守　春駒
永日の時を期さぬはのむ禮者　かてう
にぎやかさ鹽鰹にて目に青葉　窓梅
奥表やかましいはず桐紫檀　喜水
上下の罔兩毬をもつて逃げ　かてう
夜ぞ更けにけりと下の句嫁仕廻　片岡
今踏んだ雲で三島の雨やどり　芋洗
繪雙紙を嫁と娘がまたせとく　柳雨
三會目心あまりて夜が足らず　松歌
琴最中へ人間と傘が落ち　三交
日に燒けた嫁褒られる宇治の里　芋洗
段かつら空を見い〳〵突當り　窓梅
晝まはよる見た不二へ神酒を上げ　錦鳥
ひんのよい世渡り椎の實を拾ひ　三交
山門へのぼつた汗を帆でぬぐひ　川鳥
晝啼くくと時鳥をものせぬ所　窓梅

まんぢうは鶴で茶飯は龜で喰ひ　三交
御てん山銀の扇に帆がうつり　錦鳥
海棠とさくら詩歌の花見なり　鳳頭
金屏風ぬし有る所をしらぬなり　錦鳥
づぶぬれに成つてげん氣な時鳥　儘成
百へ入れたのは藪きり抔でなし　柳雨
家根船のもく禮水馬しらぬ振り　矢正
十七で稻をはらませ名をのこし　かてう
草臥れた方から碪わらひ出し　錦鳥
袖の上から取たのはこはくなし　春駒
細引のたらぬは嫁の手がらなり　窓梅
花ざかり旅立をするさらし賣り　名葉
金杉の寅で息子は喧を吹き　東鳥
來ぬ人は花と風との間に見え　里鳥
くわく翼も魚鱗も今は臺にのせ　門柳
桐に實の矢鱈出來るおめでたさ　鱗至
柏木と蓮生めかけ大手がら　里鳥
見臺をのけおまくらをさせ申し　門柳
上品な符帳を付ける花の山　初春
紫を着てから内で年を取り　紀鳥

東帶へちひさく建てる金屏風　狸疊
御晝休で居つゞけをほつ立てる　孤雲
むらさきの暖簾をかける御祭禮　三朝
十五夜にふくべを切つて大騷ぎ　如雀
桐の木へ妾は爪がたゝぬなり　三交
一日は清涼殿のむすめ守護　無太郎
ゆびへ紙卷くは保養の琴の爪　狸聲
望まれて延した爪はひんがよし　春駒
花嫁ははたらく事にことをかき　曙山
しやんと着換て花嫁は内に居る　龜鳥
ほとゝぎす手桶の箍のはねる音　丸龍
名代は袖から先へすわるなり　ふくべ
六角な火を兩方へとぼすなり　虎同
科の次第を言立てふつり切り　如雀
年一つ藝子四五年かゝるなり　丸水
逢ふ事の絶えて難儀な坊主持ち　片岡
島臺を女房に脊負はせ笛を吹き　矢正
耳は馬つらはかはづで母こまり　川鳥
片身こそ今はあだなれ安かつを　三交
字餘りの鰹は伊勢屋喰はぬなり　狸聲

はしり大黑を布袋はくやしがり　川鳥
つら〳〵惟みれば圍ふのも損　三交
暮らし能く成つたは安い不如歸　如雀
矢を拾つては木枕へ立てゝ出し　三交
行當りばつたりといふ下手の鞠　姫小
桶伏せのあたまで這入る市二日　無太郎
二十二三の子のしりも母ぬぐひ　如雀
豐後ぶし湯屋で語るはきつい事　榮桂
夜着をとん出し股引を語るなり　三交
いゝ米屋よだれたらしが五六疋　東水
にはかあめ添乳に亭主遣はれる　松歌
どこぞへ落たらうと蚊屋疊んでる　錦鳥
盆前のはらひは鼻であひしらひ　如雀
まういくつあがると雜煮聞合せ　五連
長くした首を縮める上はざうり　一德
廿日すぎ蜆を買つてしかられる　ふくべ
乳母が鬼のろり〳〵と隱れんぼ　鞠枝
路次のかゝァを押分けて油賣り　亭々
東西々々にけちな子もちなり　千鶴
死は安く生はかたしは藪醫なり　狐聲

鎌倉の松にふぐりのない御寺　狐聲
かぶき見ながら人形の面しろさ　吉川
居ずまひのわるいも女罪に成り　歌遊
てゝら一布も集に入り品がよし　東李

第二十八編

幸紅花荷のつてに申送り候。殘暑之刻彌、其御地御店御はんたのよし賀し候。このかたむや〳〵の關のさゝはりなく年々風雅行はれ、最上川のぼればくだす笛曳の點取に、象潟のうらみこひなき評は、かの藤の中將のたづね給ひし、あこやの松に木がくれなく候。ことしも道野邊の清水流るゝ柳樽、櫻木に御のぼせと存候。御かへしに早々御越のほどねぎそろ以上。

扶桑に此道の盛んなるをしらさんと、遠く羽陽の好人よりのふみを其儘二十八册めの糸口とし、はたかの地の連句を編のむすびとなすことを、菅裏がいふ。

ゆたかなるまつりごとをうく　十あまりひとつの年月の最中

有難さたまさか井戸で鮎を汲み　雨譚
千金を入れ萬年へれいまゐり　三交

まことめいてうと萬歳下に居る　雨夕
正月にいゝ御領地は二本松　一德

後京極源氏にもれたむしを聞き　雨譚
中ほどへ定家女郎屋ほどならべ　松歌
しのぎの百本も出來る笠を召し　雨譚
奥樣の御ぐしにとんび烏なし　かてう
袖かき合はせてまた來春とたち　雨譚
玉の水枡ではかつてわけるなり　志夕
門松のひつじ穂じぶん嫁のれい　交調
花のまく毛虫一つで座がくづれ　有幸
富士筑波左右に江戸の渡りぞめ　壽々女
文武のあまやどり資朝持資　雨譚
源平にさき分ける夜の恥かしさ　交調
公家の子といふが一年立つてしれ　孤雲
よる年を詫のてに葉に遣はれる　壽々女
寢るたゞび家内へよめも暇ごひ　和國
七つ目の繪でお妾のとしがしれ　素調
百へ入れたのは雀にならぬうち　柳雨
山々の眞ッ青になるほとゝぎす　湖水
籠まりの屏風へうつるいゝ棧敷　春駒
吉野丸すひものが出て船がちり　鳳頭
新宅のはしらに冬のしみるおと　名葉

花嫁のてぎは秋の田苅るごとし　雨夕
持つた嫁けふは藤だの桔梗だの　三交
庖丁をはすにつかはぬ京のなつ　鳳頭
蒼荒を焚かぬ日鍾馗立てるなり　同
藝者のまどに松虫のはしりなり　陳々
新錢座鶴とほうわうしりくらべ　虹朝
榎でもいけぬとよめは松で切り　萬仁
夜やさむし衣やうすしにごり酒　虎同
留守番へめしのありかと水滸傳　春駒
酢はこゝにあるよと夜伽替り合　名葉
きうくつな物見垣根へ窓を付け　三交
鳥追は琴に合はせて彈き歩行き　鳳頭
十五からもう身を入れて嬲れる　霞朝
淺黄より白むく遣り人きらふ也　かてう
繪心のないは寐て居るくすり取　狸疊
たゝみ替丁稚は足をねめられる　有幸
べつ甲はどちらのみちに女もの　ふくべ
牡丹餅ぐるみしてやつた口閉ぎ　かてう
牛若と名付てつぼね秘藏する　陳々
雁をいたその矢で化鳥射て落し　同

二箇國の潤ほひになるいゝ花火　名葉
道行きでいッち太儀は長右衞門　魚角
中元の祝儀大部屋かへと下女　かてう
美しさはだかで舟をぢさんなり　姫小
口からなんぞ出るやうに嫁笑ひ　柳雨
傾城の簞笥なんぞか有りはあり　同
唐木綿妾のはゞもひろくなり　石斧
折鶴と羽子の子に嫁いきを出し　芹丈
半さんあがれとは嫁にきん句なり　東里
金屏風よめの自筆でかりにやり　かてう
梅の花だんべいといはせる積り　松歌
ほころびは引ぱり梅は丸くよみ　同
世間の嫁は手利きだの柔和だの　同
三味線を牛の引つぱる賑やかさ　糸柳
竹縁へどろをかけてるいゝ普請　雨譚
これは種々御ていねいと俵藤太　同
大人を見るに利ありはいゝ天氣　同
そんならいゝはさと關寺の所化衆　同
はん臺の雪打はらひ直き出來る　同
なぜきうくつに寐なんすえ畜生め　雨譚

茶ほうじへ姫のりと書き下げて置き　雨夕
あんころの催促ごみが致しましよ　有幸
ちつとづつ出る太股にけつまづき　糸柳
小便をたれ〳〵猿はうすを挽き　龜水
やす助言けつから金を食はせろ　同
二日出の猪牙船宿のたからぶね　鳳頭
ぬか袋明けずにおきやと母の聲　芋洗
秋冷がつのつてけちな鹽さんま　志夕
茶を出して女房火入へ手をかざし　川鳥
けちなばん八疊敷にたぬき寐る　平口
宵はまち佗び夜中には腹がへり　姫小
小便にひきまどへ出る高瀬乘り　風化
痳病の藥時ならざるをする　柳雨
またふつたらう雷電に九紋龍　春駒
子を愛す顔は物ぐるはしく見え　尾上
にぎ〳〵をしてぬか袋嫁こぼし　儘成
まづきりを植ゑ雛市へ亭主行き　蘇竹
山形をあきだなにする嫁を取り　糸柳
反古張りや似つらで螢追つ懸る　川鳥
相違あらざる自筆さと御殿持ち　曙山

見なさらばいやよと豆を嫁包み　五鳥
母くらうゆふべも梅が三つへり　川鳥
目明き千人まつて居る古本屋　和國
花鳥風までは異見で置きたれど　宜明
晦日にはきッと入るよと鍵を選り　一德
花相おなじまつのうちと名月　雨譚
やくどしの三年前にめがね買ひ　丸龍
およしなんしと張肘で振りもぎる　百馬
八つ山おろしはぜを止させて飯　雨譚
たうの助六韓信をくゞらせる　百馬
喰つみの海老賣店にのこつてる　狸汁
坂を上ると井戸綱やはまつなや　美德
新道のあたりから出るしら拍子　萬二
しりもまがらぬを品川十夕　雨譚
夜道には先箱に成るけちな醫者　護畔
蕓くづにして行くけちな雨舍り　すゞめ
池の茶屋玉にきずなは惣がうか　矢正
下卑たがき餅屋の前でつるさがり　錦鳥
ふてた下女炭消壺にもたれてる　白花
ものわすれするなと梅へ御神詠　谷秀

上野から見れば寶の山ふたつ　すゞめ
元日はゆめとはたきに用はなし　不醉
あどけない名札の見える日本橋　龜水
御祭禮よめのしん客一ト御殿　かてう
奥家老かみは時行のいさ葉なり　龜水
藝者一組米で來るのどやかさ　雨譚
むらさきの鯉はにごらぬ橋の下　不醉
金の字が付くと屏風も借られる　一德
闘しさ根のない松を二本うゑ　糸柳
多辯な武士をとッしめる國家老　文集
しやうのうの匂袋をよめこさへ　一德
交肴ほどにならべる御師の狀　交調
春永といふが油斷のはじめなり　名葉
糸道は御藏のあひをながれ込み　龜水
さア御時宜々々々と乳を引放し　芋洗
人のおもて白々と加賀者する　雨譚
裕衣着て出しなに筆の軸を切り　里笑
御むしぼし達磨のそばに古今集　虻内
めかれせぬとは品のいゝ花見なり　桝水
たましひを入れに玉主へ御出生　かてう

味方見ぐるしいも定家一首入れ　門柳
のりかへすときは一盃月がさし　孤雲
山のこしどこかへこして漕戻し　錦鳥
雲井にまがふ白波ははかまなり　喜水
法眼をいたみ入らせる仕合せさ　雨聲
金銀の風さくらよりにほふなり　如雀
幕はよしかなと屏風を出しに行き　狐聲
相馬公家小松菜などを引きに出る　錦鳥
卯の月は寢て卯月にはたち給ふ　一德
なた豆のやうな桐油を弓にきせ　如雀
ひんのよい大食四人一座なり　同
色品もなく龜井戸のかぐら堂　同
いろも酒もすきだが鰹はきらひ　松歌
下戸のさかづき生醉助言する　糸柳
物がたり疵のない夜の月で書き　門柳
子規不二のすがほを見てかへり　榮桂
松風へ横笛ひんのいゝしのび　かてう
舊都の名歌八重ざくら山ざくら　湖水
山ざくらよみ人しらぬ者はなし　狸疊
旅をしぞ思はず廻るかきつばた　曙山

雨夕　あめには烏帽子狩衣は月に遣り
かてう　空色を見合はせてぬぐ花のあめ
名葉　かんにんの折紙今に直が落ちず
不醉　せんをかうやうに吉野は堀へ着き
春駒　さア牛も休みやと機を下り給ひ
桝水　そこのきたまへ人々よ嫁の出端
春駒　山吹を出して實のある遊びなり
三枝　七月の節句にやつと窓を出し
春駒　座敷牢出したさに母はなし烏
偶中　塗樽をふくべのよけるのがけ道
柳雨　喰ひかけの芋忠盛へくださるゝ
竹二　唐のいくさに音曲がふたつ出る
雨譚　極彩色の大津繪をくれに呼び
一德　貰つたり預けたりするいゝ天氣
三交　えり紙を吹きちる中で高いびき
喜水　九十匁を奴にする日にぎやかさ
木印　駒下駄いさみを付ける櫻なり
如雀　餘所で着る夜具を息子は仕立させ
錦鳥　箸紙が出來たで息子くらひこみ
同　唐草のかしはあんには息子なり

ひよッ子が二羽つく籠の烏三分　蘇竹
二十八歳で人げんかいへ出る　鳳頭
お職から遣手は嫁へ引合はせ　三交
佛ともしらず一兩二分で置き　同
追つかける方が密柑の皮をもち　芹丈
はだか嫁もつとも豐後名取り也　鳳頭
ぼた餅も里でくふのは角があり　霞朝
くれに取る御闘びつこか一眼か　雨夕
けちな晩御免なんしがだらに來る　川鳥
日陰の豆のはぢけたへ四火を据　同
門禮に烏追ひまがり形にひき　春駒
おとなしい息子俄にどちになり　錦鳥
目藥と鼻のあたりへ書いて置き　雨夕
俄雨四つ手にのつて出來ごころ　錦鳥
手拭を鍔にして居る御手まはり　一德
煮たまゝで女房つき出す鯲汁　かてう
素一分はともに消えなん雪の朝　三交
灸點を胡粉でおろすくろんばう　梅子
知りもせぬ醫者を呼込む卒中坊　十口
太平のかゞりはしぐれ初がすみ　魚好

にぎやかさたからの山の花ざかり　竹
白鳥の山田へ下りる夏と秋　鳳頭
春左近夏は右近がにほふなり　三交
御虫干あと四五枚いてふの葉　同
奥樣は正風ていの御むつごと　芹丈
品のいゝ遊び手で取り鼻で利き　鳳頭
白いたつにして桐の下駄に非ず　霞朝
御忍びは鈴の鳴る場へ蜘が下り　雨夕
月がけは弓張り鳥は矢のごとし　川鳥
ほとゝぎすぐッと末座で一人聞　同
金銀のあふぎをつかふ瑠璃の山　春駒
不二山は武鑑で見ても一つなり　錦鳥
わが庵で見れば左右は月と花　雨夕
清水で飛ぶとぶたれる花の山　錦鳥
山櫻詩でほめられる花でなし　一德
見聞する物にてに葉を翁つけ　かてう
當もなく三條通りをおぶひ出し　三交
花よめにさしつめのぞむ後の月　梅子
嫁姑流義を名のるひんのよさ　十口
名物の二つで宇治は夜をねせず　魚好

うつくしい捨物のある三保の松　喜水
涙の手しほむらさきの實ばえ也　芋洗
未來記の仕舞いろはを譽めて置　雨譚
夕顏を御はうしやと云樣な公家　延年
笠木からづぶにあびせる久ぶり　雨譚
車引むすめをひとり譽なくし　柳雨
にはとりを握り拳で呼んで居る　芋洗
山歸來まづかさばつたくすり也　同
戸守に母の來て居るたびの留守　かてう
退屈なもんだとかたひ川づかへ　同
ついぞ着ぬ物を大名箱へ入れ　孤雲
目に青葉切りで句のなき京の夏　ふくべ
六十のうちにむしけら五六疋　三交
お妾のゆびははだかで動くなり　儘成
扇箱はづかしくないはらひ物　孤雲
隣からもどつて雛をせつくなり　枡水
座頭より返事拜聞いたし候　孤雲
野がけ道畔を讓つて火を借りる　陳々
多葉粉入ほめて娘は帶へあて　柳雨
かき餅を嫁川上め明きへつめ　錦鳥

玄米女色おふくろへ二人ぶち　儘成
しかられる手引座頭の足を拭き　孤雲
御饗應春の日ながくまだ暮れず　春駒
御本坊雛をかざつて見たいとこ　志夕
ひるがほの花は式部が筆にもれ　ふくべ
蛤をつむところ九條あたりなり　孤雲
はづむのは姉うなるのは弟なり　春駒
錠前にかぶろ三つ四つ口をまげ　儘成
ついてゆく母も一段聞きおぼえ　古柳
宿さがり芝居の夢がさめたやう　志夕
しれぬはず番町樣とばかり書き　喜水
檢校の庭は女房のさし圖なり　古柳
二三疋きつねを午に買つて來る　柳雨
べつ甲はどちらの道に女もの　ふくべ
下屋鋪垣根をひたし物にする　かてう
うろたへて並べる將棊負けた奴　友呼
樽酒であるのに內儀出す氣なし　同
歌がるた人傳ならで下女取れず　川鳥
品のいゝふんぬきをする花の朝　鳳頭
舞の手も珠數と替りし嵯峨の奥　柳雨

鼻紙をおッこちさうに嫁は入れ　儘成
せつ羽詰つて金きせの嫁を呼び　古柳
鬼の留守せんたく嫁の水調子　志夕
嫁の顏數首に見えるころに逢ひ　霞朝
花の散るたんびに見える白いもの　友呼
雪の立居にもえ出る緋縮緬　蘇竹
むだな事初會にちッと上げやせう　かてう
ばゝァの顏も三度來りや笑ふなり　姫小
大文字を雜巾で書く十三日　鳳頭
義太夫の本ふん付けたやうに書き　友呼
かけ向ひ尻をまくつて產の世話　鳳頭
大ひきずりの女房はひのえうし　同
藪入をのせてさんまを買つて居る　枡水
生醉はつぶれる時に見世を出し　孤雲
いざ寄つてあたり給へや亭主留守　柳雨
丸山の女郎和漢のあぢをしり　陳々
御はうびの名は隱れなき簑と笠　名葉
御旅行は音に聞えた御出立　三交
御立身拍子木までも加增する　萬仁
內心もぼさつで書いた物がたり　芹丈

有明もたゞ有明も名歌なり　柳枝
出遣ひのやうにして行く十五日　鳳頭
八景を一つ抱きこむ源三位　同
紙びなは雨具をめした立すがた　志夕
おく樣は正風ていのおむつごと　芹丈
亂れて今朝は御機嫌とおぐし上げ　蘇竹
石で手を詰めたは綱がはじめ也　鳳頭
柳櫻をこき交せて母しかり　霞朝
おめかけは二世と三世の間の物　同
一トまくを內所ではなす御代參　かてう
ふさ楊枝橫にうごかす耻かしさ　儘成
取ればとるのを愛相に嫁とらず　陳々
手や足を葉へさしとくいゝ日和　素調
連彈きは色氣付いたが笑ひ出し　枡水
歌はなし石屋がするは辭世なり　丸龍
風呂敷の高低になるおくり膳　すゞめ
板のふくろをかぶせとく御定杭　丸龍
米のぬけがらを疊屋搗いて居る　門柳
花咲かせぢゝイが來たと新造いひ　竹二
芋見ざる間にかしらを量りこみ　松歌

よわさうな周倉五月はじめ來る　春駒
秋の野すつたる借着して女房出る　丸龍
お釜のはく〳〵にならないは慈童　雨譚
伊勢屋の生醉酒だかかつをだか　護畔
逃げた跡仕内がみんな分るなり　喜水
そこだよと言れて下女も一首取り　糸柳
山越につん逃げべいと輕井澤　狸疊
獅子の下あごで家根船飯を焚き　龜水
花魁樣はどうぢやなと淺ぎ洒落　竹馬
首ばかりするのは安い入替はり　春駒
むしかれひ天秤棒が太過ぎる　龜水
唐茄子を入れたで平が安く見え　雨夕
黑鯛をからしで旅の留守に喰ひ　霞朝
ゑんまの日調市二百と帳に付け　三交
お門違ひさとそろ〳〵出來懸り　譚雅
路次口の笑ひ齒入が出して居る　すゞめ
おしづまつての御祭も金屏風　孤雲
ひげなでて來たは大きなこけ衣　不醉
木の動く度よみがへる暑氣見舞　かてう
との子が目つき眞中の子は三分　三朝

鹿島樣おあきなさるとばゝァなり　玉章
かしらをば大家へつかふ料理人　矢正
村の花嫁びやう打のくらで來る　不醉
封のまゝ居つゞけにある母の文　矢正
村わたし二さを庄屋もどさせる　玉章
股引で角町河岸へあがるなり　雨夕
さァきめろ〳〵と隅田の七つ過ぎ　芹丈
色けない紅葉こんにやく土產なり　玉章
京の廻廊へ江戸ものどさらおち　枡水
たすきがけの口上味噌こしで來る　狸汁
後生だとくどかれお竹こまるなり　錦鳥
棒組いはく如才はねい旦那だよ　延年
まう取つて下さるなよと母はうけ　同
まさかの時にしちにおく鎧なり　同
瓦燒く釜はぶざまな口を明け　龜水
ゑんどう豆は飛色にはせて居る　虻内
いろは茶屋ぞくを引くには骨が折れ　同
お妾の樣にや奥樣もちやがらず　同
芝居をかづけてむかしは女郎買　虻内
廿五は欲心のない手を合はせ　鳳頭

夕立は帳にくはしいごふく店　平喜
供のからかさで娘のうちが知れ　鼠聲
八つの耳ふり立てかへる手習子　窓梅
一つ身を後ろで合すやかましさ　鳳頭
碁の客が來ぬでしッかり押がきゝ　三交
御詠歌に出るはかゝァのすがれ也　長故
みかきよしの衝立に鍔掛けて置き　雨夕
年玉のやうに辨慶投げてやり　交調
のびをした木魚をつるす興福寺　丸龍
うつくしいきつね男のまげを切り　龜水
十二銅宛の喰ひつみ湯屋は出し　かてう
豕の居る所と外科殿ををしへ　雨譚
評判の俵としやれるにはか雨　同
月花で二度はづかしいのは娘　有幸
地守りは冬の年貢にたんと干し　交調
腹の灸點わらひやむまではまち　枡水
角兵衞じしそばで小言をぬかす樣　龜水
分別はかうか湯殿は無分別　矢正
剃刀をへの字の穴へさして置き　龜水
新造の客ねむいのにじれッたさ　枡水

やあら旦那といへば下女わたしかの　交調
大黑の外を目がけるわるいやつ　同
罪なくて配所の月をつくだみる　同
その晩は片ねれに成るはたの足　まゝ成
ふく水盆にかへり内々で入れ　同
かはらけでこつさにかたる櫻艸　龜水
ほの〳〵に明石も須磨も作立て　鳳頭
琴箱の花時分行く下やしき　玉章
あくびの蓋を一本宛公家衆持ち　まゝ成
眞綿で首をつゝまれる恥かしさ　不醉
妾のは干しぶえのする土用干　鳳頭
けふも又留守でござると諸葛亮　完示
どこへ〳〵と猫の子に湯をあびせ　湯島
荒にぞあれし喰ひつみへ嫁はじぎ　左滿
ぶる〳〵物で名をのこす天王寺　春駒
へしに屠蘇預けて下戸は駈廻り　紀鳥
市に行きむすこ疊を負つて來る　青好
てこずるといふ傾城を淺黃買ひ　柳雨
あかるく歸り云譯はくらいなり　尾上
鯉のかんばん書いて出す向島　丸龍